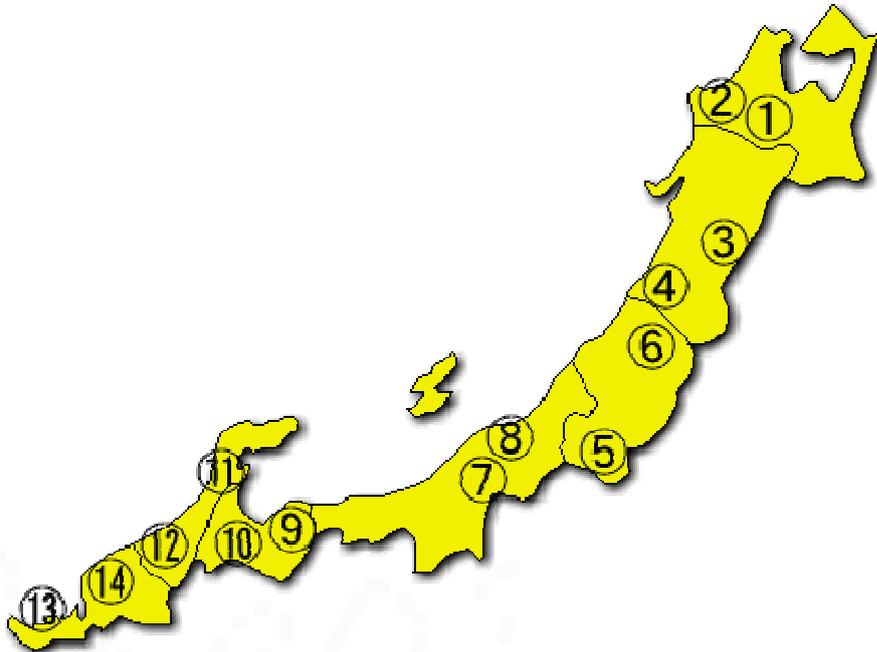
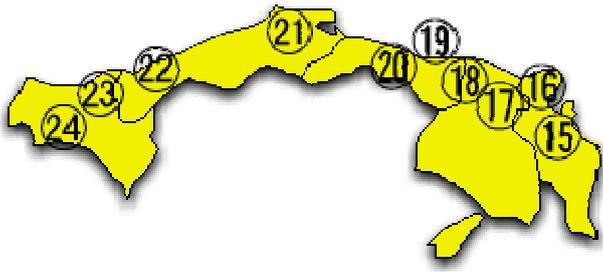


#### IV. 実践アドバイザーへのヒアリング結果



青森県	1. NPO法人尾上町蔵保存利活用促進会常務理事 佐藤正彦さん -----	6
	2. 白神倶楽部代表 笹森文城さん -----	11
秋田県	3. 秋田県七滝土地改良区事務長 藤岡義博さん -----	16
	4. 鳥海山にブナを植える会会長 須田和夫さん -----	20
山形県	5. 森の仲間たち代表 白壁洋子さん -----	25
	6. 共生のむら すぎさわ代表 栗田和則さん -----	29
新潟県	7. 三条ホテルの会会長 小林良範さん -----	34
	8. NPO法人にいがた森林の仲間の会前理事長 小林正吾さん -----	39
富山県	9. 夢想塾塾長 長崎喜一さん -----	44
	10. 砺波カイニョ倶楽部代表幹事 柏樹直樹さん -----	49
石川県	11. (株)御祓川チーフマネージャー 森山奈美さん -----	54
	12. 美川自然人クラブ 北野信行さん -----	59
福井県	13. ハスプロジェクト推進協議会事務局長 三浦正親さん -----	64
	14. 郷の森里楽 上野直之さん -----	69



京都府	15. NPO由良川流域ネットワーク副理事長 町井且昌 <sup>かつまさ</sup> さん -----	73
	16. NPO里山ネットワーク世屋理事長 飯尾毅さん-----	78
兵庫県	17. 南但馬の自然を考える会副代表 盛谷浩さん -----	83
	18. NPO法人上山高原エコミュージアム代表理事 小畑 <sup>こはた</sup> 和之さん -----	88
鳥取県	19. 鳥取市女性の森グループ代表 井関伸子さん -----	94
	20. NPO賀露おやじの会理事長 藤田充さん -----	100
島根県	21. もりふれ倶楽部事務局長 野田真幹さん -----	106
	22. 遊木民倶楽部会長 大島隆司さん -----	111
山口県	23. 阿武町林業振興会副会長 白松博之さん -----	116
	24. 梨下村塾塾長 永嶺克博さん -----	121

## 1. 尾上町型グリーンツーリズムを目指して —NPO 法人尾上町蔵保存利活用促進会



佐藤 正彦 常務理事

### 蔵と生け垣の町 尾上町

青森県尾上町は、黒石市と弘前市の間にある東西 9.3km 南北 3.7km の細長い小さな町だが、町内には全長 15km もの生垣がある。尾上町では、平成 4 年に『ふるさと尾上町の生け垣を守り育てる条例』（生け垣条例）を制定し、生け垣の新設、それに伴うブロック塀の撤去、そして生け垣の管理費に町が補助金を出している。

町を歩くと、確かに生け垣が多い。それもかなり丈の高い生け垣だ。

それともう一つ。蔵も多い。たいていの農家の敷地内には蔵がある。壁の表面が崩れている蔵もあるが、最近塗り替えた蔵も非常に多い。普通、蔵と生け垣がある景色といえば、城下町など市街地を想像してしまうが、尾上町ではリンゴの果樹園や田んぼのそばに生け垣と蔵がある。ちょっと不思議な光景だ。



(農家蔵：会のHPから)

### 佐藤正彦さん

尾上町の農協に勤めていた佐藤正彦さんは、農家の減少と後継者不足をなんとかしたいと考え、グリーンツーリズムに着目し「農家の所得を上げること、農業を多くの人に知ってもらうこと」を目的に修学旅行を誘致しようと考えた。ところが全国にライバルは多い。「地域を見直し、他市町村にはない、尾上町独自の魅力はないだろうか」と考えた時に浮かんだのが農家庭園であり、蔵、生け垣だった。終戦後、農地改革で自作農となった農家の中に、作物の保存や家財の収納場所として蔵を作るところが現われた。すると周りの農家も競って蔵を作り始めた。また、尾上町は造園業が盛んで庭（地元では“つぼ”と読む）作りが盛んで、庭園や生け垣も蔵と一緒に作られていた。「これだと思った」佐藤さんは、平成 14 年、仲間と『尾上町蔵保存利活用促進会』を立ち上げ、翌年 NPO 設立、8 月に法人化された。

「農家の代が代わり、生活が洋式化していくにつれ、蔵がどんどん壊されていく。壊されないまでも朽ち果てていく。これではいけない」佐藤さんたちの活動が始まった。やがて「農協という組織にいては、自分のやりたい活動ができない」と農協を退職。失業保険で自宅を改造して会の交流場所を作ってしまった。

### 尾上町型グリーンツーリズム

グリーンツーリズムの対象は中学生、高校生。修学旅行は毎年5月下旬から6月上旬に集中するので大変だ。依頼学校への受け入れ農家リストやプロフィール送付、賠償責任保険加入・受け入れ農家会議など事前準備作業もしなければならない。

グリーンツーリズムは平成14年、農家の仲間6人で始めた。弘前大学の谷口建教授の指導を仰ぎ「ファームステイ」事業としてスタート。最初は、農家のトレーニングも兼ねて大学生を受け入れた。終了後のアンケート結果は「まさしく感動」。農業と農村の関係を農家自身が知ることもなった。学生と農家とは、ファームステイ終了後も交流が続いている。そういう感動の交流ができる農業の形態はこれまででなかったし、農家の意識改革にもなった。これが起爆剤になって、現在、受け入れ農家は27軒。平成16年は船橋市と小樽市の中学生がやってきた。ただし、中学校の修学旅行となると、一学年250名以上になる。受け入れ農家は足りない。そこで佐藤さんは平成15年2月に近隣の弘前市、岩木町、



ファームステイでリンゴの収穫体験（会のHPから）

平賀町、浪岡町、尾上町の1市4町でファームステイのネットワークを作ってしまった。とてつもない行動力である。

18年度は5校810名を受け入れる予定。現在、受け入れ農家は80軒だが、佐藤さんは「来年は100軒にしたい。そうすれば一度に400が宿泊できるのでローテーションを組むことができ、農家の負担も減る」と張り切っている。

「長野県飯田市や本県の名川町は、行政がグリーンツーリズムの全面的な支援をしてくれている。でも尾上町にそれを期待することは難しい」と佐藤さんは嘆く。しかし、ここからが普通の人と違う。「自分たちでやれるものはやる。役所ができるものは役所で、できないものは民間で。役所がどう思っているかはわからないが、我々は協働の精神でやっている」と。

佐藤さんは、この間岐阜県の高山市と白川村に行ってきた。確かにきれいな観光地だったが「ちょっとがっかりした。生活のにおいがしない。地元の人に教えてもらったラーメンやそばの店は、とてもままずかった。商売が先に立っているのだろう」。そして「尾上町は、観光業者に振り回されないグリーンツーリズムで、農業を中心とした地域の活性化をしたい。それをきっかけに商工業者との連携、活性化も狙っていききたい」と考えている。「それぞれの地には、昔から培ってきた文化がある。人が来て金が入ればよい訳ではない」。

尾上町の場合も旅行代理店がない。グリーンツーリズムを継続的に実施していくために、学校を紹介してくれる業者の存在は不可欠だ。最初にファームステイにやってきた船橋市立二宮中学の場合も現地の旅行業者が世話をしてくれた。その業者とはファームステイを通じ、しっかりした信頼関係が出来

上がっているという。

### ファームスティは子供に感動を与える場

農業体験では、シールりんご作りの人気が高い。実ったりんごは大切な思い出だ。しかし、とても手間がかかる。でも、二宮中学だけは、いまだに学校に出向いて伝達式を行っている。「最初に来てくれた学校との関係は大事にしていきたい」からだ。今年も11月に行ってきた。行くと大歓迎だ。校長先生が父母を呼んで交流会を開いてくれた。

シールりんごは、10月にりんごを袋から出して日光に当てる時にシールを貼る。実ったらそのまま学校に持っていき生徒に剥がしてもらおうのだが、その時が盛り上がる。



シールりんご 文字の部分は色が薄い

子供たちの中には、翌年卒業してから高校進学の記事に青森にやってくる子もいる。ファームスティは「この子達の人生を変えるような経験になっているのではないかと佐藤さんは思う。

やってくる中学生の中には、いじめをする子や茶髪の子などの問題児童がいる。でも、ここに来ると変わる。嬉々として農作業をしてくれる。見ている先生が驚いている。「今の都会の子供たちは孤食、カギッ子、テレビゲームなど人と交流し感動を味わう機会がとても少ない。ここに来て大家族の中でご飯を食べるのは新鮮な体験なのだ」と佐藤さん。「翌日の別れの時は、子供たちは皆泣いている」「ある子供は、届いたシールりんごを仏壇にお供えした。親がそれを見て本当に驚いた」らしい。髪を黒に戻した茶髪の子もいる。一番うれしかったのは「中学3年生が高校受験の面接で、中学生活で一番うれしかったことを聞かれ、全員が尾上町でのファームスティ体験をあげたと先生から聞いた」とき。

佐藤さんが考えるファームスティの目的は、

1. 農家の所得確保
2. 農協への委託販売形式依存体質の是正
3. 心の教育・食農教育の実践
4. 都市と農村共生推進

だ。「自分で販路を拡張していけない農家は、やがて淘汰される」。この考え方は、農協職員だった佐藤さんとは相容れない。農業について愚痴を言う人は大抵販売先が農協。農業に熱意のある人は自分の販売先が確保されている人だ。「目標のないところには人が集まらないし、後継者も育たない」。「農家民泊をやった農家に、やってよかったと思ってもらいたいし、実際、一度やったら病みつきになる」とも話す。

また、同中学校生徒に受入前後のアンケート調査を実施した。『農業と食料の大切さ』の項目は、ファームスティ前48%・後70.6%に上昇。農作業体験の内容は、『大変良かった・良かった』も含め90.3%、『農業はつまらない』の項目は15.3%であったが、1.4%に激減している。『人があたたかい』は64%が89%に上昇している。ある生徒は、「今回のファームスティで、日本の農業の大切さを改めて理解できた。農家の人の温かい心を感じることができた。帰りたくなかった。もっと居たかった。」と感想を記述しており、まさに心の教育・食農教育の実証となった。

### NPO 法人の自立を目指して

NPO の活動費は、会員の会費と寄付金、観光農業の参加料とファームスティの斡旋料と県からの助成金など。ただし人件費は稼げない。だから佐藤さんはボランティア。「ここに課題があります。できれば自立したい」と考える佐藤さんは、平成 20 年に目標を達成するため、今、修学旅行生倍増計画を模索中だ。「弘前大学の大学院生がうちのグリーンツーリズム活動にはまっている。修学旅行生徒が 2,000 人になれば、彼を事務局として雇うことができるのだが」。

平成 18 年 1 月、尾上町は平賀町、碓ヶ関村と合併して平川市になる（取材は 17 年 12 月）。町が市になれば、いろいろ変わることもある。でも「町が市になったからといって、我々の活動が変化するものでもない。自分たちができることを率先してやればよい」と佐藤さんは言う。

## 行政に望むこと

青森県の事業、県営垂柳・猿賀地区田園空間整備事業で、文久 2 年（1862 年）建造の蔵が「蔵拠点施設」に採択された（19 年度着工予定だが流動的）。これは佐藤さんたちの活動を評価してくれて、県から町に逆指名で指定された経緯がある。

蔵は個人の所有物だが、確実に地域資源である。個人の所有物に税金を出しにくいのは、町だけでなく県も国も同じだが、行政が負担して保存していかなければ、町の財産、オンリーワンの地域資源がどんどん減っていくだけだ。

グリーンツーリズム推進総合対策の事業に「やすらぎ空間整備事業」というのがある。茅葺屋根などの農村景観を維持再生することを目指すもので、蔵の補修にも使えるのだが、ただし実施主体が市町村か農協で NPO 法人は入っていない。ここが問題。何か方法はあるかもしれないが、「我々にやらせてくれば、確実に地域が変わります」と佐藤さんは力説。また、蔵は登録有形文化財に指定されたが、この



蔵活用のイベント（会のHPより）

の制度は補助金につかない。「所有者が勝手に保存してください」というのでは制度を活用する意味がない。

「そういうことも、実際かかわって初めてわかったこと。機会がある毎に、いろいろなところに参画して、事業主体者に NPO 法人を付け加えてほしいと法令改正をお願いしている。NPO 法人が行政の手助けをし、実績が各地であがっていると評価され、法的、社会的に認知されてきてはいるが、まだまだ農協など既存の公益法人までには評価はされていないのだなあ」と実感している。

「まあ、考えてみれば、短期間でここまで成果が出たからよかった。これがもし成果がでなかったら、農家や蔵所有者がどう思っただろう。マスコミや行政から評価されたことで会員が成果を実感してくれたのではないか」。

「今後は、活動がマンネリ化しないように、常に新しい企画に挑戦していきたい。まあ、やってみてダメなら軌道修正すればよい。これが民間の良さかな」という考え方もよい。

## がんばれ！佐藤さん

佐藤さんは「NPO 法人尾上町蔵保存利活用促進会」の常務理事だ。代表理事の小野正博さんは、ファームスティの受け入れ農家。「受け入れ農家の人たちは自分たちの仕事があるので事務局は無理。だ

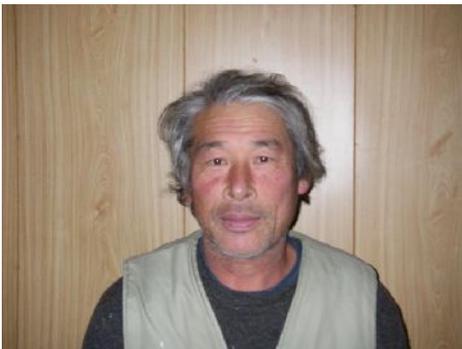
から私がその仕事をしている」と佐藤さん。

もちろん、佐藤さんの周りには、ファームスティ部会長、収穫体験部会長などの部会があり、それぞれ責任者がいる。彼らも受け入れ農家であり、この活動のコア推進者だ。また、農家への連絡体制として、キャップを決めファックスで流す体制をとっている。町内会の班のようなものだ。

でも、佐藤さんにかかる負担は大きい。「平成 20 年の目標を達成して、是非弘前大学の彼を事務局に迎えたい」。そのための佐藤さんの挑戦は続く。

この後、尾上町の蔵をいくつか見せてもらった。本当に蔵が多い。生け垣も多い。しっとりと落ち着いた雰囲気だ。しかし、よく見ると、保存されている蔵や生け垣ばかりではなく、外壁が剥がれ落ちている蔵もある。生け垣がコンクリートブロックに変わってしまった家もある。「息子に代替わりした時にブロックになってしまうことが多い」そうだ。蔵、生け垣という地域資源に、農家民泊・農業体験というソフトを加えて自立する農業を目指す佐藤さんたちの活動は、今後ますます盛んになるであろうグリーンツーリズムのお手本だ。

## 2. 楽しいことをやっていくことが地域づくり — 白神倶楽部



笹森 文城 会長

### 世界遺産『白神山地』と深浦町

青森県と秋田県にまたがって広がる白神山地は、平成5年、鹿児島県の屋久島とともに日本で最初にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界自然遺産に登録された。

日本には、現在、3つの自然遺産と10の文化遺産が登録されている。白神山地は、人為的な影響をほとんど受けていない世界最大級の原生的なブナ林が分布し、この中に多種多様な動植物が生息・自生するなど貴重な生態系が保たれている（『白神山地ビジターセンター』パンフレットから抜粋）。



深浦町から見た冬の白神山地

白神山地約13万haのうち、中心部16,971ha（うち青森県側12,627ha、秋田県側4,344ha）が世界遺産に登録されている。

世界遺産のエリアは、中心部の核心地域（コアエリア）と周辺部の緩衝地域（バッファエリア）に分かれている。核心地域は開発や利用が厳しく制限されている地域、緩衝地域は、昔から人が山の恵みを楽しんでいた地域で、人と自然が共存していくエリアだ。

特に、核心地域への入山は、登山は届け出制、それ以外の学術研究や取材などは許可制（登録当初はすべて許可制）になっている。

ただ、面白いことに、白神山地は国立公園ではない。白神岳周辺が国定公園になっているだけだ。このため環境省は自然環境保全地域、林野庁は森林生態系保護地域の網をかぶせた。

白神山地の最高峰は向白神岳だが、その標高は1,250mで決して高くはない。しかし、世界遺産のエリア内には車で入ることはできない。手前の林道終点から登山道を歩く。その登山道も整備は十分でなく、本格的な登山装備が必要だ。

その白神山地最高峰、向白神岳や白神山地を代表する白神岳への登山口があるのが、青森県西津軽郡深浦町である。登山口は二つ。津軽国定公園『十二湖』からのコースと、JR五能線のその名も『白神



白神岳登山口 写真の左はすぐ海

岳登山口駅』からのコース。白神岳は、平地から眺めるとなだらかな姿をしているが、登山口は海拔 300m 弱。したがって標高差は約 1,000m、それも急登を有し 4 時間かかる難コースだ。知らずに観光気分で訪れた観光客は恐れをなして逃げ帰る。

## 白神倶楽部誕生

その白神岳山頂に、登山者のための『白神岳避難小屋』が建っている。無人だが、小屋の中にはシュラフも用意され、登山者にとって命の綱的存在である。

その小屋を作ったのが『白神倶楽部』のメンバーだ。



白神岳避難小屋（ハローネットあおもりHPから）

昭和 59 年 12 月、白神岳に山小屋を建てようと、地元の有志で『白神岳避難小屋設置準備会』が結成された。建設費は 4,500 千円。当時の岩崎村から補助を受け、そして全国から寄付を募って昭和 60 年に木造 3 階建ての山小屋が完成した。全国からの寄付金は 1,850 千円に達し、小屋の 3 階には寄付をしてくれた全員の名前が墨書きされている。

白神岳避難小屋設置準備会は、設立当時は「小屋ができたなら解散」と規約で決めていた。しかし、小屋は作ったあとも「管理をしていかないといけない」と

いうことで準備会のメンバーが中心となり、昭和 61 年に白神倶楽部が設立された。当初全員が村民だったが、今では弘前の人も参加している。

避難小屋は、ずっと倶楽部で管理運営していた。しかし、平成 16 年の冬の大雪で小屋の屋根のトタンが剥がれ落ちたのを、倶楽部で加入していた保険も活用し修理を行ったのをきっかけに、平成 17 年 3 月 31 日、岩崎村に寄付をした。村はその日、隣の深浦町と合併したが、小屋の寄付は、倶楽部から町への合併祝いのプレゼントとなった。

小屋の建設、修理と簡単に言うが、材料はヘリで運ぶとしても、大工さんたちは、急坂の狭い登山道を延々と登っていかなければならない。「途中で引き返した大工さんもいた」らしい。

白神山地が世界遺産に登録されて以降、NPO、NGO をはじめたくさんの自然保護のグループができたが、白神倶楽部は、それらの老舗的存在だ。

## 白神倶楽部の活動

白神倶楽部の現在の会員は 29 名。「知らないうちに、いつの間にか増えてしまった」。会社員、森林組合、自営業、役場職員。旧岩崎村長（現深浦町助役）も会員だ。会長の笹森文城さんは 3 代目。「ただし、会もだんだん高齢化している。若い人は山に登りたがらない」のが悩み。

メンバーのうち 13 人は、林野庁（東北森林管理局）の白神山地世界遺産地域巡視員としてボランティアで活動している。主な仕事は、登山道の整備や巡視、自然環境保護のための監視活動、そして小屋の管理だ。厳しい自然の中にあるので、小屋のペンキの塗り替えは必需。また、春山登山の人たちは積雪のため 3 階の窓から小屋に入るのだが、凍って窓が開かずやむを得ず窓枠を壊して入る人もいる。この修理も大切な仕事だ。

白神山地はブナの原生林。ということで、きのこもたくさん出る。「採っちゃだめなんですよね」と

意地悪で聞いてみると「核心地域はもちろんだめ。でも、山は昔から地元の人々の恵みを支えてきた。だからそういう場所は緩衝地域に線引きしている」ということだった。行政もちゃんと考えている。

深浦町からは登山道の管理（刈り開け）も委託されている。建設業者などに任せれば簡単だが、山に詳しくない人たちが刈り開けをすると、登山道脇の大切な花も刈ってしまうことがあるからだ。

白神岳登山口から白神岳への登山道は、かつては尾根沿いのルートだけだった。しかしこのコースは山頂付近がものすごい急坂になっており、健脚者以外はとて登れた登山道ではない。そこで倶楽部では『マテ山』を迂回するコースを作った。

また、白神山地を取材に訪れたマスコミの案内や、町内の『サンタランド』の宿泊客に対する山岳ガイドなどをやっている会員もいる。あとは、大崩山の登山大会。それから県などの調査への随行。

「白神倶楽部の活動は個人の活動が多い。個々人の思想や考え方には介入しないようにしている。第一うちの活動は、とって地味なものです」と事務局を預かる町役場職員の神林友広さんが笑う。

### 自然保護をする活動ではなく、結果として自然保護になる活動

こう書くと、白神倶楽部は、自然保護と登山を愛する行者の集いのように感じられるが、実は倶楽部の最大のイベントは「不定期に開催される飲み会」だそうだ。倶楽部主催のもの、それ以外と年に何度もイベントがある。倶楽部員は嬉々として参加するが、そのココロは、終わった後の打ち上げ。

白神倶楽部には、事務局の建物が存在する。会員が所有している土地にコンテナを買って据え付け、中を改造して使っているのだが、中は、どう見ても「居酒屋状態」。机の上には焼酎のペットボトルとつまみの残骸、壁には10人以上のシュラフがかかっている。壁に貼られたポスターや会の行事の掲示板がなければ、とても事務局とは思えない。実際、取材翌日は、会の忘年会が開催されることになっていた。

全国的に知られるグループなので、自然保護団体などから一緒にやろうと誘われたり、フォーラムに参加してほしいと頼まれることも多い。「出る場合と出ない場合があるけど、あまり出ないようにしている。自然保護への熱意はあるけど、振り回されたくはない」というのは笹森会長。これも会の性格だ。

「うちは自然保護団体ではありません。会員が楽しいと思うことを会員が自分でやる。それを会が応援していく。結果的にそれが山を守ることになっているのではないかと」と神林さん。倶楽部が20年も続き、会員が増えている秘訣は、この「身の丈活動」にあるのではないかとと思う。



コンテナ改造の事務局（上）  
内部はまさしく居酒屋（下）

### 白神は恵みと不思議の山

白神山地は海が隆起してできた山だ。山からは貝の化石がたくさん出る。また、泥岩でできているので、年月の間に崩れる。このあたりの山の木は丈が短い。しょっちゅう崩れては再生しているからだ。

「自然を知る場合は少なくとも20年位は同じ場所に通わなければわからない。山には数年毎の自然

のサイクルがある。これを何回か経験して初めて自然がわかる。最近は2・3年の山歩きをすると、すぐ名人と言うようだが、そういう人は数年も経つと行き詰まる。山菜やブナの実も毎年豊作ではない。このサイクルを理解するために20年程度必要」なのだそうだ。



ブナ林（青森県自然保護課のHPから）

「熊は一人で歩いている限りは、威嚇しなければ襲ってこない。こっちが声を出さず黙っていると、熊も困ったような顔をしている。それから熊はブナの実が豊作の年はドングリの実をほとんど食べない。ドングリのアクの強さは熊もわかっている。今年はブナが不作でドングリが豊作だったようだ」。山を知るといことは、こんなことなのだ。

「木を切ると日当たりがよくなって、2～3年は圧倒的に食料が豊富になる。そうすると熊が増える。計画的に伐採していかないと熊の生態系も壊してしまうことになる。山は資源が豊富だといわれるが、それは今いる動植物を維持するための量だ。だから人為的にどこかのバランスを崩せば、山全体のバランスが壊れてしまうことになる」とも言う。

「世界遺産になる前の白神山地の魅力は、山の幸だった。米と味噌だけ持って登り、あとは現地調達。山菜を採り、岩魚を釣って食べるのが楽しみだった」。日本で有数の登山家も白神山地に登りに来る。白神の森の自然にひかれるのだろう。「太古の、まだ斧の入っていない山に登る快感は最高」なのだそうだ。

### 世界遺産は観光資源にならない

白神山地は世界遺産になったが、観光資源としての価値は高くない。第一車で山には入れない。登山道はきつい。弘前側からは川沿いにある程度入ることができるのだが、道が狭く曲がりくねって観光バスの運転手泣かせだ。ということで、弘前側からの観光客は年間10万～15万人程度。十二湖から白神岳を眺める観光客も年間30万人ほど。世界遺産を見たいという人はたくさんいるが、つらい山登りをしてまで見たい人はそんなにいない。白神岳への登山客に至っては年間4千人程度にすぎない。それも登山者はテント持参か駐車場に止めた車で寝る人が多く、余計観光にはつながらない。秋田県側は全面入山禁止で登山道さえない。

「白神山地は、たとえば岩木山のように、美しい姿の山ではない。遠くから見ればごく普通の山だ。厳しい登山道を登って山に入り、自然の森に接して初めて価値がわかる。だから白神岳を観光資源にすることは難しい」と神林さん。

「白神登山の魅力は、山頂をきわめることではなく、森を縫って歩く楽しみ。それも道なき道を歩くこと。私は登山道を歩くよりも森の中を歩くのが好き。道のないところを自分の力で歩いていくのだから、一回の登山でそんなに広い範囲を歩くことはできない。恐らく一生かかって一つの沢を制覇できるかどうかだ。たぶん、誰も入ったことのない沢もきっとあると思う」白神を知り尽くした笹森さんでもそうなのだ。白神の自然の深さを感じる。

## 『身の丈活動』を目指せ



倶楽部の要 事務局担当 神林友広さん

白神には、いろいろな人が訪れる。世界的に有名な登山家、動植物学者、歴史学者も来る。もちろん芸能人が取材に訪れることも多い。これらの人たちを案内するのも倶楽部員だ。倶楽部員は、彼らに自分たちが山で得た知識を伝える。それは経験に裏打ちされた知識だからとても価値がある。それで交流が生まれていく。だから笹森さんをはじめ皆さん、全国にネットワークがある。飾らない純粋な活動が、白神の自然と同様、多くの人たちに共感を与えている。

世界遺産登録後、白神にもガイドが登場した。「白神マタギ舎」のような組織もある。だけどガイドだけで生活することはできない。また、ガイドも登山道を案内するだけではなく、白神の生い立ちや自然の営みなど白神すべてを知らないと本来ガイドはできないものだ。

白神倶楽部は、自分たちのスタイルを守りながら、これからも楽しく『身の丈』の活動を続けていくことだろう。

### 3. 『森を守り水を育む』とは―秋田県七滝土地改良区



藤岡 義博 事務長

#### 清らかな水の町 美郷町

秋田県美郷町に秋田県七滝土地改良区を訪問した。美郷町は、2004年11月、六郷町、千畑町、仙南村が合併し誕生した人口23千人、秋田新幹線大曲駅から車で20分の町である。冬期間の積雪は山間部で2mを超えるというが、訪問した12月初旬は、刈り入れをすませた田がゆったりと広がっていた。七滝土地改良区のある旧六郷町は、清水の町として知られ町内には60カ所を超える清水がある。昭和60年、六郷湧水群は、環境庁から全国名水百選に選定され、平成7年度、国土庁から「水の郷」に認定されている。

六郷の豊かな水を育んでいるのが七滝山である。七滝山で生まれ、地下涵養され湧きでた清水は、昔から地域の飲用水であり、野菜を洗い、また天然の冷蔵庫として活用するなど、住民の生活に潤いを与え、なくてはならない役割を果たしてきた。



(美郷町 HP から)

#### 我が国最大規模の水源涵養保安林をもつ秋田県七滝土地改良区

七滝山は、明治30年水源涵養保安林に指定され、以降森林所有と用水の一体管理が行われてきた。

七滝土地改良区の保有する水源涵養保安林面積は251haと、我が国最大規模であり、全国でも珍しい土地改良区である。

(他の水源涵養保安林を有する土地改良区の例としては、岩手県寒妻穴堰土地改良区が約200ha、熊本県幸野溝土地改良区が125ha所有しているなど)

七滝土地改良区の水源地涵養保安林のうち、杉の人工林が46%、天然広葉樹林が54%となっている。

以前は、杉の販売代金で、土地改良区の運営資金に充当してきたが、ここ4～5年は、木材価格低下



七滝山 (七滝土地改良区 HP から)

のため、杉の伐採はしていない。現在の森林維持管理費用は年間百万円程度であるが、木材価格が高かった 25 年ぐらい前には、年間 10 百万円使っていたこともあったという。

しかし、森林の管理面からみれば、杉林の方が管理に手間がかかるが、ブナなどの広葉樹林は植え放しでよいほど地域の気候に適合していると、藤岡事務長は言う。

### 七滝保安林の歴史と用水管理

寛文 3 年(1663 年)、七滝山は水不足のため、「水野目山」として禁伐林とされたが、寛政 12 年(1800 年)、17 ケ村が藩より買い取り水源山林として用水管理を行った。

「水野目山」とは灌漑用水確保のために利用制限されていた森林であり、伐採や下枝も刈ってはならないことになっていた。「六郷町では現在でも生活用水のほとんどを地下水でまかなっている。地下水の水位に影響を及ぼす森林の利用方法には昔からかなり気を遣ってきたのでしょ」と藤岡さんは言う。

七滝山は明治 30 年水源涵養保安林に指定され、昭和 24 年、「普通水利組合」から「秋田県七滝土地改良区」と組織変更し、農業用ため池と用水を合わせた現在の七滝用水系態が確立された。昭和 44 年、それまでの 1 市 1 町(旧 17 ケ村)の共有山林から、県七滝土地改良区に所有権が移転され、現在に至っている。

七滝土地改良区組合員数は 1,300 名。「七滝用水」は、旧六郷町の丸子川上流の頭首工により取水し、水田面積に応じ 7 本の水路に配分している。その受益耕水田の面積は、美郷町、大仙市(旧仙北町、旧大曲市) 2 市町の 1,557ha に及ぶ(平成 17 年 5 月末)。

用水の利用は、5～9 月の灌漑期と 10～4 月の非灌漑期に分かれるが、冬期間の消雪水、防火用水用など農業以外の雑用水としての利用も多く、非灌漑期の管理の方が水路のゴミ詰まり監視など大変である。

7 水路の管理費は、職員人件費を除き年間約 250 万円。

会員は、受益面積応分の形で年間 1,920 円/10a を負担しており、この近辺の利用料金の中では最も安いという。

七滝土地改良区の管理するため池、頭首工、水路には耐用年数がある。それをいかにうまく維持管理し、耐用年数を伸ばしていくかも、豊かな水を安価で安定的に供給していくための課題となっている。安全な水を安定的に流していくため、水路等の巡回を強化する中で、先手先手の管理設備のチェックやメンテナンスが必要である。こうした機器に使用する油関係も植物性の油を使うなど、日常のメンテナンスにおいても環境に配慮している。

### 「森を守り水を育む」とは

七滝土地改良区では、「森を守り水を育む」を合言葉に、七滝水源涵養保安林が自然のため池であるという基本的考え方に立って、林道整備・管理などの国、県の支援も得て、長年にわたり、ブナやケヤキ、ダケカンバなどの広葉樹の植樹をはじめとする治山治水事業を行ってきた。



” 円筒型サイフォン式分土工から流れ出る水”  
(七滝土地改良区 HP から)

藤岡さんは、「ブナの巨木は 400 年の間、自然の法則に従い成長した。水源涵養保安林は、あまり手を加えないで、自然にまかせ自然を大事にしていくのが一番だ」、「水が蒸発しないよう、地肌を覆ってやることがなによりの水源涵養であり、生えた草も大事にし山の地肌を出さないことが大切である」、「草はちゃんと役に立っている。除草剤を使えば草を枯らしてしまうし、地中の微生物も殺してしまう」と身を乗り出して話す。

ブナだけで山は成り立っていない。草があり、腐葉土が積み重なり、微生物があつてはじめて、山に水が保たれ、きれいな水を生んでいくという藤岡さんの話に、『自然の山を守ることが豊かな水を育てる』とはこういうことかと、目を洗われるような思いがした。



“七滝山”のブナ林”



“七滝山”を流れる溪流”

(七滝土地改良区 HP から)

東北農政局の観測データによると、七滝保安林から出る水量は、以前と変わりなく、環境汚染の影響はほとんど受けていない。この状態を維持するには、過度に人の手をいれず、自然のバランスが崩れないようにすることが大切というのが、藤岡さんの考えである。

### 七滝土地改良区と環境保全

現在、七滝土地改良区の組合員は農家が大半をしめ、農業用水としての利用が大部分である。

後継者難などから農家数が減少していく中で、長期的には、七滝用水を農業用水ばかりでなく、雑用水的に使う「環境用水」のウエートと重要性が増してくると予想している。このため、農家以外の住民を巻き込み、行政と一体となり色々考えていかねばならない。

農業用水以外の利用ウエートが増えていく中で、きれいな水を維持するためにも、環境に配慮した水管理を推進していくためにも、農家も非農家も含めた環境保全への理解と協力の重要性が増していくと考えている。

都会の子は蛇口をひねれば水が出ると思っているし、美しい水に恵まれた美郷町の地元の子も水はタダと思っている。何よりも大切なのは、自分達が暮らす環境に関心を持つことであり、七滝土地改良区は、地域の用水の大切さ、豊かな水を育む環境の大切さを知ってもらう取り組みが重要と藤岡さんは考える。

ご飯粒 1 つでも捨てないで大切にしようという気持ちや、ゴミを捨てない、生活排水やゴミを減らすなど、身近な生活のあり方が自然環境保全につながると、藤岡さんはことあるごとに言っているという。

住民のゴミ処理への取り組み姿勢や、町民をあげての地域美化運動参加など、日常生活そのものが水の保全につながっていく。

七滝土地改良区は、川崎市二ヶ領用水(昭和16年完成の円筒分水工)の視察を行った。昭和16年当時、農業用水として使われていたが、現在は都市の環境用水として使われ、川崎市民に親しまれ、水の大切さの理解浸透に大きな役割を果たしている。二ヶ領用水は、以前は汚染されていたが、現在は、地域住民の努力の結果、魚が棲めるくらいきれいになったという。

七滝土地改良区が近年力を入れているのは、小・中学校の環境・自然教育活動との連携である。

今年8月、つくば市内37小学校の5年生代表37名とつくば大学の先生方、総勢約50名が参加して、水環境学習を体験した。小学校3、4年生では自然環境の大切さを理解するのはやや難しく、5年生がちょうど良い年齢という。今年で6年目を数える。

水源の森では、自然に育った30～50cmのブナの幼木を採集して学習用に提供する。苗木は、それが育てられた山に植えるのが一番良いと子供達に教える。

ブナの大木に聴診器を当てブナが水を吸い上げる音を聞いたり、ブナ林の地面が腐葉土により水を含んだスポンジ状になっているのを見て驚いたり、子供達には、ブナ林の生態系に直接ふれるこれまでにない体験となっている。

秋田県内学校の水環境学習体験は、現在のところ2～3校にとどまっており、今後、県内校の増加にも取り組んでいく必要があるという。



写真：つくば市内小学5年生の植樹体験風景（七滝土地改良区「ななたきたより」より）

### きれいな水を守るために

「環境の保護・保全」は、とても難しいことのように思われる。しかし、それは実は身近なことであり、先人が営々と培ってきた以前からある豊かで優れた環境に感謝する気持ちから始まる——と藤岡さんはいう。

「七滝保安林を守ることは、地域の環境と水体系を守ることにつながる」という使命の元、地道な活動を続ける七滝土地改良区の取り組みに期待したい。

#### 4. 長続きする身の丈に合った活動を目指して―鳥海山にブナを植える会



須田和夫 会長(左側)

佐藤文夫 副会長(右側)

#### 日本海と鳥海山に抱かれた「旧象潟町」

「鳥海山にブナを植える会」は、鳥海山一帯にブナの木を植えブナ林を再生させる息の長い取り組みを多くの仲間と展開している。「鳥海山にブナを植える会」会長須田和夫氏と副会長佐藤文夫氏のお二人から、にかほ市象潟公民館でお話をうかがった。当日は、新潟から羽越線に乗り継ぎ、吹浦駅からタクシーで象潟に向かった。「このあたりは秋田県でも雪は少ないが一番風の強い地域」という話であり、国道7号を走る車中からも風力発電を目指す風車がそこかしこに見られた。

(象潟を訪問した約2週間後、JR 羽越線特急いなほ脱線事故が起こり、冬の日本海の風のすさまじさを改めて思い知らされた。)

山形県県境に位置する「にかほ市」は、平成17年10月、仁賀保町、金浦町、象潟町が合併し誕生。

「鳥海山にブナを植える会」の活動展開のベースである旧象潟町は、「象潟や雨に西施がねぶの花」と芭蕉が詠じた美しい海岸線と出羽富士の愛称を持つ鳥海山で知られ、中でも鳥海山は、地域の人が日々仰ぎ見る山として、住民の生活に溶け込んでいる。

鳥海山は平野部に近く、林道整備が容易で運搬の便が良いことから、戦前、戦後を通じて、合板用、枕木用、パルプ用として、ブナ林の伐採が急速に進んだ。鳥海山東側の矢島地区には木材運搬用のトロッコ線路も敷設されたという。

世界自然遺産に指定された白神山は、林道等の便が悪いため自然林が残ったのではないかと須田会長は話す。

まず、国有林からブナの伐採が始まった。

国有林の伐採跡地はそのまま放置された所も多かったが杉や落葉松等の植林も行われた。植栽地は、営林署が直接管理・伐採するエリアと分収林(ぶんしゅうりん)制度エリアに分けられ、杉林への切り替えが進められた。分収林制度は、国有林を民間に運営させ、伐採した木の収入の一定割合を民間の収入とする制度である。集落単位で分収林制度に参加し植林した。里地、里山の標高300m～800m 亜高山帯でブナ林の伐採が鳥海山で進んだ。さらに、昭和30年代には、高度経済成長に伴い木材需



鳥海山(にかほ市 HP から)

要が急速に増大したため、国有林や民有林での木材の増産、天然林の伐採と人工造林を進める拡大造林等が積極的に推進された。標高 300m～1100m の高さまであった鳥海山のブナ林の伐採が進み、その多くは杉林に替わっていった。その結果、ブナ林はわずかに残されたにすぎない。

### 「鳥海山にブナを植える会」スタート

1994 年 1 月、地域の稲作生産者グループ「あいがも友の会」の会合で、佐藤文夫さんが「鳥海山にブナを植え、かつてのブナ林を取り戻そうではありませんか。これが私の夢です」ともちかけたのが、「鳥海山にブナを植える会」スタートのきっかけである。

佐藤文夫さんは、東京で小・中学校の理科教員を 30 年余り勤めた後、1992 年から、故郷の秋田に帰り、自然豊かな象潟での生活を始めていた。

「鳥海山のブナの森を再生したい」という佐藤さんの夢に、須田さんを先頭に多くの人々が共感し 1994 年 7 月、「鳥海山にブナを植える会」が誕生した。発足時の会員数は、一般会員 139 名、個人賛助会員 31 名、団体賛助会員 4 に上った。佐藤さんは、「鳥海山を愛する人達は、鳥海山のブナの自然林を失ってみて心の中にすき間が空いたようになっていた。失って初めて、ブナの森の豊かな恵みや美しさが見えてきた」（「鳥海山にブナを植える会」10 年の歩み）と、発足当時の呼びかけの輪の広がりを振り返る。

### 「鳥海山にブナを植える会」の概要

「鳥海山にブナを植える会」の概要は次の通りである。

#### ●目的

1. 鳥海山一帯にブナの木を植えブナ林を再生させることを目的とする。
2. ブナの木を植えることによって自然の恵みと生命を愛する喜びを知る。

#### ●会員、事業規模

現在の会員数は 667 名（秋田県内約 80%、秋田県外 20%）。農業関係者、漁業関係者、食の安全に取り組む主婦グループ、サラリーマン、自営業など、会員は多種多様である。漁業関係者では、「豊かな海は山づくりから生まれる」と、漁協象潟支所の若い漁師の勉強会（水産学級）が団体を参加している。

会の年間事業規模は 200～300 万円で、会費収入（会費：1 口最低 1 千円以上）120～130 万円と助成金・寄付等 50～100 万円により運営されている。

#### ●植樹地域

「鳥海山にブナを植える会」は、旧象潟町、旧矢島町と、植栽する区域、植栽後の管理、植栽樹木の保存などに関する『緑の森づくりに関する協定書』を締結し、鳥海山内の公有地にて植樹活動を実施。

#### ●植樹本数

2005 年度のブナの植樹本数は約 500 本。会発足後 10 年間は、植樹本数増加を目指し、年間 1 千本を上回る植樹が行われ、2002 年度の植樹本数は 3 千本を超えた。しかし、設立 10 周年を契機に、活動のあり方を見直し、2004 年度からは年 500 本をベースとした植樹本数に絞り込んでいる。

### 地域への活動の広がり

近年、「鳥海山にブナを植える会」の植樹活動に合同で参加していた学校や企業などの団体が、独自に植樹活動を行う動きが強まってきている。企業、学校、ボランティア団体などが独自のプログラムで

植樹活動を行うことは、会の負担が軽くなることにもつながる。

こうした団体等の植樹には、会が全面的に協力している。例えば、団体が独自に植樹しようとしても、ブナの苗は植樹日に合わせていつでも購入できるとは限らないため、「鳥海山にブナを植える会」は、会独自で育てている苗を提供したり、こうした団体等に安価な苗を供給するため業者との仲介ができる体制をとっている。

植樹会では、会の植樹本数の約半分は独自で育てている苗、残り半分は購入苗となっている。購入苗は1本450～500円と市価よりかなり安く業者から分けてもらっている。

最近、ブナの植樹に力を入れているのが、総合学習、環境教育に取り組んでいる学校関係である。仁賀保高校を始め、地元小・中学校、矢島中学校、由利高校などがブナの植樹活動に参加している。その他、なんとか生徒に植樹を体験させたいと、飛び入り参加の学校の申し入れも増えている。会員の先生が転校したり、他の学校の先生に勧めるというケースもあるようだ。

中でも、仁賀保高校は、それまで「鳥海山にブナを植える会」の植樹に参加してきたが、平成12年度からは1年生を対象に独自のプログラムで実施。旧象潟町、「鳥海山にブナを植える会」と「緑の森づくりに関する協定書」を締結し、教育の一環としてブナの植樹活動へ本格的に取り組んでいる。

#### 仁賀保高校の植樹体験 (秋田県立仁賀保高校 HPから)



企業サイドでも独自のプログラムで植樹活動を行う先が出てきている。TDKは、夫婦・子供など約180人が参加し、独自で植樹を実施した。関連する会社へも呼びかけ、グループとして推進していく方向を目指しているという。

これらのエリアは「TDKの森」「学校の森」と名付けている。

「頭で環境や自然保護の必要性や重要性は理解していても、実際に体で経験するとまるで違ってくる。汗をかき本当に大変だったが、終わって振り返れば楽しい経験というのが大切」と須田会長は話す。ブナの植樹を体験した子供達が大人になった時、自然環境を大切に思ってくれるのではと期待している。

#### 長続きする身の丈に合った活動を目指して

「鳥海山にブナを植える会」は、2004年、発足10周年を契機として活動のあり方の見直しを行った。鳥海山の豊かなブナ林を再生する自分達の活動をできるだけ長く続けたいという強い意見が多かったという。

須田さんは、

○ブナの巨木まで育て上げるには、200年、300年という長い期間がかかる。鳥海山のブナ林再生には世代を繋いだ息の長い取り組みが必要である。

○「鳥海山にブナを植える会」の活動は1日だけのイベント植樹活動では終わらない。種拾いから始ま

り、育苗、植樹に加え、下刈り、草刈りなど植えてからの管理が必要である。植樹した後は何もしないでは無責任である。

○鳥海山にブナを植える一連の活動は、1人、2人ではできない。何人かのグループで継続的に行うことが必要である。

○会員各自が農業など自分の仕事を抱えている。自分の仕事を抱えている若い人は、参加はできるが、指導までは難しい。会員の仕事に支障をきたさないものでなければ活動は長続きしない。

——と、会をまとめていく立場の思いを語る。

まず、活動の規模を見直し、年500本程度に植樹本数を絞り込むこととなった。長く続けるためには、年間500本の植樹をベースとし、丁寧に管理していく方針へ転換した。

一時期、年間2～3千本植樹していた年もあったが、会の活動としては無理があった。無理が積もれば、会の活動は破綻すると須田さんも考えている。身の丈に合った地に足が着いた活動を目指し、あまり余分な仕事は増やさない方向である。

このため、ホームページも負担が大変なので開設していない。ホームページのメンテナンスやセキュリティにエネルギーを使いたくないという考えからである。現在は、個々の会員が、ホームページを開設しその思いを発信している。会の活動の記録を発信する人、新たな参加を呼びかける人などそれぞれである。



ブナの植樹風景（「鳥海山にブナを植える会」会員HPから）

しかし、実際には2005年でいえば、植樹本数は1,170本と増加している。

それは、「TDKの森」「学校の森」に独自のプランで植林されたからである。このような方式で活動が広がると、会の負担は少なく、植樹本数は増加することになる。

### 「鳥海山のブナの森を再生したい」という熱い思いが原点

須田さんは、これまでの活動を振り返ると、「タネを拾い、蒔いて苗を育て、山に返す植樹会——その繰り返しであった」と言う。

「鳥海山にブナを植える会」には、現在、一連の植樹活動を、実際に指導できる人が20人はいる。常時、指導できる人が20人いれば活動は継続できる。役員会に出てきている会員は、人並み以上にできる経験を持っており、そうしたメンバーを一人でも多く新しく作り出せるかが会の課題である。

スタート以来10年以上経過し、会員は年配の人が多くなってきた。70～80歳となれば、活動が続け

られず名前だけの会員になると、自分自身の高齢化からみて今後を心配している人もいる。

新聞・テレビでの活動紹介や、口込みで、サラリーマンの人など新規入会の方もいる。活動の主旨に賛同して、遠方の人が会員となるケースも増えている。ありがたいことだが、活動には参加しないで、会費だけ振り込んでくる人が増えると、会の活動自体がおかしくなると須田さんは懸念している。

やはり、子供のころにはあった「鳥海山のブナの森を再生したい」という熱い思いと、その思いを共有する多くの人の地道な息の長い活動の繰り返しが、夢を実現していくのだろう。

最後に行政への要望をお聞きした。

須田さんからは、「元々、行政にあまり頼らないでいこうというのが会発足以来の方針でした。補助金に頼りすぎると、活動が弱体化し、長続きしないと皆が思っています。行政との関係では、町との協定によるブナの植樹場所確保が最も重要であり、後は、会議場所を無料で貸してもらおう程度にとどめています。」と答えが返ってきた。

## 5. 皆が森にかかわることで山がきれいになる ー森の仲間たち



白壁洋子 代表

### 白壁洋子さん

面談の最初 10 分は、昔のコンピュータの話で盛り上がった。「私は、山形大学の工学部の夜間課程中退なんです。専攻は情報で、当時のコンピュータは紙テープ方式。紙テープって穴が開いているだけなのに、スラスラ読む人がいてびっくりしました」（筆者も同体験）。

白壁さんは、その頃から登山が趣味で、東北地方の山に片っ端から登った。また植物も好きで、山に登るたびに高山植物を眺めていた。白壁さんは 2,000m を超える高山も好きだが、いわゆる山里の山が特に好きだ。しかし里山を歩くと、山が荒れている。なぜか。「どうして山が荒れたのか」が理解できなかった。

「40 年前までは山の木を燃料として使うことが、森の手入れになっていた。それが化石燃料の登場でエネルギーは石油やガスに変わり、山に人が入らなくなり、山が荒れてしまった」。

そこで白壁さんは、昭和 63 年、森林ボランティアとして『林業体験研究会』に入った。

ここでの山の手入れを通してわかったことは、「森林を手入れして森に陽が入ると、山が生き生きとしてくるんです。もともと美しかったはずの森は、手入れをすれば本来の姿を取り戻してくれます」。

白壁さんは、山を大きく二つに分けて考えている。一つは『自然そのままの山』。主に高山で、ここは自然のまま残し人の手を加えない。もう一つは『里山』で、手入れすることにより守られる山だ。

平成元年には、長野県伊那市の K O A 森林塾で 1 年間林業を学び、翌年からは米沢でナラ林の伐採作業に従事した。

「里山にかかわること自体が面白い。昔からの暮らしの知恵が凝縮されているから。植物があり、動物がいて、とても身近な場だとあらためてわかりました。でも、町で暮らしている人たちは、水も空気も森林の働きによることなど関係ないと思っている。そして里に下りてくる熊が悪い、猿が悪いとなるんです」。

「この地域の山には猿のグループが 10 あって、中に 12 頭の白猿がいるんです。この観察会をやっていますが、白猿と



雪中の親子猿

いう珍しいものの観察会ではなく、彼らの生態を通して人間と里山の関係を探り、里山の手入れを考えていきたい。

## 『森の仲間たち』誕生

白壁さんは、森とのかかわりを持ちながら事務系の仕事をしていたが、ついに仕事を辞め、平成 13 年に『森の仲間たち』を設立することになる。

### 『森の仲間たち』平成17年度事業計画

月	日	プログラム名	内容
5	29	オオヨシキリの声を聴く	探鳥会
6	25	下刈り	山仕事
	27	女性のための街なかの湿地観察会	観察会
7	2	間伐とミドリシジミ観察会	山仕事・観察会
	16	植物に触れてみよう！野鳥に会いに行こう	観察会
	18	木を伐ってみよう	山仕事
	24	堀立川遊水地夏の植物	植物観察会
8	3	吾妻から学ぶ講座	吾妻の湿地勉強会
	7	馬場谷地湿地植物調査会	植物観察会
	15	ナイトハイク	夜の昆虫観察会
	21	弥兵衛平湿地回復事業	採種作業
9	3	弥兵衛平湿地回復事業	採種作業
	24	下草刈りと文化財見学会	里山を考える講座
	25	コガモが渡ってきました	探鳥会
10	29	エクリブスってなあに？	探鳥会
11	27	枝でつくるマイクラフトイス	木工クラフト講座
12	延期	コハクチョウを訪ねて	探鳥会
1	29	私たちの身近に住む白猿たち	里山を考える講座
2	19	データでみる米沢の森林・林業	里山を考える講座
3	4	マイカンジキを作ろう	山仕事

『森の仲間たち』は、里山の手入れや植物や野鳥の観察会、自然環境についての講座を毎年開催。野生動植物を通して里山を学び、里山体験の基本としている（会の紹介文）。

里山の手入れに関しては、白壁さんは、市内で山を4ヶ所借りており、その下草刈りや伐採、きのこ菌植えや木工クラフト教室などを実施している。

観察会は探鳥会と白猿観察、そして植物観察。またかつて山仕事で使っていた道具やその材料の採り方や作り方も学んでいる。

スタッフは現在9人。白壁さん以外は男性。市職員、森林組合の人、サラリーマンもいる。「自然保護団体は女性が多く、私がかかわっている湿地回復

のグループなんかは7割が女性なのに、私の会は男ばかり。多分、下草刈りや伐採など体力勝負だと思われているのかもしれない」と少し嘆いている。「地元の自然をもっと知り、森で遊んでほしい。楽しいですよ」。

米沢周辺には、森林ボランティア関係の団体が9つあるが、行政と関係のないのは『森の仲間たち』だけだ。メンバーの公務員も個人の立場で参加している。

下草刈りなどの行事では参加者を募集している。「でも、なかなか続けて参加して下さる方が少ない」のが悩み。また、「自分の山なのに自分で管理している人が本当に少ない」ことも気がかりな点だ。山持ちさんには「自分の山を知って、山の手入れを一緒にやりませんか」と声をかけている。

山を管理する作業は大変なように思われるが、「山は、人の作業を待っていてくれるんです。あの日までにや



森の仲間たちの間伐作業



を作っており、白壁さんの『森の仲間たち』も会員として、ネットワークを広げている。

白壁さんが住む山形県南部の置賜地区（普通は“おきたま”と言うが白壁さんは“おいたま”という呼び名が好きだ）では、『置賜の森をみんなの手でネットワーク』に現在12の森林ボランティア団体が加盟して、地域の森づくりについて連携し情報交換や協働事業などを行っている。白壁さんが事務局を担当しており、森林ボランティア同士の楽しいネットワークだ。児童・生徒を対象に、体験を通して森林の大切さを伝えていく「置賜の森林からのメッセージ運動」も置賜総合支庁森林整備課に協力しながら共に進めている。

この運動は、学校の授業や子供会活動で森林教室等を行う場合に、森林インストラクターや林業士などの講師を派遣したり、クラフト材料、きのこの種菌などの学習資材を提供する事業だ。

### 白壁さんの悩みと望み

アルバイトをして生計を立てながらボランティア活動をしている白壁さんの強い味方は「行政にも林業関係にも森林環境教育にもたくさんの仲間がいること」。「相談に行ったとき、直接の担当でなくても担当者を紹介してもらえりし、いろんな助成制度のことなども情報が入ってくるんです。特に林業関係の職員の方は面白いですよ。できれば環境保護関係や河川など広い意味で里山にかかわっている行政の人がもう少し仲間に加わってくださればいいんですが」。「あとは『森の仲間たち』に女性のメンバーが欲しいですね」。

白壁さんは、山形県公益の森づくり推進検討委員会のメンバーにもなった。でも、最初に出された企画書には「人間も動物や植物など野生生物に関することも里山の部分に入っていないくて、山林や木材の経済性のことばかり書いてあった」そうだ。白壁さんがそのことを指摘すると「そういえば、その観点が抜けていましたね」と言われた。道はまだまだ遠そうだ。

今後の望みは、できれば『森の仲間たち』を自立させたいと考えている。そのためには、仲間を増やすことも必要だし、地域の中でたくさんの参加者で賑わう事業になり、そこから私たちと同じ夢をもつ次世代の人材が育ち、資金面での心配がなくなればもっと『森の仲間たち』に専念できるようになる。そうすれば、白壁さんはアルバイト生活から脱却し、『森の仲間たち』が仕事になる。

## 6. 人に誇ることができるふるさとを創った人 ー共生のむら すぎさわ



栗田和則 代表  
(親林倶楽部森の案内人事務局)

山形県最上郡金山町杉沢。戸数 13。栗田さんの住む杉沢地区は、JR 新庄駅から車で 30 分、一番近いバス停から 7 km 離れている。杉沢の先には集落がない、つまり一番奥まった場所。

冬は 2 m の積雪がある。栗田さんの家は、杉沢地区のそのまた一番奥だ。

農山村体験施設『暮らし考房』がここにある。主宰者の栗田和則さん、奥さんのキエ子さん、息子の和昭さんの 3 人がスタッフで、農林業体験、藍染め、チェーンソーアートなどさまざまな体験ができる。杉沢地区の他の農家でも、山ぶどうのつる細工、さしこ、木工などを体験できる。地区全体が体験施設なのだ。

### 栗田さん目覚める

平成 4 年、47 歳の時、県の林業グループの会長や全国組織の副会長などの職を全部辞めた。そして、「今度は自分のしたいことをやりたい」と考えた。このころは、まだバブルの余韻があったので、山奥で生活する意義が見出せない社会情勢だった。村の雰囲気もそうだった。

杉沢地区は、一番多いときは 18 戸、その時は 14 戸だった。金山でも一番の山奥、一番小さな集落で、町の人も「杉沢なんて人の行くところじゃない」という感覚があったらしい。地区の人も自分で杉沢を卑下していた。栗田さんはこれに抵抗感があった。



民泊施設 ログ・フェーリン

農家の長男として生まれ、農家を継いだ栗田さんは、昭和 35 年から農業を始めた。36 年に農業基本法ができた。だが、山村の経営はなかなか大規模化できなかった。幸い、この地区は、田はできても畑ができなかったものの、春から秋は田んぼや養蚕、炭焼きで結構暮らすことができた。

なんとか村で暮らす意義をもちたい。栗田さんは「お金ではなく、どんな暮らしができるかという尺度で考えれば、農山村の暮らしは決して貧しくない」と考えていた。

栗田さんは 2.3ha の田と 48ha の山林を持ち、もともと地区では大きな農家だったが、昭和 61 年から始めた『たらの芽』栽培が軌道に乗り、これが結構な

収入になった時期でもあった。また、昔から家畜を飼っていたので自給生活が可能だったことも幸いした。

そこで「自分たちの生活を公開していこう」と思い立った。

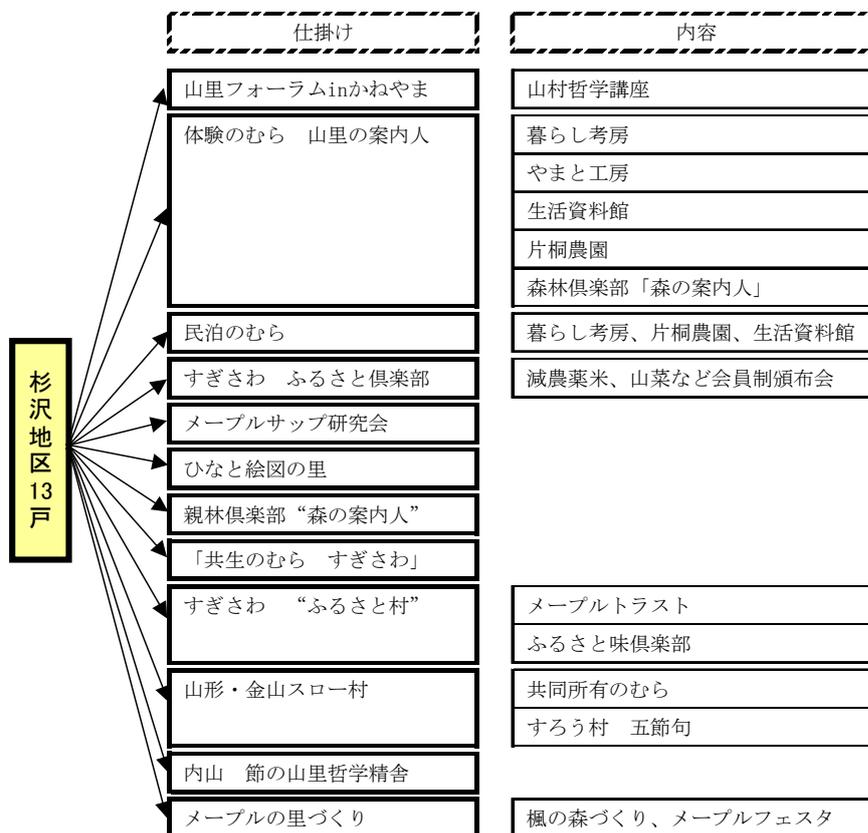
「うちのかみさんは、前から『藍染め』をしていたし『農業をしながらのこういう生活スタイルもあるよ』という提案をしたかった。そういうことで始めたのが、農山村体験施設『暮らし考房』。だから『暮らしを考える工房』なのです」。

暮らし考房はログハウス。もちろん自前。山の木を計画的に伐採し、組み立てを大工さんに手伝ってもらったものの、家族総出7ヶ月かかって完成した。

完成の翌日出かけたドイツバイエルン州への旅でBB方式（ベッド＋朝食）のグリーンツーリズムに感動し、帰国すると、さっそく実践。小屋は『ログ・フェーリン（休暇）』と名付けられた。

### 栗田さんのシステム

「共生のむら すぎさわ」システム図



上の図は杉沢地区で実施している仕掛けと内容である。大きく分けて

- 農山村体験（自然体験、生活体験）
- 農産物の販売（農産物・林産物、同加工品産直、メープルサップ）
- 勉強会

である。当然栗田さん一家だけでは足りないなので、地区全体で対応している。

### 『体験のむら』の広がり

昭和63年に町とJRが出資した宿泊施設が町内にできたとき、「お客様の体験の受入れをしてほしい」

と話があり、「地区の人たちと一緒にやります」ということで『体験のむら』を作り、民泊もはじめた。

JR は、ホテルの経営を成り立たせるため首都圏でキャンペーンをしてくれ、1年間で2,000人が地区に入ってきた。

このときに体験を受け入れた4軒は、お年寄りが刺し子や籠づくりなどを教えた。すると体験者も喜んだが、お年寄りがすごく楽しみにするようになった。

お年寄りが喜ぶのを見て若い人たちも、『森林クラブ森の案内人』という山ガイドの事業を始めた。ところが、若い人たちは町外の人に森を案内してはじめて「自分たちが森のことを知らない」ことに気づいた。森に行きたいというのは若い女性か高齢者。こういう人たちは全国を歩いていろんなことを知っている。逆に教えられることもあった。そこで名前を『親林倶楽部“森の案内人”』に変更。



雪に埋もれる『暮らし考房』

また、地元の山で採れるイタヤカエデの樹液を活用するため、メープルサップ研究会を作った。そして、地元農産物を会員制で直販する『ふるさと倶楽部』も始めた。

平成14年、山形県と金山町から2年間で500万円をもらい、交流活動の促進事業をした。地区で話し合い、地区全体で取り組んだ。公民館として使っていた廃校を改装して交流の場とした。

平成16年になってから「山形金山スロー村」という活動を始めた。地区内に住んでいた人が新庄市に移り空き家がでたので、そこを都市と地区の交流の場とした。学生の時から金山に通ってきたファン

25人が共同出資してくれた。

栗田さんは、なぜ共同所有という形を採用したのかを話してくれた。「普通、村で廃屋がでると、都会の金持ちが買ってセカンドハウスにする。そうすると、大抵そのうちに転売が繰り返されてしまい、今、誰が持っているのかわからなくなる。家が壊れ始めても修理ができない。そのうち家が壊れて空き地になってしまう」から。だから、出資者には「土地を利用しなくなった場合は地区に返す」という条件をつけている。

## 哲学講座

栗田さんの活動で特筆すべきは、その知識欲だ。

栗田さんは、哲学者（立教大学大学院教授）内山節（ただし）さんを招いての哲学講座を19年間開催している。『山里の釣りから』という著書で虜になり、毎年仲間とともに仙台でセミナーを開催した。

それと同時に、村の人たちにも内山哲学を広めたいと、地区の青年と実行委員会を作り、毎年フォーラムを開催している。お礼は足代だけ。その代わり夜は地区の青年が歓待する。

地区の勉強会は、11年目に『山里哲学精舎』と名付け組織化した。「私が死んでも活動が続くように」ということだそうだ。『ログ フェーリン』の隣りに建つ『ログ えとわす』の二階の壁には、『門人』という会員になった人の札がかかっている。会費は毎年3千円。2年間滞納すると破門になる。会員は県外と県内が半々。

## メープルの里

栗田さんが代表を務めるメープルサップ研究会では、イタヤカエデの樹液を使い、いろいろな製品をつくっている。まず樹液 100%の飲料『楓露（ふうろ）』、樹液を濃縮したシロップ『楓の雫』、樹液で作ったソフトクリーム、そして平成 16 年には、ついに水の代わりに樹液を使って仕込んだ地ビール『楓酔（ふうすい）』まで作ってしまった。それまでは地元の人が飲料として密かに飲んでいたものを全国区の特産品に育て上げたのだ。



始めたきっかけは「日本国中どこでもやってないから」と面白い。さらに「うちは昭和 63 年からシロップを作っている。これまで、新潟や静岡などから問合せがあった。私は誰にでも情報は提供するスタンスだ。メープルの採取の仕方も教えるし、特許も取っていない。たらの芽栽培も先発地は秘密主義だったが、うちは最初から、誰にでも教えている」という。「農業に企業秘密はないし独占もない。外部に秘密にしている産地は内部にも秘密にしている。そうすると内部の技術向上が遅れる。誰かの失敗が伝わらないので次に活

かせない。私は、技術には伝えることの喜びがあると思う」と栗田さん。

## 皆が役者

有名になった杉沢地区は、よくマスコミの取材を受ける。その時は「農家は、テレビや雑誌で紹介されると元気が出る。だからうちの集落では毎回別の人に登場してもらっている」。

「村でやるいろいろな行事も、私が全部はやらない。うちの民泊も BB 方式。だから夕食はホテルで食べてもらう。その方が地域のいろんな人がかかわるので活性化してくる。囲い込み方式は地域の活性化につながらない。施設に訪れた人を、どうすれば地域に出でいかせるかを考えなければならない。だから JR 出資のホテルができた時も 4 つの提案をした。『ホテルの外に客を出すこと』『体験を受け入れるかどうかの選択権は農家側にあること』『送迎はホテルが無料でやること』『謝礼は直接体験先に支払うこと』。そのうち直接支払いは体験先に「自分の家に来てくれた、という気持ちをもってほしかった」からだ。

## 杉沢の『人』を育てる

杉沢地区は雪深い。冬も通れる道路ができるまで、地区には冬期分校があった。栗田さんは、昭和 39 年から 50 年まで、この冬期分校で 4 年生までの生徒を教えていた。「思い上がりかもしれないけど、この時に教えた長男 7 人は全員、地区に残ってくれた。逆に、その後に分校に入った長男は全員地区を出ていった」。その時期は高度成長期。学校では都会の素晴らしさを一生懸命教えていた時期だ。そう教えられた子供たちは、必然的に都会に出ていった。でも、栗田さんの教え方はそうではなかったのだろう。この地区は、地名でいうと、金山町大字中田字杉沢。でも地区の人たちは、昔は「中田出身です」といい、杉沢という名前を恥ずかしくて口にしなかった。「でも、今は名刺にも『金山町杉沢』と書出し、杉沢の名を積極的に話すようになった」と栗田さんは胸を張る。

都会の人を受け入れていく理由も「ここで暮らしていく自信と誇りと希望を作っていくため」。最近

ようやく「希望が見えてきた」。杉沢には後継者が多く、40歳以下が13戸で8人いる。

『森の案内人』も若い人を残そうという意図でやっている。去年、全国林業グループコンクールで農林水産大臣賞をもらった。今は、根曲がり材の東屋を公園に作ったり、チェーンソーアートもやっている。今年はチェーンソーアートの東日本大会をここで開催する。「とりあえず若い人たちに元気にやってもらいたい」（栗田さん）。

### 行政に望むこと

行政に望むことを聞いてみた。「たとえば、旅館業法やそれに基づく条例を例にすれば、条例で書いてない事柄については、保健所や担当者の判断になる。例えば、民宿の風呂については山形県の条例には規定がない。そこで、書いてないから家族と同じでよいという判断と、書いてないから別に作る必要があるという正反対の解釈が起こってしまう。グリーンツーリズムを進める時も、規定を厳しく考える場合とゆるく解釈してくれる場合で全然違う。地域が元気になるためにどうすればいいかという観点から考えてほしい」とのことであった。

最後に一言。「明日、今年最初の樹液取りにでかけることにしている。大安だから」。これも面白い。

## 7. 自然保護活動はずいぶん楽しいことだー三条ホタルの会



小林良範 会長

### 「三条ホタルの会」が活動を展開している三条市

「三条ホタルの会」会長、小林良範さんのご自宅におじゃましお話をうかがった。

新三条市は、平成 17 年、旧三条市、栄町、下田村が合併して新たなスタートをきった。新市の人口は約 10 万 7 千人。市街地は信濃川の豊かな沖積平野を中心に広がり、福島県境にいたる越後三山只見国定公園などの豊かな森林資源から流れ出る水は、近隣市町村の水源にもなっている。江戸時代からの三条鍛冶の伝統を受け継ぐ包丁、作業工具やそれを全国に売りさばいた三条商人の町としても知られている。三条鍛冶の伝統を受け継ぐ金属加工技術は今日も地域の産業を支えている。

平成 16 年の集中豪雨では、市内を横断する五十嵐川が氾濫した。「今はほとんどわからないですが床上浸水で居間でも胸近くまで水が入り本当にびっくりしました」と被害の大きさを話される。同じ年に起きた中越大震災では、大きな影響はなかったようだ。



三条市（三条市 HP から）

### 「三条ホタルの会」スタート

三条ホタルの会は、平成 11 年 9 月、小林さんと、その仲間の自然観察指導員、三条オリエンテーリングの会メンバーなど 16 名が参加してスタートした。

三条ホタルの会の発足のきっかけとなったのは、三条市民の憩いの場として親しまれてきた大崎山が、年々荒廃していくのではないかと懸念であった。

大崎山は、三条市東部に広がるなだらかな山で、その水辺は、昔からホタルの生息場所であったが、いつの間にかホタルが少なくなっていた。林道工事の際、土砂が沢に落ち、ホタルの生息する大崎山の水辺環境に大きな変化が起きていることがわかり、少人数でも、子供の頃から親しんできた大崎山の自然環境の保全・回復のため何かできないかと発足したのが「三条ホタルの会」である。

しかし、三条ホタルの会は、ホタルの保護や、観察会で美しいホタルを眺めて楽しむだけの活動を行っているわけではない。むしろ、『ホタル』は会の活動や三条市の自然環境保全へのシンボリック意味合

いを込めた名称であるという。

ホタルは地域の水辺や里山の自然環境の状況を映し出す鏡のような「指標生物」である。これまでホタルが生息していた所に、今年からホタルが飛ばなくなった、少なくなったとすれば、ホタルが生息していた自然環境が水質汚染、人工化などにより、悪化したのではないかと考え行動に移す。ホタルを楽しむ観察することは、自然環境のウォッチングにつながり、そこから、自然環境の保全や回復への活動が始まるのである。

ホタルはその一生のほとんどを水の中で幼虫として生きる水生生物である。6月の中下旬にホタルの成虫が美しい光を放ち飛び交うのは、その一生のうちのほんの一瞬といっても良いという。ホタルの幼虫は、水中に生息し、カワニナなどの巻き貝を食べて生きる。巻き貝は水中の苔や藻を食べて生息しており、ホタルが生息するには、カワニナなどが繁殖できる水辺環境が必要である。光を放ち飛び交うホタルの増減は、周辺の水辺環境を映し出しており、ホタルが水辺環境の指標生物といわれる所以である。



### 「三条ホタルの会」の活動

三条ホタルの会は、①野遊び楽校、②五十嵐川自然塾、③市民ホタルの観察会、④ホタルの里づくり、⑤里山大楽校——の5つを柱として活動を展開している。

「三条ホタルの会」の現在の活動の概要は次の通りである。

#### 「三条ホタルの会」の活動の概要

##### ①野遊び楽校（毎月実施）

大崎山をフィールドとした自然観察会と楽しいイベントであり、親子づれなど毎回10～20人が参加している。大崎山の自然の中で楽しみながら自然のファンを増やそうという活動である。

自然観察では昆虫の観察、ヤゴやカゲロウなど水辺の水生生物の観察を行い、イベントは、水遊び、木をすりあわせての火起こし体験、薫製作り、リース作りなど、「三条ホタルの会」のメンバーが、それぞれの得意分野で毎月企画し楽しいメニューを提供している。

##### ②五十嵐川自然塾（毎年8月実施）

三条市を東西に流れている五十嵐川において、年1回夏休み時期に五十嵐川自然塾を実施している。

外部講師から川の自然の話の聞いたり、川辺の生物・植物の観察、五十嵐川の流速を計る実験など、子供達が自然や生き物への関心を高めるための様々なテーマを用意している。

川にはどんな生き物がいるか知るため、小型の定置網(間口2～3m、奥域10m)を仕掛け、川の生物を採集するなど、子供達にとって楽しい自然体験となるよう工夫をこらしている。

(ナマズ、ニゴイ、カジカ、モクズガニ、ウシガエルのオタマジャクシなど20種類以上の生物がかかる)

ミドリガメ(ミシシippアカミミガメ)、ブラックバスなどがかかった場合は、外来種に話を広げるなど、自然に即して色々子供達の視野を広げることもできる。

##### ③市民ホタルの観察会（平成12年から継続実施）

三条市民のホタルに関する関心を高めるため、毎年6月、三条市広報を通じて、「ホタルを見に行きませんか」と呼びかけ、ホタル観察会を実施し多くの市民の参加を得ている。

#### ④ホタルの里づくり

ホタルが生息する大崎山の沢の手入れ、草刈りなどを、地主からの了解を受けながら継続的に実施。平成 17 年秋には、粗朶(そだ)を崩れかけた土水路の両岸に敷設し、川底には砂利をしく新たな試みを実施。粗朶や砂利の隙間にホタルの他、水辺の昆虫が生息しやすい環境整備に努めている。10m 足らずの粗朶だが、粗朶を編むことも楽しいイベントとなった。

大崎山の地主の方から、ホタルの会の活動を理解していただき、水路に粗朶の編み物を敷くことを認めてもらったり、加茂市の粗朶工法の伝統技術を持つ業者から粗朶工法を編む技術、川底への敷設方法を教えてもらうなど、会の主旨に賛同くださる方々の協力を得て初めて実施できた。

注：粗朶はナラ、クリ、マンサクなどのしなやかで強い雑木の枝を束ねたもので、粗朶工法は編んだ粗朶を護岸工事などに使用する工法。代表的な粗朶工法としては、一定間隔で杭を打ち連柴を組んでいく護岸工法連柴柵工(れんさいしがらこう)などがある。



粗朶(そだ)

#### ⑤里山大楽校 (年 1～2 回実施)

里山大楽校のメインテーマは、チェーンソーで木を切り炭を作る炭焼き体験である。

「三条ホタルの会」会員ばかりでなく、三条市教育委員会の後援を受け、市の広報を通じて参加を呼びかけ、毎回 10～20 人の一般市民が参加している。オープンで風通しの良い活動を通じて、「三条ホタルの会」の里山保全活動を理解してもらうため、多くの市民参加をねらっている。

里山の木は下刈りや適当な間伐を行わないと、順調に生育しない。昔は、里山は薪や炭という燃料の供給地であり、炭焼きは里山の豊かな自然を保つには欠かせないことだった。石油燃料への転換により生活の中で炭の需要がなくなったため、里山の木の使い道がなくなり、里山の継続的な維持ができなくなったという経緯がある。炭焼き体験を通じ、里山環境保全活動を楽しく理解してもらう。

焼いた炭は、「三条ホタルの会」のバーベキューで使用したり、水の浄化作用がある炭をホタルの生息する水辺に沈めたりしている。

### 地域への活動の広がり

小林さんは、広く色々な方々を巻き込みながら、三条市の自然環境保全の活発化を目指している。

#### ①活動のメンバー

平成 11 年の発足以来、中心となって動く会員はそれほど異動していない。現在では定年退職した比較的時間に余裕のある人が多く、仕事をしながら活動する小林さんは、むしろ例外的だという。自然観察指導員、環境カウンセラー、森林インストラクターの資格を持つ人も多く、実際の活動のリーダーを務めることのできる人には恵まれている。

しかし、色々な活動への一般市民の参加者は毎回 10～20 人であり、リピーターも多い。新規参加者はそう多くなく、PR がやや足りないかとも感じている。

自然環境保全活動は継続していくことが重要であり、後継者をどう育成していくかが大きな課題となっており、試行錯誤の中で後継者育成の仕組みを考えていくしかない小林さんは語る。

## ②「三条ホタルの会」の活動の理解促進 ー行政、土地所有者、地域ー

活動のメインフィールドである大崎山は、ほとんどが私有地であるうえ、地主が入り組んでおり地主がわからないことが多かった。木を1本切るにも許可を得ることが必要であり、地主の方から会の活動の主旨を理解してもらうことに大変苦勞した。

林道工事の土砂が沢を埋めホタルの生息にマイナスであると、三条市に相談し、地元自治会に説明・お願いし、ようやく活動を開始することができた。スタート当時は「三条ホタルの会」のイメージが固まっておらず、行政や地域からも積極的にバックアップしてもらえなかったという。

しかし、環境活動を計画していた三条市青年会議所と一緒に活動を行い、活動資金の裏付けができた。

その時には、U字溝の水路に玉石を敷き、石の隙間に水生生物が棲みつきやすいような環境づくりを行った。玉石はそのままでは、流れてしまうので梯子状の木枠を作って沈め、その枠の中に石を敷くようにした。

このような活動を継続していくことで、地域にも「三条ホタルの会」の活動が理解され始め、昨年、1区画を自由に使って良いという地主の方も現れるようになった。「活動を自由に行える場所を確保できるまで5年間かかったことになりましたね」と小林さんは振り返る。平成16年度、「三条ホタルの会」の活動が環境大臣賞を受賞し、地域でも評価が高まったことも大きい。

## ③行政を巻き込む

小林さんは三条ホタルの会を代表し、三条市環境基本計画策定のための市民ワークショップに参加。この機会を利用して「三条ホタルの会」の里山づくり活動を理解してもらい、環境基本計画に会の考え方を取り入れてもらったという(平成16年三条市環境基本計画策定)。

自然環境、生活環境の保全の理念や方向は立派で言うことはないが、『誰が主体となり取り組むかが問題である』と考えていた。平成16年、計画実行組織「環境パートナーシップ会議さんじょう」が発足し、小林さんはそのプロジェクト推進委員長に就任した。行政、市民、民間団体、事業者が共同、役割分担して、持続可能な環境保全・改良活動を行う、自然環境保全の総合的な取組体制が整備され、これから具体的な活動を練り展開できると小林さんの顔は明るい。

「三条ホタルの会」の活動に加えて、市、商工会議所、自治会など色々な主体を巻き込んで里山保全活動を展開できる体制が整ったといえよう。

### 「環境パートナーシップ会議さんじょう」

- 平成16年5月発足
- 会長：三条商工会議所環境部会部長
- 副会長：三条市助役、NPO良環の代表、自治会長協議会会長
- 幹事：小林氏(プロジェクト推進委員長)他4名
- 推進委員会：14名
- プロジェクト・・・ゴミ問題、緑化推進、市内循環バス、里地・里山再生など9プロジェクト

## より多くの人参加を

「三条ホタルの会」の活動の市民参加者はリピーターが多い。自然環境保全活動に、より幅広く人の参加を得ていくことは大きな課題である。

特に、次世代を担う子供への取り組みは学校教育との連携が不可欠である。子供達が自然の大切さを

見直してもらいきっかけ作りとなる楽しい企画を通して、子供達に自然への興味を持ってもらうことが重要である。「市民ホテルの観察会」に、特別に日を設定して保内小学校が学年単位で毎年参加しているなどそうした成果は着実に現れてきている。

こうした幅広い市民の自然環境への関心を高めるため、小林さんは、「三条ホテルの会」の活動以外にも様々な試みを行っている。『五十嵐川「与十郎堤」探検』もその一つである。

江戸時代、城掘である五十嵐川南側には堤防がなく、南側住民は常に五十嵐川の氾濫に苦しんでいた。明治に入ると、松尾与十郎という名主が中心となり堤建設の運動を盛り上げ、明治10年ようやく五十嵐川南堤が完成した(通称:与十郎堤)。さらに、明治11年、明治天皇の全国巡業の際、新堤を視察され、北側と比べ幅が狭く高さも低かった与十郎堤が増強されたという歴史を持つ。

小林さんは、松尾与十郎の尽力の歴史をテーマに、「与十郎堤」約8kmのウォーキングラリーと五十嵐川の歴史探索と自然観察会を兼ねた散策ツアーを企画した。新企画を求めていた三条北ロータリークラブが資金提供者となり、市職員の協力も得て「与十郎堤」探索マップを作成。治水の歴史を考え、川の自然を楽しむ企画となった。三条ホテルの会の主旨である自然を楽しむ人の増加にもつながると小林さんは意気軒昂である。

小林さんのお話をうかがっていると、自然保護の活動に参加するのは、ずいぶん楽しいことなのだと思います。これからも明るく元気に活動の輪を広げていただくことを期待したい。

## 8. 里山保全活動に楽しく参加してみませんかーにいがた森林(もり)の仲間(とも)の会



小林正吾 前理事長

### 新潟県の森林の状況

新潟市の信濃川万代橋の近くにある緑花会の事務所を訪問し、小林正吾先生からお話をうかがった。「にいがた森林の仲間(とも)の会」の設立に関わり長年理事長を務められた小林先生は、新潟大学農学部で林学を専攻され、主として林業の経営、森林計測などを研究された。

平成8年新潟大学を退官後は、(旧)新津市森林文化アドバイザーに就任され、現在も活躍されている。

まず、先生のご専門であった新潟県の森林の状況からお話をうかがった。

新潟大学在任当時は、『森林を有効活用』が先生ご自身の大きなテーマでもあり、優秀な木材である杉と桧を育てようというのが国全体の目標であった。現在、杉は外材に押されて売れないが当時は花形であった。

1 ha に1 間間隔で約 3000 本の杉の苗木を植林し、枝が交まないよう適切な間伐を行う育林システムはほぼ完成し、『こう植林しこう手入れすれば 50 年後は優れた木材が供給できる』という将来の姿が明確にシュミレーションできたという。

現状は、輸入材との競合から採算がとれず、民間も国も森林の管理から手を引いてしまっている状況にある。杉の花粉症が問題となっているが、「人間が勝手に杉林を作り、手入れや利用を行わないで、その上に悪者扱いでは杉もかなわないね」と、とつとつと話される。

しかし、「石油資源には限りがあるが、森林は適切な管理を行えば、永久に恵みを与え続けてくれる。かつての木材としての利用から、森林の存在自体が地球環境の保全に役立つ時代になった」と森林の歴史を振りかえられた。

一方、新潟県の状況をみると、新潟県は民有林の人工林比率は 23～24%と沖縄県に次いで低い。

その理由は、①豪雪のため植林しても雪に負けてしまうため植林が進まなかった、②農業に労働力が吸収され林業への人手が足りなかった、③天然林の雑木を燃料源としていた(炭の一大産地)——などの理由がある。対照的に気候の良い九州などでは杉に大きく切り替わってしまったという。

「1 周遅れのトップランナーですね」と水を向けると先生からは苦笑いが返ってきた。とにかく、ブナ、ナラなどの雑木はたくましく、切ってもまた芽が出て、20 年もすれば親木になるというサイクルを自然に繰り返してきたという。

## 里山の保全とは

『里山』という言葉は明確に地理学的に定義された言葉ではない。「おじいさんは山へ柴刈りへ」のように、高齢者でも入りやすく生活に盛んに利用された山林といっても良い。人が入らなくなった現在では、その意味の里山は存在しない。

里山は、以前は薪炭など生活に必要な資源の供給地であったが、近年は、「身近な自然」「心や体の癒しの場」として見直され、里山の保全を行うことが、地域の身近な自然環境を守るという考えとなっている。

「にいがた森林の仲間の会」が活動拠点としている『にいつ丘陵』は、約 50%が杉の人工林、あと半分は雑木林である。どんどん木は生長するが、燃料として伐られなければ森の高齢化が進む一方である。主な雑木はコナラであるが、寿命はそう長くなく 50 年もすれば高齢化してしまう。

人の手が入らない里山は過密化しドンドン藪化してしまう。過密化、藪化した林は陽光が差し込まず、日中も暗い、花も咲かない、花を求める昆虫もいない、動物も棲めない山になってしまう。

間伐により、残された木々が十分な陽光を受けて元気に育つのである。里山に人の手が入って初めて、その豊かな自然が保たれる。

### 「にいがた森林の仲間の会」

#### ○「にいがた森林の仲間の会」のスタート

「にいがた森林の仲間の会」は、平成 8 年 3 月発足。その主な活動内容は、①森づくり活動(杉林・雑木林間伐、杉林の体質改善、炭焼、炭アート制作)、②親林活動(森の探検隊・紅葉狩り、レンジャー、小・中学校の里山学校、里山情報提供、講演会)——である。

新潟大学を退官しこれから何をしようかと考えていた小林先生に、にいつ丘陵市有林保全と、自然環境保全への啓発をやってみないかと声がかかったのが、「にいがた森林の仲間の会」発足の発端であった。

「にいがた森林の仲間の会」旗揚げ時には、約 50 人の仲間が集まった。参加メンバーは、県林業担当者、林業に従事する人、山好きな人など、里山の保全の技術を持っている人が多かった。小林先生の呼びかけに応じた参加メンバーは、放置されている里山に対し、下刈りや間伐など、自分達ができる範囲で何かできないかと思っていた人達であった。

活動場所はにいつ丘陵の中にある市有林である。当時、にいつ丘陵市有林は、管理の手がはいらず、雑木が混み合い木同士が悲鳴をあげている状態であった。にいつ丘陵の里山保全活動については、新津市はあまり細かい口ははさまず任せていただいた。市町村合併により、新津市は新新潟市の一員となったが、引き続き、新潟市からも市有林管理の委託を受けている。

#### ○「にいがた森林の仲間の会」の活動

現在の「にいがた森林の仲間の会」会員は約 130 人(年会費 3,000 円)。最も多い時は 200 人をこえたが、最近では 130~150 人の間で推移している。里山保全活動は、頭で考えているより厳しく、ボランティアで参加してもやめていく人も多い。自然環境保全活動グループで、設立後 10 年経過し、会員数が 100 名を超えているのは、全国でも珍しい。

活動の中心となっているのは約 50 人。「にいがた森林の仲間の会」では、間伐、炭焼き、炭アート創

作、遊歩道巡視など、グループ分けし、各々がその得意得意で活動をリードする体制をとっている。

各グループは、会員のアンケート等をもとに様々な企画をたて、ホームページ、電子メール、FAX、電話、葉書などで参加を呼びかけている。

### ●炭焼き

\*間伐～炭焼 : 伐採→運搬→炭焼き→運搬→加工

\*炭焼き窯 : 会として大小の炭焼き窯を2つもっていることが大きな特徴。

\*炭アート製品 : 環境浄化剤機能を持つ炭のインテリアで居間のテーブルや床の間などに置く

土壌改良剤 : 炭を細かく砕いたものは土壌改良剤に利用



薪炭林作業(伐り株からの萌芽を育てる)



炭焼き風景

### ●子供達の自然体験

\*子供達の自然体験のポイント : ①安全第一、②知識を押しつけない、③子供の目線に合わせる

\*低学年 : 「自然に関するクイズ」、「ネーチャーゲーム」など楽しむ中から自然への関心を高める

\*高学年 : 自然観察を通して自然を理解し関心を高める

例. 里山にある滝の水源探検⇒川がどんどん狭くなり最後になくなる⇒水源は里山の土(スポンジ状で水を含む)⇒森は緑のダムということを体験で知ってもらう



滝の水源探検



森のピラミッド作り

活動拠点は、小林先生が森の文化アドバイザーとして勤務する新津市「石油の世界館」。平成17年4月から、にいつ丘陵内の市営無料休憩所「花林館」を拠点としている。専従職員はおらず会員が協力し

運営する体制をとっている。

里山づくりは本来地味であり報われない活動である。「あまり深刻に考えず、山の自然を楽しむ延長に、ボランティアの森づくり活動があるぐらいの気持ちでないと長続きしない」、「活動の柱の人以外の会員の方は、年1～2回自分の興味のある活動に参加し、“楽しかった”、“こんなことが経験できた”で良いし、そうした人達の体験や思いが子供達に伝わり、口コミを通じて広まっていけば良いと思う」  
「設立当初から参加していた会員の高齢化が進み新陳代謝が必要となる。これから現役を退く団塊の世代の人達には、大いに参加を呼びかけていかねばならない」——と小林先生は話す。

## 一般市民に里山の自然に親んでもらう

「にいがた森林の仲間の会」の活動は、市民の自然観察や体験の柱となるものだと小林先生は話す。新潟市内で一般市民が森林生態系を楽しめる場所はいづ丘陵と海ぞいの角田山の2ヶ所くらいらしい。

一般市民へは、市教育委員会と連携し、市の広報などを通じ参加を呼びかけている。会員以外の幅広い市民の参加を目指し、会の活動のPRや行事への参加を通じて、市民の自然への理解を深めようとしている。マスコミ報道や口コミで参加する一般市民もある。会として色々な機会をとらえ、「里山の保全活動に参加してみませんか」という呼びかけを行っている。例えば、今年2月総会にあわせ、「にいつ丘陵 里山へのいざない」(今、輝く里山)と題し、環境考古学の権威、安田喜憲博士の講演会を開催するのも、一般市民に里山の自然を守ることの大切さを広く理解してもらいたいからである。

都市住民が山をよく理解しないで無秩序に山に入ると、自然を荒らしたり動植物の乱獲にもつながりかねない。里山の知識といってもそう難しいものではなく基本的な知識で充分である。針葉樹と広葉樹、常緑樹と落葉樹の生態的な違い、この木はいつ花が咲き、いつ実がなるのかなど、基本的な所から入り、まず里山の自然に親んでもらうことである。「花林館」の里山情報コーナーや、にいつ丘陵の木々に説明ボードをつけ、活動に参加すれば自然にそうした知識が入るように工夫している。

ボランティア活動は、時がたつと参加者が固定化しマンネリ化していく。自分達だけの活動にとどまらず、活動の範囲をできるだけ広げ、多くの人に理解してもらおう努力が必要である。



植生調査



市民大学の実習支援

## 安全が第一

間伐作業はチェーンソーを使用するため危険がともなう。公式の研修を受けた人だけがやるし、厳し

い危険な部分は森林組合に任せるようにしている。

里山での活動は、「スズメバチに刺される」、「チェーンソーで手を切る」、「木の下敷きになる」など危険がいっぱいである。参加する人の安全は最も大切なことであり、会では「森づくり安全のしおり」を作成し、安全管理を徹底している。

よく、野外授業で生徒が蜂にさされる事故を耳にする。これは不用意だからであり、自然は決して甘くないと思ってかからねばならない。

「にいがた森林の仲間の会」では事前に自然観察コースを点検し、スズメバチやクマンバチが飛んでいないか点検しコースを設定している。頭だけで理解するのではなく、体・目で確認し五感で感じて納得し、企画を組み立てなければ事故につながるという。

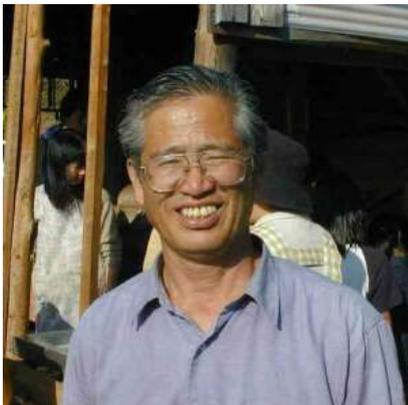
### 行政への要望 —ボランティア活動の実状に即した支援を—

最後に、行政への要望事項をお聞きした。

小林先生からは、

- 行政は、ボランティア活動は無償の活動、安上がりなものという考え方がいまだに強いような気がする。ボランティアは安上がりなものという考えが残っており、そういう考えをベースに助成が行われるケースが多い。日本のボランティア活動の環境はまだ未成熟であると思う。
- もし、ボランティアの仕事を行政職員で行うとすると何倍も費用がかかると思う。例えば、レンジャーによる森林巡視作業の報酬は1日数千円であるが、市職員で行えばその何倍もかかってしまう。行政から受託事業や助成金をいただいているが、人件費は対象とならないなどの厳しい条件がついたケースが多い。例えば、自然環境の保全・啓発活動は安全が第一であり、活動参加者への保険料もばかにならない金額となる。
- 新潟市内から参加する会員は、にいつ丘陵までの片道 30km を車をとばし手弁当で活動に参加する。仕事もちながら活動に参加する人も多く、やはり、ボランティア活動にもそれなりの報酬があつてよい。
- 行政には、こうしたボランティア活動の実状に即した支援を是非お願いしたいと日頃思っている。——というお答えが返ってきた。

## 9. 自然を学ぶ、人に学ぶ 一夢創塾



長崎 喜一 塾長

### 富山県朝日町蛭谷

朝日町は、富山県の一番東にある町で、隣は新潟県糸魚川市である。町の宮崎海岸は『ヒスイ海岸』として全国的に有名で、砂浜（実際は細かい石の浜）を歩くと、運がよければヒスイの原石を拾うことができる。もっともヒスイの原石はごく普通の石で、素人にはなかなか区別が付きにくい。

蛭谷地区は朝日町を流れる『小川』の中流部にあり、集落の少し上流には、子宝の湯として知られる温泉がある。

蛭谷集落は、国の伝統的工芸品『蛭谷和紙』が有名だが、最近は『バタバタ茶』という一風変わったお茶に人気がある。緑茶を醗酵させたもので、飲み方に特徴がある。醗酵茶葉を煮つめて五郎八茶碗に入れ、2本一組になった夫婦茶筌（ちゃせん）でバタバタと音を立てて泡立つまでかき混ぜ飲む。お茶うけは山菜や漬物。囲炉裏を囲み、お茶を立てながらおしゃべりをするのが楽しみになっており、おばあちゃん達のサロンである。

### 雪と水とココア



雪に埋もれた夢想塾

る」。出だしから面白い。

長崎喜一さん宅を訪れたのは真冬の2月7日。家の居間の囲炉裏にあたって話を聞いた。「今日は、子供たちに雪の重さを体験させた。10cm角の雪を、積もった上の方と下の方で切り取り、その重さを量らせた。上は200g、下は500gあった。次にこれをビーカーで溶かしてみる。そうすると200ccと500ccの水になる。こうすることによって子供たちは初めて雪が水でできていることを理解できる。そしてこの水を沸かしてココアにして飲んでみる。そうすると自分たちが飲んでいる水がどこから来るのかを知ることができ

### 長崎喜一さんと夢創塾

長崎喜一さんは考えた。「定年後は、何をして遊ぼうか」。

富山県の技術系職員として、魚津農地林務事務所の次長だった52歳の時のことだ。

「もう十分働いた。定年後にまた仕事はしたくない。何か楽しいことをして過ごしてみたい」。そう思い立った長崎さんは、ちょうど、地元の朝日町蛭谷地区で、ダム建設に伴いできた川沿いの土地に目をつけた。「あんな広い土地を遊ばせておくのはもったいない」と。長崎さんの棚田跡である。

平成6年、長崎さんは「行動してこそ答えがあらう」と、8人の仲間と一緒に、間伐材を使い、自分たちで小屋を建てた。そして、小屋の正面に看板を掲げた。『夢創塾』誕生の瞬間である。

小屋は、いわゆるワンルーム。部屋の真ん中に囲炉裏を作った。そこに、すぐそばの山から木を切り、薪にして火を焚いた。「自分たちの隠れ家ができたと喜んだ長崎さんは、週末になると夢創塾に通い、ゆっくりとした時間を楽しんだ。

そして、前々から挑戦してみたかった「花炭」作りをするために、炭焼窯を小屋の近くに作った。ところが窯を作っていると、蛭谷集落のお年寄りが入れ替わり立ち替わり様子を見にきた。それまでの2年間ほどは変わり者扱いされて近所の人を訪れることもなかった夢創塾だったが、「花炭の窯は細長い窯で、炭焼きの窯とは形が違う。お年よりは自分たちの作った窯と違うものだから、『ちょっと教えてやらねば』と集まったのではないかと長崎さん。視察が一巡したころ、お年寄りたちから「あんたの窯の近くで自分たちの炭焼窯を作らせてほしい」と相談があった。長崎さんは、実はこれを狙っていた。

「地区のお年寄りたちの山で生活するための知恵や技術を絶やしてはいけない。炭焼き、和紙、小屋作り、山の幸の料理など我々はあまり上手に受け継いでいない。是非自分が年寄りたちから教わりたい」ので、拒む理由はない。二つ返事でOKすると、お年寄りたちは、翌日から毎日やってきて、せっせせっせと窯を作り、長崎さんが1年かけて作った窯の数倍の大きさがある炭焼窯を、なんと2週間で作ってしまった。「これまで家にこもっていた年寄りが、本当にいきいきと働いた。腰が曲がった人も作業をしている間はピンと伸びている」思わぬ効果もあった。この人たちは、今でも夢創塾の『山の先生たち』だ。

## 増殖する夢創塾

地区の子供たちが遊びに来るようになったが、ちょっと寂しい。何か生き物がいないか、ということで、沢水を引いて『いわな池』を作った。これは失敗。あっと言う間になくなってしまった。そこで次は『かも』池を作った。これは成功（といっても、時々キツネなどの被害にあう）。

次に『やぎ』を連れてきた。やぎは愛嬌があり、子供たちの人気者になっている（その結果、当初は食用のつもりだったが愛玩用に変更せざるを得なかった。また真冬でも毎日餌をやる必要があり、2mを超える雪を掻き分けて対岸の道路から川をわたってやぎに会いにいっている）。

さて、やってきた子供たちが遊んでいる。しかしなにかぎこちない。ゲームなどに慣れているせいか、自然の中での遊び方を知らないのだ。つまり「今の子供は、知識はあるけど知恵や技がない」。そこで、長崎さんは、空いているスペースに、フィールドアスレチック、木登り、空中遊泳などができる遊び場を作った。それから、夢創塾の裏手にある大地山（おおちやま1,260m）への登山道も整備した。もちろん、その過程で伐採した木は、ナメコやしいたけの原木として再利用している。



山で採ってきた材料を使いピザ焼きに挑戦

夢創塾には、設立当初の8人の仲間、地区のお年寄り、そのうち話を聞きつけた遠方の人たちも遊びに来るようになった。小屋の中でいろいろな話をして酒を飲んだ。酒を飲むと家に帰ることができない。そうすると泊まりになる。泊まりになれば風呂に入りたい。ということで小屋の隣に五右衛門風呂が完成した。釜は、町の漁村でかつて使っていた、ニシンを煮る釜をタダでもらってきた。普通の家庭風呂は200リットルだが、ここは800リットル。十分にでかい。大人3人も入れる。風呂からながめる朝日岳は絶景である。

和紙作りも始めた。蛭谷和紙は「越中和紙」として国の伝統的工芸品に指定されている。ここでは、『こうぞ』や『みつまた』などの原料の皮を剥ぐところから手作りでやる。「子供たちは紙が木からできることを知らない。だから実際にやらせてみると、とても感激する」。自分で作る卒業証書台紙は世界に1枚しかない紙。思い出もいっぱい残る。

### 大人も子供も遊びたい

囲炉裏、炭焼、山菜・きのこ採り、五右衛門風呂、縄ない、水車など、かつては普通に営まれてきた山の生活が、文明社会の名のもとに全国を駆け巡り、気がつけば山里の蛭谷でも昔が失われようとしていた。「自分たちの周りに、こんなに遊び場があるのに、なぜゲーム機で遊ばないといけないのだろうか」と考えた長崎さんは、一つの結論に達した。「それは大人が遊ばないから」だと。

夢創塾には子供たちも遊びに来る。でも、子供たちと一緒にあって、本当は大人にもっと遊んでもらいたい。

夢創塾では、何でも自分で作る。風呂も自分たちで沸かす。料理も自分たちで作る。材料は山から採ってくる。炭も自分たちで焼く。

ロコミが、そのうちマスコミで取り上げられることとなり、夢創塾のお客さんがどんどん増えてきた。小学生が遠足や課外学習でやってくる。都会の人が家族やグループでやってくる。溪流釣りをする間、子供を預けていく人までいる。

「自分が遊びたいから」作った夢創塾だったが、かなり様相が変わってしまった。今では来た人を遊ばせるのが役目になっている。春は山菜取り、夏は山遊び、秋はキノコ採り、一年を通した炭焼きや動物の世話、次々と生まれる新しい遊び道具など、目が回る忙しさだ。

### 参加費は授業料



花炭の額縁 稲穂がそのまま炭になりました

夢創塾には、たくさんの人が遊びに来るが、入場料などはない。無料だ。炭焼や和紙作りなどさまざまな体験も無料。

それどころか、燃料費や原材料などの経費を捻出するため、長崎さんが全国で講演する講演料までが塾の運営費に回されている。

「参加費をとれば楽だが、それは自分の考え方と違う。私は参加者からいろいろなことを教えてもらいたい。参加した子供たちからは全員感想文を書いてもらうが、本当に素晴らしいアイデアを見つけることもあ

る。自分が教えてもらうのに金を取れるわけがない。まあ、本当なら自分が授業料を払って教えてもらわなければならないことを、ここにいれば、みんながやってきて自分に教えてくれる。まあ、自分の道楽だし」と長崎さんは意に介しない。

もともと、今は、木炭、木酢液、和紙の卒業証書などの売上が少しずつ増えている。特に、最近始めた、炭と皮を剥いだ後のこうぞの芯で作った『背負子』と『縁むすび』の2商品はヒット作だ。それと長崎さんが7年間の試行錯誤によって完成させた『花炭』の額縁作品は、とても人気がある。「麦や米といった花炭を成功させたのは全国でも自分以外には聞かない。銀座の『炭製品はなんでもそろっている』という店にもなかった」とのこと。

ちなみに長崎さんは、今も非常勤ながら測量会社に勤めているが、会社も長崎さんの活動を理解し応援してくれているようだ。

## 最後の大物

10年間、小屋、炭焼窯、風呂、せっせといろいろな物を作ってきた。

特に、去年は、大きなものを二つ作った。一つは5トンの木を焼くことができる炭窯。直径は3m以上になった。製作期間3ヶ月。実は、夢創塾のそばを流れる『小川』の河川敷に生えている柳の木を、洪水時の災害防止のために伐採しているが、これの処理にトン当たり2万円かかることがわかった。長崎さんは県の土木事務所と交渉し無料でもらうことにした。柳の木は柔らかいので炭には向かない。だから粉砕して土壌改良剤や床下の防湿剤として使うことを考えた。それに使うためには大量に炭焼ができる窯が必要だったのだ。また「これだけ大きな窯を作ることはもう永遠にないだろう。だから今のうちにお年寄りから技術を教えてもらいたい」という考えもあった。窯が完成した後、長崎さんはお年寄り達から『窯づくり免許皆伝』を告知された。

もう一つは『ツリーハウス』。斜面に生えている杉の木を利用して、地上10mの小屋を作った。もちろん釘は使わない。縄は、漁師さんから古くなった魚網をもらってきた。登った大人も子供も大喜び。ある子供は「お殿様になったみたいだ」と言った。確かに平地では一箇所しか見られないが、小屋からは夢創塾全体が見渡せる。車が来るのも、カモが泳ぐのも、人が歩くのも全部見える。天守閣から城下を見下ろす気分と同じかもしれない。



巨大炭窯製作風景

## ハードからソフトへ

そろそろ新しくモノを作る場所も少なくなってきた。長崎さんは考えた。「10年間走りつづけてきた。これまでは小屋や風呂などハードの整備をしてきたが、これからは間伐剤の活用、森づくり、和紙などソフト部分に力を入れたい」「建物を建てる場合は一人でもできるが、ソフトの場合は、一人でボソボソやっていると広がらない。マスコミなどに声をかけ、他のグループなどともネットワークしていきたい」と。最近、長崎さんに取材を申し込むマスコミがとても増えた。いいチャンスだ。

富山県では、グリーンツーリズムを進めるために条例を作っている。その中にグリーンツーリズムを

推進していくために NPO 法人を作ると規定されており、平成 17 年には『グリーンツーリズムとやま』が設立された。長崎さんは、その副理事長を務めている。

富山県内には、長崎さんと同じように里山で自然体験の場を設けている人が何人もいる。公的な動植物園もある。県では、これら自然体験施設や人をネットワークするための仕掛けづくりを行っている。

長崎さんも県内いろいろな自然体験グループのところに出かけている。そのほとんどは公的施設だったり自然体験教室を商売としてやっている人たちで、長崎さんのやり方とは違うが、「いろいろな人が交流していくのはいいことだ」と長崎さんは考える。

夢創塾は、テレビのある番組と比較されることがよくある。回りの人たちは「いい」「悪い」といろいろなことを言うが、長崎さんは一向に気にしない。これからも、自分流に、かつ周囲を常にびっくりさせ、感心させながら長崎さんの「遊び場」は成長していくことだろう。

## 10. 屋敷林の木と関わることで人も変わろう — 砺波カイニヨ倶楽部



柏樹 直樹 代表理事

### 砺波カイニヨ倶楽部と柏樹さん

「砺波カイニヨ倶楽部」は、富山県砺波地区の屋敷林(カイニヨ)の理解を深めること、カイニヨの木々と共生する地域づくり、人づくりを目指して多くの仲間と楽しみながら活動を展開している。3月中旬、「砺波カイニヨ倶楽部」代表幹事である柏樹直樹さんのご自宅におじゃましてお話をうかがった。当日は、夜半からの雪で杉林も雪化粧し、まるで冬に逆戻りしたような朝であった。

「砺波カイニヨ倶楽部」は、平成9年4月、柏樹さんが中心となり、約30人の仲間と設立された。

柏樹さんは、名古屋営林局、富山営林署勤務の後、平成8年退職。この間、愛知、岐阜の国有林調査、富山県内のタテヤマスギ育成、ブナ林調査に携わってきた。

現在は、砺波市緑の相談員、砺波市保存樹保全委員、砺波散村地域研究所研究員を委嘱され、詩集「散居村」、エッセイ集「山守りの記」などの著書も残されている。

柏樹さんは在職当時を振り返ると、「高度成長期、国をあげて杉の植林に向かった。当時、木材を輸入できる環境になくあまり疑いもなく推進したが、森林の働きを一面的にしか見ることができなかったのではないか」という反省の思いが強いという。

柏樹さんは、森というもの、木というものを30年余り見続ける中で、山地の木ばかりでなく、平地の木にも関心が広がった。

退職後、自分の住む砺波の状況を見直すと、山林も荒れているが、平地の木や緑もないがしろにされ、砺波地域散居村の屋敷林(カイニヨ)がどんどん減少していた。柏樹さんは、言葉を持たないカイニヨに代わって、訴えねばならないと感じたという。

柏樹さんは、「屋敷林をもっと知ろう、関わろう」、「屋敷林の木々と関わることで人も変わるのではないか」と地域の様々な人に呼びかけた。楽しみながらカイニヨに関わっていこうという柏樹さんの考えに賛同、共鳴する人が集まり、「砺波カイニヨ倶楽部」が立ち上がった。



屋敷林(カイニヨ) (砺波カイニヨ倶楽部 HP から)

## 屋敷林(カイニヨ)ー砺波平野の緑のオアシス

まず、屋敷林の歴史からお話をお聞きした。

田の中に家が点在する砺波平野の散居集落形態は、庄川の洪水を避けるため、やや高い地域に散らばって家を建て、家の周りを田にし耕作するようになった約400年程前と言われている。家から田が近く、農作業や農業用水の管理が容易であった。

砺波平野では、家を取り巻く屋敷林を「カイニヨ」と呼んでいる。家屋を風雪から守り夏の強い日差しを和らげるため家の周りに木を植えたものが屋敷林となった。富山県には砺波地域以外にも、黒部川扇状地、(旧)大沢野町、(旧)富山市月岡地区、(旧)大山町、立山町などにも屋敷林がみられる。



空から見た砺波平野（砺波農地林務事務所HPから）

江戸時代は、屋敷林の日陰が米生産に悪影響を与えると屋敷林の面積を制限した時期もあれば、火災などの復興材に使用するため木を切るのを制限した時期もあった。

屋敷林に最も大きな影響を与えたのは、昭和18～20年の戦時中の供木である。10万本が供木され、砺波地域の屋敷林は大きく姿を変えた。切られた後新たに植林されたのは圧倒的に杉が多かったという。

砺波平野の緑の形態に大きな影響を与えたのは、昭和40年代半ばから実施されたほ場整備である。

ほ場整備以前は、農業用水は生活用水としても使用され、点在する家と家の間は土の水路が流れていた。用水路強化のため堤には木が植えられ、『緑の点(屋敷林)』を結ぶ『緑の線』があった。ほ場整備により用水堤の『緑の線』がなくなり屋敷林の緑の点だけになった。「砺波平野の緑が線から点に根本的に変わり平地の緑が弱くなった」と柏樹さんは話す。

薪炭から石油への燃料転換により屋敷林は薪炭供給源の役割がなくなり、建材への利用も縮小した。家の建て替えやクーラー普及など生活様式の変化により、屋敷林は更に減少した。建て替えの際、地盤の低い宅地では地盛りをやり直す家が多く、屋敷林の木が切られ、そのまま植樹しない家も多くなった。

### 「砺波カイニヨ倶楽部」の活動

砺波カイニヨ倶楽部は、単に屋敷林の保全を目指すのではなく、屋敷林との関わりをきっかけとし、木々や緑と一緒に暮らす人、共生する人を作りたいという柏樹さんの思いがある。

そういう思いに合わせ、会の活動を組み立てている。「砺波カイニヨ倶楽部」は、規則でしぼりをつけず、楽しみながらをモットーに活動を続け、若い人、母子にも参加してもらい、木々や緑と一緒に暮らすきっかけ作りにもしてもらいたいと考えている。木々や身近な自然に親しむことは、理屈ではなく子供の時に得た感覚が大きいと柏樹さんは話す。

「砺波カイニヨ倶楽部」の活動状況は次の通りである。

### ●発足の意図

1. カイニョにこだわり、カイニョと付き合い、カイニョの充実を。
2. カイニョと交流し、文化を語り育む。
3. 全世代、全地域にカイニョ暮らしを普及。
4. カイニョ風土、カイニョ公園の宣伝。

### ●会員（会費一年間1千円）

\*平成9年の立ち上げ時の会員数47名。4年で会員数は100名近くに増加。近年は100名近くで推移。  
\*カイニョの有無に関わらず参加を呼びかけ、高校教師、建築設計関係、商業関係者、砺波郷土資料館職員、砺波市役所職員、ナチュラリスト、主婦など多種多様な人の参加を得た。林業や緑と関わりあ  
る人が多いが、植物の専門家や地域研究専門家は  
いなかった。現役退職者から30～40代の母親まで会  
員の年代層は幅広い。

### ●活動エリア

砺波市、南砺市、及び高岡市の一部。

### ●活動内容：年2～3回、①～③の活動を実施

\*①地域のカイニョの手入れの手伝い(カイニョ保  
全)、②地域のカイニョの見学会、夏休みの親子カイ  
ニョ体験(カイニョを楽しむ)、③情報交換、意見交換、  
会報発行——など。

\*活動参加人数は毎回約30人程度。活動内容により参  
加者は異なる。

\*会の活動内容や時々テーマやニュースを会報で報告。



屋敷林の枝落とし  
(「砺波カイニョ倶楽部」のHPから)



屋敷林の見学会



屋敷林の清掃

(「砺波カイニョ倶楽部」のHPから)

設立当初は、「カイニョ倶楽部は何をしているかわからない得体の知れない集まり」というのが地域の受け止めであった。10年近く経過し、ようやくカイニョ倶楽部の活動が地域に認知され、行政から意見を求められる機会も多くなった。新聞やテレビで活動が報道されることも増え、それを見て、自宅の屋敷林を自分の問題として考える人が1人でも増えればと柏樹さんは活動への思いを語る。

一昨年には、富山県砺波農地林務事務所から、屋敷林の落ち葉や剪定小枝の日常発生量調査を受託し、「屋敷林の立木状況」、「落ち葉等の発生量」、「屋敷林の生育状況確認」調査を行った。砺波地区で5タ

イブの屋敷林を選定し、4月～11月にかけて、会員約50名がチームを組んで毎月の調査を分担した。

「地域で営々と培われてきたカイニョという平地の緑をどう維持していくか」、「カイニョをきっかけとして、木々や緑と一緒に暮らす人をつくりたい」と考え活動してきたことが、ようやく少しずつ認められ活動の輪が広がってきたと、この10年近くの活動の跡を振り返る。

一昨年の台風23号により屋敷林の多くの木が倒れた。翌春、砺波カイニョ倶楽部会員が杉と檜を1本ずつ被害のあった屋敷林に植樹したことが報ぜられ、非常に注目された。

台風23号はその倒木被害も大きかったが、高齢者も若い人も自宅の屋敷林を今後どうするか考えるきっかけとなったと柏樹さんは言う。台風23号で地域屋敷林の2万本の木が倒れたが、翌年春には、約1万2～3千本が新たに植樹された。これは、砺波のカイニョ魂が生きている画期的な出来事であり、「屋敷林はなくてもよい面倒なものと考えている人が大多数ではない」ことがわかり、とても大きな励みになったと柏樹さんは笑う。

### 今後の課題と行政に望むこと

「砺波カイニョ倶楽部」の今後の課題と行政への要望をお聞きした。

- 役員の6～7人で会を運営しているが若い人にも加わってもらう必要がある。
- 口コミや新聞記事をみての新規加入が多いが、屋敷林を持つ人の積極的な加入がほしい。屋敷林と生活の中で向き合い、悩んでいる人の参加である。
- 田園空間事業のコア・ミュージアムが今年6月オープンする。田園空間事業により屋敷林への関心は高まったが個々の屋敷林保全にはそう影響を与えていない。コア・ミュージアムに魂を入れるため、砺波カイニョ倶楽部が積極的にお手伝いしたい。
- 屋敷林保全に取り組む県内他地区との連携や交流、情報交換ができる体制となればと思う。

黒部川扇状地、旧富山市月岡地区、旧大沢野、旧大山町、立山町にも立派な屋敷林があるが、地域として保全活動はなされていない。他地区で屋敷林保全に取り組むチームができ、木に関わる人達が増えていくことは、大切な人的資源となる。——と課題を整理された。



「砺波カイニョ倶楽部」総会  
(「砺波カイニョ倶楽部」HP から)

「砺波カイニョ倶楽部は行政の助成はもらわず自由に活動を行うことがモットー」とことわられた上で、最後に行政への要望を話された。

砺波カイニョ倶楽部が活動を始めて約10年、田園空間事業への取組が始まって7～8年、この間、農村環境、農村風景保全への行政の姿勢は前向きなものに変わってきた。個人所有の屋敷林維持への助成は難しいという考え方から、地域の緑資源として屋敷林保全が必要という姿勢に変化してきた。地域協定を締結した地域の屋敷林に対し、助成ができるようになった意義は大きい——と評価された。

行政の事業は事業期間が終了すると先細りとなるものも多い。カイニョ倶楽部の活動は、屋敷林や木とつき合うことで人も変っていくことを目指す長いスパンの取組である。行政には、そういうタイムス

パンで、地域の緑資源の保全事業に取り組んでほしいと期待する。

カイニョ倶楽部にも地区のグリーンツーリズム促進事業に参加するよう要請されている。しかし、砺波カイニョ倶楽部の活動は、緑の環境をつくる、屋敷林と共生する人をつくる活動である。都会からの観光客や滞在者を増加させるという活動とはなじまない気がしている。

行政は、定量的に数字で把握できるものばかりでなく、長い目で地域の緑や生活のあり方に目を向け対処してほしいと思う。それには遊び心も大きな要素である。グリーンツーリズムの来訪客数増加といったストレートな成果を求めず、回り道も必要ではないか。屋敷林でも山でも、人と木とのつき合いは、もっと長い目でみていくことが必要であると思う。

「緑地として CO2 削減効果や、クーラーを使わない電気使用量削減効果などの数値化できることも大切だが、木と共に生きることにより与えられる恵みや豊かさをもっと提示すべきと思う」、「昔の人は屋敷林と共に生活することにより、屋敷林から物的恩恵を受けるだけでなく、自然への畏敬の念や木の成長や息づかいから豊かな情操を育てていたのではないかと思う」——と話を締めくくられた。

## 11. 川は海と町と人をつないでいる ー株式会社御祓川（みそぎがわ）



森山 奈美 チーフマネージャー

### 森山奈美さん

森山奈美さんの仕事場は、金沢市内のシンクタンク。彼女は、そこの研究員だ。週のうち3日はシンクタンク勤務。あとの3日は株式会社御祓川の社員として勤務している。しかし、御祓川は無給。というのもシンクタンクの社長さんも出身は七尾市、御祓川の役員でもある。ちなみに御祓川の社長さんは、森山さんのお父さんということで、とても“おおらかで和やかな”雰囲気である。

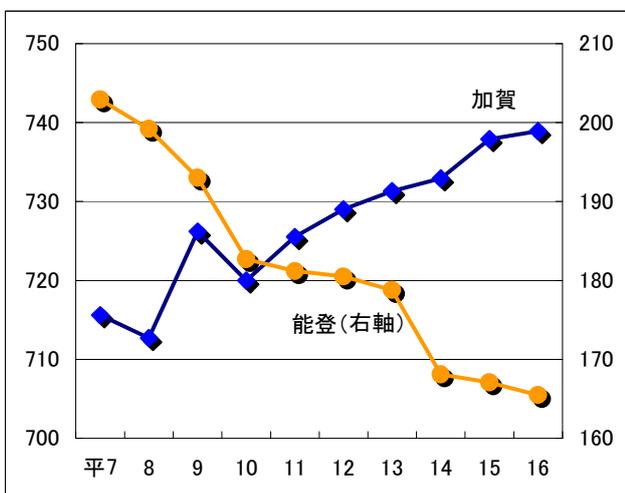
### 七尾市再生への歩み

石川県七尾市は、平成16年10月1日に、(旧)七尾市、田鶴浜町、中島町、能登島町の1市3町が合併して誕生した。御祓川の活動フィールドは、旧七尾市、それも中心部がエリアだ。

七尾は古くは万葉の時代から港町として栄え、加賀百万石の前田利家が最初に城持ち大名となった町である。

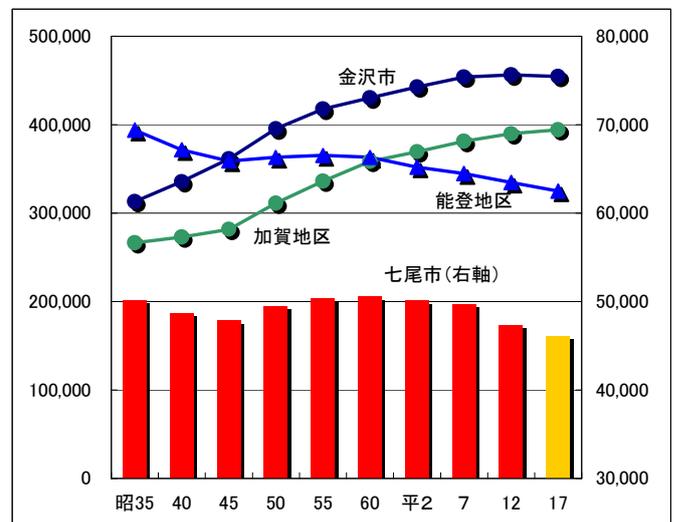
しかし、高度成長期以降、金沢、加賀地域が人口を伸ばしていったのに対し、能登地域は人口が減少している。七尾市については他の能登地域に比較して人口減少の割合は低いが、能登地域の中心都市としての地位低下は否めない。朝日新聞社の『民力総合指数』を見ても加賀地域と能登地域の勢いの差は歴然としている。経済界には「100年後には七尾はなくなっているのではないか」という声まであったらしい。

民力総合指数の推移



朝日新聞社「民力」

国勢調査人口の推移 (人)



平成17年は速報値 (七尾市は旧七尾市分)

## マリンシティ推進協議会

昭和60年、「これではいけない」と七尾青年会議所が立ち上がって6回の市民大学講座を開催した。

当時、青年会議所の活動の多くがイベント開催であったのに対して、七尾青年会議所では最初に計画を立てた。それが「七尾マリンシティ構想」。能登島大橋が開通し、島へのフェリーが廃止され、港の賑わいが急速に失われていた時期だ。この構想では、波止場に新しい機能として市民交流・集客施設を検討した。これが平成3年、フィッシャーマンズワープ「能登食祭市場」として結実した。

## 御祓川と株式会社御祓川

さて、港に核施設ができた。一方、平成7年には、七尾駅前でも再開発ビルがオープンした。「さあ、今度は駅と港の間で軸を作ろう」と考えて、ふと町を歩くと、そこには汚れきって異臭を放つ川があった。

それが「御祓川（みそぎがわ）」だ。昔「家々に 珊瑚の色の格子立つ 能登のな、おの御祓川かな」と与謝野晶子が詠んだ川だが、高度成長期における流量減少や生活排水などにより、全国の都市河川と同様、すっかり汚れてしまった。



御祓川（御祓館から港方向）

かつてマリンシティ構想にかかわった青年会議所の理事長経験者などが集まり、「御祓川を再生しなければ軸づくりはできない」と考えた。考えただけでは足りない。メンバー8人が出資をして、平成11年6月23日に『株式会社御祓川』を作ってしまった。設立時の資本金は5千万円。構想から登記まで半年。とんでもない行動力である。

当時、このようなまちづくりを進めていくための新たな法人としてNPO法が施行されていた。しかしメンバーはあえて株式会社を選択した。「主体をはっきりさせ、自己責任で事業を行いたい」からだ。ただし利益を出資者に還元することはない（といって

もまだ累積欠損がある）。いってみれば『社会的株式会社』だ。一連のマリンシティ運動の合言葉は「走りながら考え、考えながら走る」と明快。

## 株式会社御祓川の事業

株式会社御祓川の事業は、一つは直営の飲食店『いしり亭』と工芸品『暮らしっく館 葦』の経営。これは利益が出ている。そして御祓川の浄化に関する活動や調査、それとコミュニティ再生や街の賑わい創出に関する事業だ。

社員は森山さんだけ。あとは『いしり亭』のパートさん5人。

御祓川が設立される前年、七尾市には、まちづくりを担うもう一つの企業、TMO『七尾街づくりセンター株式会社』が設立されていた。本来ならば、まちづくりの拠点となるはずだったが、設立当初は専従職員がおらず、結局その機能も御祓川が担うことになった。現在は中心市街地のまちづくり全体をTMOが、個別店舗などの出店プロデュースを御祓川が行っており、役割分担ができている。

「民間でやっていて一番いいのは“選べること”」だと森山さんは言う。要は行政の公平性とらわ

れず「えこひいきしやすい」のだ。

株式会社御祓川の事業は次のとおり。

### (1) 御祓川の環境浄化に関する事業



ばっ気方式による浄化実験場

御祓川の浄化については、地元七尾商業高校の生徒からの提案をもとに、ばっ気方式による浄化実験を行っている。これは県、市、NPO、企業、学校による共同研究体として活動中。環境事業団（現 独立行政法人環境再生保全機構）の助成事業だ。

今は、ビオパークという植物を使った浄化実験もしており、今年はクレソンを育て、それをケーキに焼いて販売している。1リングにつき100円は川への折りファンドとして環境浄化にあてられる。

「川そうじをしましよと言っても参加しにくいけど、ケーキを買って川を浄化しましよならば

手軽に参加できる。いろんな参加の形態を用意することで活動の輪が広がっていく」と森山さんは言う。

かつて異臭を放った御祓川には、今、子供たちが魚釣りに来ている。活動の成果を実感できる瞬間だ。

### (2) 界隈の賑わい創出に関する事業

フィッシャーマンズワープと七尾駅をつなぎ中心市街地を通る道路をシンボルロードと位置付け、御祓川沿いに賑わいを作り出す活動をしている。

具体的には、七尾街づくりセンター株式会社との協働で、かつて銀行だった古建築を再生して貸店舗とした『寄合処 御祓館』の整備、前述の飲食店『いしり亭』等の運営、川沿いへの新規立地のプロデュースなどを行っている。

「川に顔を向けた店や家が増えていってほしい。まちづくりに必要なことは、イエ・ミセ・マチの再生ではないかをつくづく思う」と森山さんは語る。



寄合処 御祓館

### (3) コミュニティ再生に関する事業

平成10年から開催されている国際音楽祭の実行メンバーが中心となり、市民が主体的に川とかかわりを持つようと、平成12年に『川への祈り実行委員会』が設立され、御祓川が事務局を担当している。ここでは『川への祈りファンド』を市民から募り、活動費用としている。一口千円で、現在まで1千万円を超える資金が集まり、川そうじや川あそびなどのイベント、セミナーやコンサートやお祭りの開催、地元コミュニティラジオでの番組放送などを行っている。

これ以外にも、御祓川は、本当にたくさんの仕事をしている。森山さんは、会社の社員として、会社が事務局を預かるグループや団体の事務局として、本当に目が回るような忙しさで働いている。これは、御祓川の社長さんが森山さんのお父さんであることを差し引いても、本当にすごいことだ。

「仕事をもっているメンバーは忙しい。会議の設定、企画書の作成、行政機関などとの調整や書類の申請、メンバーのスケジュール調整などなど、とても仕事をもちながらできるものではない。幸い私は

シンクタンク職員という仕事の性格、上司の理解など幸運に恵まれている」と森山さんは思っている。

経済が無限に拡大していくと皆が思っていた時代、多くの経営者は、店の事業拡大は自分の力だと「考え違いをしていた」。町が衰退していくと、今度は事業縮小の理由を自分以外のところに求めようとしている。森山さんは、御祓川の汚染と、これら人々の意識がパラレルになっていると考える。自分の店の存在意義を考える時、「ミセはマチの文化に支えられて商売させてもらっている、という自覚があれば、かつての旦那衆のように、もっとマチに投資をすることを考えるだろう。そうすれば御祓川も中心商店街もこんなにはならなかった。これは個人でも同じ。ヒトとマチの関係が疎遠になっている」と。

御祓川のまちづくりの手法は、滋賀県長浜市の『黒壁』を参考にしている。御祓川設立準備会の時には、黒壁の笹原さんと呼んで話を聞いているし、笹原さんは、株式会社御祓川の名付け親でもある。

株式会社御祓川を中心とした七尾市中心市街地再生の活動は、株式会社御祓川の周辺に、NPO や任意のまちづくりグループが連携した形で進められている。森山さんは「たとえば、壊されようとしている店舗や倉庫を活用する場合、株式会社で買い取り運営を NPO にお願ひする方法がある。会社だと機動力があるし、責任もはっきりしている。一方、より多くの市民から賛同を得て活動する場合は NPO などを中心としてワークショップを開催しながら合意形成をしていく方がうまくいく。『まちづくり会社型』の株式会社御祓川、『ワークショップ型』の川への祈り実行委員会、それぞれの利点を生かして進めている」と話す。確かにそうだが、市民が御祓川の活動を理解し信頼しているからこそできることであろう。

### まちづくりを支える七尾市民の心意気

たとえば、平成 16 年、市内の倉庫が、よく調べてみたら、これが、かつては日本で二番目に古い芝居小屋だったことがわかった。早速市民が立ち上がった。『でか小屋再生おせっ会』という組織を立ち



でか小屋で開催された芝居  
(でか小屋再生おせっ会のHPから)

上げ、小屋再生に向けて 1 円玉募金を開始 (約 15 万円集まった) し、内部をきれいに掃除、そして修理、ついに 12 月には『でか小屋寄席』をすることができた。その後も猿回しやコンサート、お芝居などに使われている。ここまでの活動はワークショップ型の活動が効果的だった。しかし倉庫は個人の持ち物であり、再生するためには多額の資金がいる。その後運営していく必要もある。そうになると、何らかの『まちづくり会社型』の動きが不可欠だ。

七尾には、青柏祭という港町にふさわしい勇壮な祭りがある。かつては『旦那衆』が地域の文化を支

えてきた。御祓川の活動は、まさに旦那衆の活動を思わせる。システム自体は聞いて「ふむふむ」と簡単に理解できる。だが、七尾市の場合は、まちづくりを目指して自ら出資した設立メンバー、森山さんを事務局に派遣してくれているシンクタンク経営者、御祓川の活動に賛同し、本当にたくさんのイベントや事業を実行してくれる多くの市民がいた。これらの人的財産に恵まれ、強いリーダーがいて、それらが育てられ、地域に受け入れられるという多くの偶然と、その何倍も上回る努力があったことを、これから取り組もうとする地域は同時に学ばなければならない。

## 今後の展望と行政に望むこと

森山さんに、今後の展望を伺った。

まず最初に出たのは、NPO 関係の活動の輪を広げたいということ。具体的には『川への祈り実行委員会』の自立。会員からのファンと事業収入で運営しているため、活動の輪を広げるためにはより多くの賛同者が必要だ。実行委員会の事務局も現在は森山さんが兼務している。活動の幅を広げ、コミュニティビジネスとして自立させたいと考えている。「人を雇えるようになりたい」という森山さんの願いは、同種の活動をしている全国の多くの組織の願いでもある。

行政の人たちは、まちづくり活動のプロであるはずなのに、私達の活動に無関心なことが多い。「行政の人と話をするとよく“予算がないから”と言われる。お金よりも、もっと人を出すとか知恵を出すとかしてほしい」という声は切実だ。「行政はまちづくりに大きな力を持っている。だから、私たちは、行政と対等な立場で協働したい」の言葉に力が入っていた。「七尾では、協働の意味が勘違いされている場合が多い。様々な主体が真の協働でまちづくりを進めるには、協働をコーディネートする人材を育てることが不可欠」だという。

もうひとつ、行政には「新しい仕組みづくりをしてほしい」と思っている。例えば、クレソンケーキの場合、栽培している場所は川の占用許可をとっている。今は実験なので目をつぶってもらっているが、行政側からは、「本格的に維持管理を委託した場合、そこで育てたものを売って商売するのはいかなものか」と言われている。「経費を捻出する知恵を含めて、新しい公共とは何かを考えるべきだ」森山さんは思う。

もっとも、株式会社御祓川の経営も、左団扇ではない。ようやく単年度黒字になったというが、過去の累積欠損がまだまだある。資本金も建物購入や運転資金で使ってしまった。借入金もある。収入の半分超は『いしり亭』の売上だ。あとは御祓川2号館の家賃収入や国などからの委託料収入やメンバーが各地で講演した講演料。ユニークなのは、「全国に知られるようになって、あちこちから視察がたくさんきた。そこで、営利企業でもあり、視察対応を有料にした」こと。民間企業ならではの発想だ。

株式会社御祓川の事業内容は、三つの循環、御祓川の浄化＝「自然資源の循環」、界隈の賑わい創出＝「地域経済の循環」、コミュニティ再生＝「思想の循環（まちづくり活動を次代に引き継いでいく）」を作り上げること。この3つをある時は大胆に迅速に、ある時は慎重にゆっくりと時間をかけて、民間企業、NPO、市民、行政が協働してやっていきたい、それが森山さんの、そして株式会社御祓川の望みである。

## 12. “はりんこ” は自然のバロメーター —美川自然人クラブ



赤井 栄樹 会長（右側）

北野 信行 はりんこ塾代表（左側）

### （旧）美川町

北陸自動車道美川インターチェンジ近くの海よりに、突如「美川県一の町」という看板が現われる。

いやでも目に入るので、この付近を通った人は、きっと見覚えがあると思う。

ここが、白山市美川、旧の美川町である。

明治5年には、県の中央ということで、一時石川県庁が美川に置かれていた。当時の場所には、現在『石川ルーツ交流館』という展示施設が建っている。

美川は江戸時代、北前船の交易で大いに繁栄した。その名残は、毎年5月に開催される『おかえり祭り』で曳きだされる絢爛豪華な山車からも想像できる。町の中心部にある藤塚神社には、山車を格納する13の蔵がズラリと並び、出番を待っていた。祭りを担当する10の町は順番に『おかえり筋』という世話役を引き受けるのだが、祭り当日は「町の人も外の人も誰でも酒や食べ物を出して接待する。だから大変なのだが、これが漁師町の心意気」なのだ。



### 北野信行さんと赤井栄樹さん

美川自然人クラブを語る時、この二人を避けて通ることはできない。北野さんは、白山市の教育委員会参事として、財団法人白山市体育施設管理公社の常務理事をしている。赤井さんは鉄工所の社長さんだ。この二人の奮闘努力の様子は、これから順番にお話していくことにする。

### はりんこ（トミヨ）という魚

“はりんこ”とはトミヨのことで、美川ではハリ（とげ）がある魚ということで、“はりんこ”と呼んでいる。トミヨはトゲウオ科の淡水魚で、体長は約5cm。胸ひれや背びれにとげがあるので不用意につかむと痛い目に会う。15度前後の清流に生息する魚で、か



はりんこ（トミヨ）（はりんこ塾のHPから）



安産川 流れ込んでいるのは井戸水

つては全国各地の小川で見られた。美川の街中を流れる『安産（やすまる）川』にもたくさんいた。「昔は、川遊びをしても、『また、はりんこか』と邪魔者扱いしていたものです。でも、高度成長期に入り、川は家庭排水や工場廃液で汚れ、工場の地下水汲み上げで水位が下がり、河床や岸はコンクリートで固められ、一時は絶滅したのではないかと皆思っていました」と美川自然クラブの赤井会長は言う。

「はりんこは、巣を作る魚としても知られています。メスが産んだ卵はオスが片時も巣を離れずに稚魚が巣立ちをするまで守り続けます。ヒレを動かして新鮮

な水を卵にかけたり、壊れた巣を修理したり、巣から飛び出した子供を口に入れて戻したり、本当に子煩悩なのです。また、はりんこは泳ぐのが苦手なので、川の藻などに隠れて育つため、余計に護岸工事の犠牲になりやすかったのではないのでしょうか」赤井会長は続ける。

また、子供たちの遊びも川遊び、木登り、おにごっこから、コンピュータゲームに移っていき、メダカやどじょうなどとともに“はりんこ”の存在も忘れられていった。

しかし、幸運なことに安産川は、手取川扇状地の扇端部分にあたり、地下水が自噴していたため、冷たく清浄な伏流水が豊富に流れ込んでいた。今でも井戸を使う家庭が多く、集落には共同井戸も残っている。“はりんこ”は、ひっそりと、したたかに生き延びていたのだった。

### 『はりんこ塾』誕生

平成5年5月、当時美川町企画財政課長だった北野さんが事務局となり、商工会青年部を中心に、各職業・分野のメンバーが集まり、まちづくりグループ『はりんこ塾』が結成された。名前の由来は「普段はおとなしいが、何かあるとトゲを出すグループ」ということから。

設立当初は、特に“はりんこ”の保護に力を入れていたわけではなかった。ところが、塾主催の講演会で金沢大学の平井賢一教授の「はりんこは今どこへ？」を聞き、“はりんこ”が危機的状態にあることに気づいた。

そこで平成7年からは、その名の通り“はりんこ”の保護と自然保護に活動の重点を移していった。

まず、平成8年にはトミヨの生息調査を実施、また8月には、新装なったJR美川駅の交流スペースを活用して『ふれあい昆虫展』を開催した。このイベントには県内県外から1,000人の見学者があり大成功となった。

平成9年には、それまでの調査を報告書にまとめ、美川町（当時）に提出。平成10年には美川町（当時）の3小学校にトミヨ飼育水槽を設置した。

平成11年には、この活動が認められ、毎日新聞自治大賞奨励賞を受賞し、一躍全国区のグループとなった。その年には、要望していたトミヨ増殖池も完成（ただし「人工的に造ったものには自然の生き



トミヨ増殖池

物は集まらない」らしい)、トミヨは、平成 15 年には美川町（当時）の、平成 16 年 1 月には、ついに石川県の天然記念物に指定されるに至った。

『はりんこ塾』の会員は、現在 18 名。「いつも出てくるのはこのうち 10 人ほど。これでちょうどいい。飲んで議論ができるのは、せいぜい 12・3 人」と赤井さん。毎月 1,000 円の会費は、「すべて、会議後の飲み代に充当している」そうだ。



親子ふれあい自然観察会（はりんこ塾のHPから）

『はりんこ塾』は提案型のグループ。いろんなことを行政などに提案している。でも提案を実証していかないと理解してもらえない。大変だけど、それが楽しいのかな「今もそうだが、住民の理解を得るのは本当に大変。以前は、生活廃水を流さないようお願いすると『はりんこ俺たちの生活とどっちが大切なのか』とよく言われた。だから、年 2 回の草刈りや『親子ふれあい自然観察会』などを通じて理解が得られるようにしている」という赤井さんの言葉は、提案・実践型の塾の姿をよく表している。

### 美川自然人クラブ誕生

「トミヨを天然記念物に指定しよう」という目標が、ついに叶った。“はりんこ塾”は、本来の目的であるまちづくり活動にシフトすることになった。

代わって、トミヨの保護、人と川とのかかわりを作っていこうという精神は『美川自然人クラブ』に引き継がれ、平成 16 年 3 月にクラブが誕生した。初代会長は、“はりんこ塾”の初代会長であった赤井さん。ちなみに“はりんこ塾”は北野さんが塾長になった。

クラブの活動は、“はりんこ塾”と合同の安産川の清掃活動、トミヨの生息調査に加え、手取川河口での野鳥観察などを行っている。平成 16 年には、福井県大野市で開催された「第 2 回トゲウオサミット In Ono」や同じく大野市で開催された「トゲウオ北陸交流会」にも参加した。

今年度は「美川ふるさと自然マップ」作成に向けて取り組んでいる。これは、小学校や保育所などに提案箱を置き、さまざまな人たちから「どこどこにこんな生き物がいます」というのを募集し、それをまとめ作っていく参加型のマップだ。

赤井さんが、地区の小学校に講演に行ったとき、子供たちは学校の裏に流れている川の名前を知らなかった。先生も知らない。手取川にいる魚を訪ねたら「鯛がいる」と答える子供がいた。「チグリス川やユーフラテス川の名前を教える前に、自分たちの周囲の地理や歴史、自然をもっと教えることが必要なのではないか」と赤井さんはつくづく思った。

トミヨという魚を介して、交流の輪は確実に広がっている。

「トミヨを守るということは川を守ること、そして水を守ること、自然を守ることに繋がっていくのである。

自然人クラブの会員数は現在 80 名余り。

“はりんこ塾”が、まちづくりを目的とした、限られたメンバーの会であったのに対して、『美川自然人クラブ』は、トミヨの保護、それを通じた美川、そして白山市の自然環境を守っていこうという目的に活動を絞り、そのかわり、よりオープンな組織として発足している。もっとも塾のメンバーは、そ

のままクラブのメンバーになっている。

「自然人クラブには若い人も入っている。会の活動に生きがいを見出して積極的に参加してくれる若者もいて頼もしい。自分で会のホームページを立ち上げてくれた会員もいる」。

### 今後の活動方針

美川自然人クラブは設立後まだ間がないので、とりあえずは『はりんこ塾』と連携しながら事業を進めていくこととしている。

活動のモットーは「一時の思いつきなら誰でもできる。継続していくことが大切」。塾の時代から続けている年に2回の草刈りも、当初は「トミヨの生態を知らない人が、トミヨの生息地の藻まで刈ろうとして大変でした。でも続けていくうちに、メンバーと一般参加者の役割分担が自然にできました」とのこと。

今では「刈った藻の中に“はりんこ”がたくさん入っていて、子供たちが魚を選び分けて川に返している」そうだ。

また、体験学習に参加した子供たちから「また“はりんこ”かぁ」という声が聞こえた。「やっと昔の状態に戻ったんだとうれしさがこみ上げてきた」瞬間だった。

「白山市は、白山の山から海まで手取川でつながっている。だから活動の輪を市全体に広げていきたい」と赤井さんは意気込んでいる。

昨年、会員の学校の先生が、白峰小学校の校長先生として赴任された。海の子と山の子との交流も生まれそうだ。また、金沢市の先生を退職された人が「ぜひ参加させてください」とメンバーに入り、安産川の水温を定期的に観測し記録している、そういう人もいる。「地道に活動していたら、そのうち仲間の輪が自然と広がってくるものです」と赤井さん。

昨年、加賀市大聖寺瀬越町で、昔の小学校の校舎を活用して交流拠点としている「竹の浦館」を運営する NPO 法人「竹の浦夢想塾」と交流した。メンバーは定年退職をした人ばかりだが、そのパワーに



いたるところに井戸がある。もちろん自噴

圧倒された。「うちのクラブにも、こんな交流拠点が欲しいね」と北野さん。「昔やって大成功だった昆虫展を今年か来年にもう一度やってみたい」とは赤井さん。またまた次の活動目標ができてしまった。

「美川地方は、他の加賀地域に比べ自然が残っている。金沢や松任などに住むたくさんの人に、ひとつでも、ふたつでも自然と接してほしい。実際に川に入り、魚に触って本物の体験をしてほしい。“はりんこ”も実際に触ってはじめてトゲを実感できる」と願う。

「だいたい今の小学生の親自身、子供の時に川へ入ったことがない。『川は危険』ということで川遊びが禁止されていたからだ。だから、親子体験では、親の方がはしゃいでいる。子供のタモを取り上げてしまい、子供と喧嘩している父親もいる。それほどに自然体験は、やってみると楽しい」のだ。

ただし「自然人クラブは『なんでもかんでも自然保護』ではない。開発と調和を図りながら、楽しく自然を守る活動をしていきたい」赤井さんも北野さんも一致した考え方である。

「手取川の河川敷に柳の森があって、そこには鳥や獣がたくさんいた。我々も子供たちを連れて野鳥

観察やカブトムシ採集などをしていた。でも昨年、一昨年の全国の洪水で、河川敷内の高木は伐採することになった。行政の人もいろいろと考えてくれたようだが、結局は人命財産保護の観点から、一部を残して伐採されてしまった。仕方のないことだったが、木は一度切ると育つのに何十年かかる。切るなとは言えないが、もっといい知恵がなかったものかと最近思うようになった」と赤井さん。これも今後の活動の課題だ。

初代会長の赤井さんの任期は3月まで。「代表は長くやってはだめ。次は『はりんこ塾』出身者以外の人に会長になってもらうことにした」と赤井さんは言う。

### 行政に望むことはない

最後に行政に望むことを聞いたところ「特にないね。行政との窓口は北野さんがやってくれるし、クラブの事務は藤木さん（旅行会社の社長さん）が熱心にやってくれる。行政からは、いろいろお願いもされるけど、いい関係です」ということであった。うらやましい限りである。

### 13. 全てのいのちはつながっている ―ハスプロジェクト推進協議会



三浦 正親 事務局長

#### 三方五湖

「ハスプロジェクト推進協議会」(通称「ハスプロ」)は、三方五湖一帯の豊かな自然環境を守り再生しようと地域の多くの仲間が色々な視点から活動を展開している。「ハスプロジェクト推進協議会」事務局長三浦正親氏から、三方湖湖畔の若狭三方縄文博物館(三浦氏は縄文博物館友の会「ドキドキ会」の会員でもあるため、よく来館している)でお話をうかがった。

福井県嶺南地域の中心部に位置する「若狭町」は、平成 17 年 3 月、三方町、上中町が合併して誕生した。

三方五湖は若狭湾国定公園に位置し、その湖岸風景はリアス式海岸の切り立った日本海の風景とは対照的なおだやかで優雅な風情がある。三方五湖の 5 つの湖は水質や水深が違い全て色が異なることから「五色の湖」と呼ばれている(三方五湖―三方湖、水月湖、菅湖、久々子湖、日向湖の 5 つの湖からなる)。

三方五湖とその周辺の変化に富んだ自然は、鳥類や水辺の生き物にとり棲みやすく、多くの渡り鳥が飛来する。

しかし、昭和 50 年代初頭から、農地や宅地への水害防止のためコンクリートの護岸工事が進められ、砂浜や、ヨシやヒシなどの水生植物の多い湿地帯が減少してきたと三浦さんから説明を受けた。三方五湖は、河川法では二級河川に指定されており、治水等の目的から護岸工事が積極的に進められてきた。また、昭和 30～40 年代から進められていた土地改良や河川改修により、生活排水や農業排水の直接流入が増え、湖水の汚濁が進み、三方五湖とその周辺の自然環境は大きく変わってきている。

三方五湖や地域の豊かな自然と豊かな人の生活を取り戻したいという思いの高まりが、「ハスプロジェクト推進協議会」立ち上げの契機となったという。

#### 三浦さんと自然再生活動

事務局長の三浦正親さんは真言宗の僧侶。旧三方町出身。小・中学校時代は敦賀市ですごし、高野山で修行の後、昭和 62 年から三方町に戻った。

小・中学校時代にはいつも、敦賀市の中池見湿地や木の芽川で魚をとったりして遊んでいた。三方町



三方五湖 (若狭町 HP から)

に帰ってからも、お子さんを少年時代に親しんだ中池見湿地に連れていったりしていた。また、子ども達が自然の中で遊ぶことがどんどん少なくなりこれで良いのかと感じていたという。

中池見湿地で知り合ったナチュラルリスト達と話をする中で、三浦さんの中に、少しずつ身近な里山や水辺環境保全への関心が高まり、自然再生活動参加へ繋がっていったと話される。

その後、三方五湖の水質浄化に取り組む「湖浄協」に誘われ、ゴミ拾い活動などに参加していた。

旧三方町には、河川の汚れ調査・啓発・美化活動を行う「三方五湖浄化推進協議会(通称：湖浄協)」、EM 活性液やボカシを利用して水質浄化に取り組む「みなおし会」、湖の水質を守るため廃食油を回収し手作り石鹸作りをはじめたり、美化活動・食の安全に取り組む「五湖生活学校」、水を汚さないよう合成洗剤の使用を控え、廃食油から作った石鹸の使用を推進している「婦人会」(現 女性の会) など、環境保全・浄化に取り組む色々なグループがある。三浦さんは、町民文化祭の各グループのブース展示などでも、環境保全について勉強するようになった。

高野山真言宗は大宇宙、大自然界の真理そのものを根本の本尊とし、大宇宙・大自然界の法則は『循環と調和』であると考え、「自然界には無駄ないのちの一つもない」、「全てのいのちには意味があり、互いに支え合って生かし生かされている」、「全てのいのちはつながっており全体でいのちの大きな環をつくっている」という教えである。

だから、「よく自然保護と言われるが、人間が自然を保護するなどという思い上がった考えではなく、人間が自然の中で生かされて生きているということを再認識するための活動だと思っている。人間だけが勝手なことをして、大きないのちの環から外れないようにしなければいけない。」と、話される。

三浦さんは、三方に戻って自然と人間との関わりを考え直す機会が多くなり、人間は自分に都合が良いという理由から湿原や沼地を埋め立てるが、その結果多くの生命が失われてきたのではないかと感じていたと振りかえる。

### 「ハスプロジェクト推進協議会」立ち上げの経緯

若狭町域に在る福井県海浜自然センターの意向も受け、有志が、三方五湖と周辺里地里山の豊かな自然を後世に伝えるため、自然観察や自然環境保全の情報交換の場として、平成16年に立ち上げたのが「メーリングリスト」ハスプロジェクト推進協議会である。

その名称は福井県で絶滅が危惧されるコイ科の魚「ハス」にちなんで名づけられた。

そして1年後、情報交換中心のメーリングリストから、今後は規約を持つ組織にステップアップし、みんなで意見を出し合って活動内容を充実させ、仲間の輪を広げていける会にしようということで、平成17年5月21日「ハスプロジェクト推進協議会」が設立された。三浦さんは、事務局長として協議会に参加した。会長の吉村義彦さんは、合鴨農法など除草剤や農薬、化学肥料を使用しない農業を展開し、「湖浄協」のメンバーでもあるという。

「ハスプロジェクト推進協議会」には、地元住民、農業・漁業関係者、教職員、研究者、技術者、行政職員など色々な分野の人が参加した。地域的にも、若狭町のほか、近隣の美浜町、敦賀市、小浜市、福井市、大野市、鯖江市などからの参加も得ることができた。



福井県で絶滅が危惧される「ハス」  
(ハスプロジェクト推進協議会 HP から)

### 三方五湖・湖(ウミ)と里(サト)のネットワーク再生ビジョン

平成 17 年に三方五湖がラムサール条約に登録見込みという情報が伝わり、「ハスプロジェクト推進協議会」としても、将来のあるべき姿を描こうとまとめたのが『三方五湖・湖(ウミ)と里(サト)のネットワーク再生ビジョン』である。

これまでの取り組みを活かし、協議会参加者と多くの地元住民の協力を得て、皆で分担し知恵を出し合いビジョンを作成した。

再生ビジョン作成に当たり最初に取り組んだのが、地域の昔の自然状況調査である。

昔の状況を良く知っている古老を探し出し、手分けして聞き取り調査を実施。その聞き取り調査を通じ、地域の環境変化の色々な姿がみえてきた。古老の生活していた 40～50 年前の状況に戻すことは不可能であるが、自然と人の生活が深く関わっている当時の状況や、湖がもたらす恩恵をかなり鮮明にイメージできるようになったという。

自然環境保全や復元は短期間では成果を出していくことが難しく、色々な分野の人と折り合いをつけながら、一歩でも前進するような取り組みが必要であると三浦さんは語る。

現在、ホームページで公開している再生ビジョンは(案)がついたままである。地域の古老からの聞き取りにより、どんどん新しい内容が追加されている。色々な人の意見を聞きながら、再生ビジョン実現のための具体策をどんどん改正・追加している。一度作った再生ビジョンにしばられず、当分の間は(案)でいこうという方針である。

### 活動拠点「かや田」での自然体験活動

ハスプロの主な活動は、①三方五湖流域の自然環境及びその保全対策に関する調査・研究活動、②自然環境を中心とする環境教育活動、③かや田をはじめとする三方五湖流域の自然環境の保全や復元に関する実践活動——である。

菅湖を越えたあたりに広がる若狭町気山中山地区の「かや田」がハスプロの活動拠点である。

通常「カヤ」は、ススキの別称であり、屋根葺きに使うイネ科植物の総称だが、若狭地方では葎(よし)をいう。敦賀の中池見湿地と同じように、3～4 千年前の根が埋まっている湿地帯であり、かや田は容易に土地改良が進まず耕

転機も沈んでしまう沼地である。かや田は、田といっても素掘りの土水路で沼や池とそれほど変わらず、昔は私有地も多かったが、現在はその半分は町有地となっている。

福井県の自然保護センターが開催した中山地区「かや田」での自然観察会に参加し、三浦さんは特にかや田に興味を引かれたという。2～3 年前からは、高齢化のため耕作できなくなった「かや田」を借り受け、かや田での水田体験、生き物観察を行なうようになった。

「かや田」は、池と土水路と田がほぼ同じ高さであり、少し増水すると、間をつなぐ「みと口」をフナ、ドジョウ、メダカなどの魚や生き物が行き来する。フナが稲の周りを泳いでいるのは、福井県でも中山の「かや田」ぐらいである。田んぼで稚魚が育ち、近くの池や川に魚が動いていく。



「カヤ田」(ハスプロ HP から)



中山の「かや田」 (ハスプロ HP から)

旧三方町は文部科学省から「環境教育実践モデル事業」の指定を受け、平成 15～16 年度にかけ、6 小学校が参加し、「みかた環境フェア 2004」を開催し、環境に関する学習成果を発表した(「湖浄協」メンバー、他の環境団体が協力)。その中でも気山小学校はかや田のある中山地区を校区とし、かや田における「田んぼと生き物の暮らし」「身近な自然観察から考えた私達の環境」を発表した。

ハスプロでは、この「かや田」を三方五湖と周辺の里地里山の自然との共生をイメージするミニモデル、後世に伝えたい原風景と位置づけ、無農薬稲作や「ふゆみず田んぼ」の保全活動を行ない、子ども達への環境教育の場としても利用している。

**ふゆみず田んぼ**：「冬期湛水水田」。田の刈り取り後冬期間は田に水を張る農法。ふゆみず田んぼには、ドジョウ、糸ミミズなどがおり、それを求めて水鳥がやってくる。水鳥がついばむことで抑草効果があり、鳥の糞は土を豊かにする。長年ふゆみず田んぼを続けていると、細かい土の層が深く出来上がり、草が生えない田んぼになる。

昨年は中山の「かや田」に小型魚道(水田魚道)を実験的に取り付けいつも魚が行き来できるようにし、要所に網をかけ、どんな魚がどれくらいいるか調べてみようという試みを行なった。稚魚の数も数えたりした。このように多くの人が生き物に興味を持つように色々な試みを実施し、人と自然、人と人が調和する地域づくりを目指していく。

## ネットワーク

「ハスプロジェクト推進協議会」は、自然環境保全に関わるネットワークの場としての役割を果たせないかと考えた。地域ではいろいろな団体がそれぞれの思いから、地域美化、ゴミ拾い、合成洗剤をなるべく使わない、子供達への啓発などの活動を展開している。こうした個々の活動をネットワークとしてつなげないかというのが、ハスプロの今後の大きな目標となっている。

三方五湖には川から水が流れ込む。川には、生活排水、田や梅畑に散布する農薬も入ってくる。湖や川、水辺の自然環境には、意識するしないにかかわらず多くの人が関係している。ハスプロは、環境を守る意識の薄い人や環境より開発を優先する人とも対立するのではなく、多くの地元住民に入会していただき柔軟な体制で、自然との共生の輪をどんどん広げていきたいと三浦さんは顔を輝かせた。

行政も個々の活動のネットワーク化に取り組み始め、住民も巻き込んだ取り組みも出てきている。

大事なことは、地元の人達に自然の大切さを良く理解してもらうことであり、理想は日常の生活の中で自然と共生してもらうことであるが、これがなかなか難しい。今年は三方五湖の恵みに焦点を定め、まず身近な食から入り、「食の文化祭」などを開催できたらと考えている。

ラムサール条約登録を契機に、行政主体の色々な委員会ができた。ハスプロも出席し、『三方五湖・湖(ウミ)と里(サト)のネットワーク再生ビジョン』をベースに色々提案している。

三浦さん自身は山間の育ちであるが、ハスプロの活動メンバーは山間部の人が少ない。今後は、三方五湖周辺だけでなく、流入河川の上流にも目を向けて活動の輪を広げていけたらと話をしめくられた。

14. ゆっくり楽しくをモットーに森づくり — 郷の森 里楽

さと もり りらく



上野 直之 氏

郷の森 里楽の活動フィールド

「郷の森 里楽」は、越前市西部の丘陵地域において、市民参加の森づくり実践活動を展開している。越前市生涯学習センターにおいて、「郷の森 里楽」会長、上野直之さんからお話をうかがった。

「郷の森 里楽」の活動フィールドのある白山地区(安養寺町)は、越前市西部地域に位置し西方の日本海からは車で15分。

この地域は海から隆起してできたみごとな「海岸段丘」の後背を南北に連ねている山陵(標高 500~600m)を分水嶺として、東方の内陸部に向かってゆるやかに高度を下げて傾斜しており、そこに丘陵・盆地が発達している。

通常、川は海に向かって流れるが、越前市西部地域では、吉野瀬川、天王川は海に向かわず内陸に向かい、日野川・九頭竜川に合流した後日本海に注いでいる。



〈郷の森 里楽の活動フィールド〉

- 西の山—元ブドウを栽培、今は笹が密生
- 中の山—沢筋にスギ、ヒノキの林、尾根に松が分布
- 水の谷—元田んぼ、ため池が点在  
溜池をベースとしたビオトープ  
アベサンショウウオが生息
- 東の山—落葉広葉樹の雑木林



郷の森 里楽の活動フィールド  
(「ふくいの里山の森林づくり」パンフレットから)

白山地区は、流紋岩類、花崗岩類からなり林地は痩せている。その赤土は粘土質でかつて瓦や土管として使われていた。盆地である白山地区は谷

が浅く、夏期の水不足対策として小規模の100を超える農業用の溜池がある。比較的水に恵まれた谷筋には杉、日当たりの良い尾根には松、その中間の地帯にはナラなどの雑木林が広がっている。

近年は、人の手が入らない放置林が増加し、徐々に竹林も拡大してきている。

白山地区には、絶滅危惧種のアベサンショウウオやハッチョウトンボ、ゲンゴロウなど多くの希少生物が生息している。また、サギソウやベニドウガンなどの珍しい植物も残っている。

昔は、里山は貴重な薪炭林であった。雑木は薪炭用に伐採して 20 年ほどたつと、また伐採でき、植林しなくても「萌芽更新」で山は十分維持できたものだと上野さんは話す。

しかし、石油燃料への転換により薪炭用に木を切らなくなり、コナラなど雑木の高齢化が進んでいる。人手が加わらないと、雑木林が藪化し、林床に日が射し込まず落下した種子が育たなくなる。その結果、日陰でも育つカシなどが生えてくる。また、根から広がる竹は暗い日陰の林でもどんどん広がっていく。一方、最近では、カシノナガキクイムシにより、ナラ類が枯れだしているがこれも気懸かりなことである。

里山の保全とは、何もしないで自然に任せるのではなく、人間が手を加えて初めて保全される。人の手を入れない自然保護は里山では当てはまらない——と上野さんは説明された。

### 上野さんと里山の森林づくり

福井県は、国、市町村と「ふくいのに里山の森林づくり」事業を進め、モデル地域として福井県内 7カ所を指定した。南越管内では旧武生市のボランティアを中心とする里山保全活動が採択された。

[越前市西部地域は、その後、国の「里地里山保全再生モデル事業地域」にも選定(全国 4 地域の 1 つ)]

平成 15 年当時安養寺町区長をした上野さんは、安養寺地区をベースとした森林づくりを市に提案。里山保全に取り組む活動グループが他にもあったが、新たな場所で幅広い市民参加での森づくり活動を提案した安養寺地区が活動フィールドとして採択された。

上野さんは、それ以前から、自分が生まれ育った安養寺の里山に人の手が入らず、荒れ放題になっていることを危惧していた。しかし、上野さんは福井県庁で林業行政に携わり、自身で里山や農地を所有していたため、県在職中は行政の助成を得て里山整備を行うことには限界を感じていた。

県庁退職後は、自由に遠慮せず故郷の里山復元に取り組むことができるようになったという。「ふくいのに里山の森林づくり」モデル地域指定への動きが上野さんの思いに火をつける結果となった。

上野さんは、市民参加の森林づくり活動に安養寺町住民をはじめできるだけ多くの市民が参加するように働きかけ、里山保全の研修会、地区ワークショップ、西部地域の地形・地質・植生の勉強会や現地調査等を行って、森林ボランティア「郷の森林 里楽」の会を立ち上げ頑張っている（「郷の森林 里楽」の一般公募により命名）。

### 郷の森 里楽の活動の概要

「郷の森 里楽」の概要は次の通りである。

#### 「郷の森 里楽」の概要

- 活動開始年度：平成 15 年度
- 会員数：56 名（平成 17 年度現在）  
会社員、自由業、市役所職員、安養寺地区住民、一般公募のボランティアなど様々な人が参加
- 活動フィールド：越前市安養寺町の「みどり自然の村」内の市有林約 14ha
- 主な活動内容  
平成 15 年度：設立準備—フィールド(里山林)設定、活動組織結成、年間活動計画策定

実践活動—里山の美化・清掃・ゴミ拾い実施、「樹名板」取り付け——など

平成 16 年度：セミハード整備—簡易トイレ、休憩小屋、アプローチ道路整備

下刈り機、チェーンソー、鎌、備品等の購入——など

実践活動—活動拠点広場、林内歩道整備、ビオトープ作り、自然体験実施、シイタケ植菌、  
技術研修——など

平成 17 年度：散策路等整備、ビオトープ作り、下刈り(下刈り機使用)、伐採(チェーンソー使用)

キノコ観察会、自然の中でのサイクリング、エコキャンプ

サギソウ王国サギソウ展等の他イベントに参加し、郷の森里楽の活動の PR——など



散策路作り



散策路(木道)作り

「郷の森 里楽」は、毎月第 1 日曜日を活動日に設定し、「いつまで」、「どこまで」とノルマをかけないで、ゆっくり、楽しくをモットーに活動し、現在は、毎回 15~20 人が活動に参加している。

活動に際しては、①機械を入れない、基本は手作業で(重機はいれない)、②自己責任で行動を、③(里山のゴミ等を)持ち込まない、(里山から自然の動植物等を)持ち出さない、④ゆっくりゆっくり無理なく作業——という「森づくりの掟」(ルール)を作り、活動を展開している。

森づくりには、下刈り機による下草刈り、チェーンソーによる伐採など危険を伴う作業が多く、専門家による講習会をしっかりと実施するとともに、「ゆっくり無理なく作業すること」、「基本的には安全は自己責任」と徹底している。

平成 18 年度以降は、西の山、中の山、東の山、水の谷、拠点広場の 5 つのエリア毎に実施計画を策定し、ゆっくりと確実に進むことを目指す。炭焼き体験、キノコ栽培、木工体験などを取り入れ、楽しみながら里山を守り復元していく方向である。

活動におけるもう一つの大きな要素は、学校の総合学習、環境教育への活用である。「里山は、学校の総合学習の教材として活用できるものの宝庫であり、自然や色々な動植物の生態観察を通じて、子供達が自分の目で見て考えることができる。自然探検、ビオトープ作り、ネイチャーゲーム(森の中の探し物)など子供達が喜んで参加できる工夫を重ねていきたい」——と上野さんは笑顔で語る。

昔は学校で管理する「学校林」が結構あったものだが、維持・管理が大変なため整理されたものが多い。郷の森里楽の活動拠点である里山を、「学校林」として使えるまでに自然を修復していくことが夢だと言う。子供に人気のあるクワガタやカブトムシの巣になればと期待して、落枝葉や折梢木を 1ヶ所に集積していると上野さんは笑う。



ネイチャーゲーム(森の中の探し物)



ビオトープ作り

### 「郷の森 里楽」の課題

上野さんに、「郷の森 里楽」の今後の課題や行政への要望についてお聞きした。

活動参加者には、全く山というものを知らないボランティアもいる。しかし、新しい自然保護活動や地域づくりはこれからと考えており、できるだけ多くの人々の参加を目指していく。一般の市民や女性も、山の活動に顔を出してもらっただけでも良いという感じで進めている。農林業関係者だけで活動を行うことはむしろ楽ですよと上野さんは言う。問題は若い人の会員が少なく出席も悪いことと上野さんは話す。

森づくりには危険な作業が多い。安全は最優先でありどう安全を確保していくかが、やはり大きな課題の一つである。

また、安養寺には「サギソウ王国」など地域づくり活動も活発であり、互いに顔見知りであり、安養寺地区に閉じこもっていれば活動はしやすい。しかし、他市の森林ボランティアグループと情報交換したり協力し、自然環境保全の輪を広げていくことも課題の一つと考えている。

最後に行政への要望として、「里山保全は、生態系の維持、故郷の景観維持、国土の保全や水源涵養にもつながっていく。里山は山と田、山と居住地の接点である。環境省、国土交通省、農林水産省はもう少し、縦割りの考え方をなくし横断的に対処してほしい」——と話を締めくくられた。

15. 『由良川をもっときれいにしよう』、『由良川でもっと遊ぼう』—NPO 由良川流域ネットワーク—



町井 <sup>かつまさ</sup> 且昌 副理事長

「NPO 由良川流域ネットワーク」副理事長 <sup>かつまさ</sup> 町井且昌さん

「NPO 由良川流域ネットワーク」（通称：ゆらねっと）は、由良川を昭和 30 年代初頭の清流に復元し、多くの人たちが親しみその恩恵を享受できる流域社会を目指して多方面にわたる活動を展開している。

8 月下旬、綾部市を訪問しホテル綾部において、「NPO 由良川流域ネットワーク」副理事長町井且昌<sup>かつまさ</sup>さんからお話をうかがった。

綾部市は、JR 京都駅から約 1 時間（人口は約 37 千人強）。古くは九鬼氏 2 万石の城下町であり、市の中心部を由良川がゆったりと流れている。豊かな水と緑、星空の美しい街として知られ、市内高台にある「天文館パオ」は公開天文台としては日本最大級の反射望遠鏡が設置され美しい星空を堪能できる。

町井さんが経営されるホテル綾部は由良川を望む丘陵にある。当日は、ホテル綾部で 1 泊させていただいたが、特にホテルからの夕焼けの景観が素晴らしかった。夕日がゆるやかに流れる由良川に映り、周りの山々やうろこ雲が桃色に輝く様は、これまで経験したことのない鮮やかなものであった。

町井さんは、JR 東日本の役員として、ホテル、不動産関係、駅ビル、ショッピングビルなど主として鉄道以外の関連事業に従事された後、綾部市に戻りホテル綾部を経営。

10 年ほど前、倒産したホテルの継承を綾部市長などからは是非と依頼され、市民が気楽に集まれるホテルが必要であり、やり方を変えれば経営は成り立つと判断し引き受けたという。



（由良川沿いに発展した綾部市：「わたしたちの由良川」から）

## 由良川流域ネットワーク(通称：ゆらねっと)立ち上げ

ホテル経営を始め綾部市で生活するようになると、昔の仲間連中でよく集まるようになった。画家の原田さんのアトリエで酒を飲んでいたら、昔はよく由良川で遊んだものだという話になり、その話から、“由良川を昭和30年代の昔のようにもっときれいにしよう”そして、“由良川でもっと遊ぼう”という真面目な話となり、仲間たちの「ゆらねっと」の取り組みが始まった。

町井さん自身は、それまで特に自然や環境に係わってきたわけではなかった。15年前に帰ってみると、由良川が昔と比べすごく汚くなっていたと感じた。子どもの頃は、すぐそこに由良川が流れており、遊び場だった。綾部に帰ってみて、その由良川がこんなに汚い川になってしまったという思いが強かったのだと当時を振り返る。

『由良川をもっときれいにしよう』、『由良川でもっと遊ぼう』という思いは、この時から始まり現在まで「ゆらねっと」の活動の目的として変わっていない。

### 由良川（「わたしたちの由良川」から）

由良川は、京都府の中・北部を流れ日本海に注ぐ一級河川。その流域面積は京都府の約40%を占め、長さは146km。

由良川本流は、上流から美山町、和知町、綾部市、福知山市、大江町、舞鶴市、宮津市を流れているが、他の町を流れている支流も由良川本流に合流し、豊かな流れを作っている。



平成11年11月、「由良川懇談会」を立ち上げ取り組みを開始し、平成12年1月には、NPOとしての認証を取得した。

「ゆらねっと」会員は全て個人会員(年会費2千円)。立ち上げ時、“こんなことをやりたいが会員にならないか”——と、仲間が友人・知人に誘った会員がベースとなっている。マスコミで取り上げられ、それをみて会員となった人もいる。

由良川流域の7市町から会員が集まったが、146kmの由良川で源流に近い山間部から活動に参加するのは大変であり、綾部市、福知山市、舞鶴市の会員が多く、活動の中心となっている。

サラリーマン、京都府職員、仕事をリタイアしてぶらぶらしている人など、色々な人が会員として参加している。中には、魚釣りの名人もいる。若い現職の人に比べ、リタイアした人の方が、自由に活動できる時間もあるし、リタイア後は、少しは世の中のために活動したいという人が多い。後継者作りのため、若い人を無理して集めたことはないという。

一時、40人～50人に会員数が増加したが、現在の会員数は概ね30名である。会員数があまり増えると、通知などの事務処理が大変であり、会員増加にはあまり積極的に取り組んでいないという。

### 「ゆらねっと」の活動の軌跡

「ゆらねっと」は、『由良川をもっときれいにしよう』、『由良川でもっと遊ぼう』という目的のため、①由良川の環境と水質を改善する事業、②由良川に対する理解を深めるためのシンポジウム等の開催、③由良川に親しみ、楽しむための事業、④由良川流域の各種調査・研究——の各事業に取り組んでいる。

「ゆらねっと」立ち上げからの主な活動は以下の通りである。

6市町で開催したリレーシンポジウムは、最初何をしたらよいかよくわからず、リレーシンポジウムから始めたという面が強いと町井さんは笑う。四万十川の保全について高知県の方にお話をいただいたり、アユ釣り名人、千葉県の上野三番瀬埋め立ての反対運動の方にお話をいただいたり、リレーシンポジウムは、後からみるとバラシティに富んだものとなった。

その後は、一般市民・小学生にも参加を呼びかけ由良川上流の探索を行ったり、京都府が作った簡単な装置で水の透明度を測ったり、川底が見えるボートで鮎が食べる珪藻を観察し削った珪藻を顕微鏡で観察したり——と年にいくつかの事業を色々工夫しながら実施している。

どの事業もポイントは、「由良川をもっときれいにしよう」、「由良川でもっと遊ぼう」という目的に沿ったものである。

### 「ゆらねっと」の主な活動の軌跡

平成 10 年	「由良川を語る会」立ち上げ
平成 11 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 第 1 回～ 5 回「ゆらねっと懇談会」開催</li> <li>・ 第 1 回～ 6 回リレーシンポジウム開催(美山、和知、綾部、福知山、舞鶴、宮津)</li> <li>・ フォーラム「川との対話 由良川 '99」開催(綾部市)</li> </ul>
平成 12 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 京都府より NPO の認証を受ける</li> <li>・ 第 7 回～ 8 回リレーシンポジウム開催(綾部、大江)</li> <li>・ 「由良川探鳥会」「由良川流域交流会(由良川源流・芦生の森を歩く)」「水辺の動植物観察教室」「水辺の夢コンサート」「水辺の風景コンクール」展示会——等を実施</li> </ul>
平成 13 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 由良川サケ稚魚放流イベントに参加</li> <li>・ 国土交通省「メダカの学校」にメダカ放流</li> <li>・ メダカの国勢調査実施</li> <li>・ 小学生向け資料集「わたしたちの由良川」発刊</li> </ul>
平成 14 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「サケのふるさと由良川を守る会」のサケ放流事業に参加</li> </ul>
平成 15 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ メダカの国勢調査実施</li> <li>・ 「サケのふるさと由良川を守る会」のサケ放流事業に参加</li> <li>・ シンポジウム「28 水害から 50 年」開催(綾部市)</li> <li>・ &lt;水の記憶の碑&gt;公園造成・オープン</li> <li>・ 第 1 回～ 3 回由良川リバーウォーク開催(府民水辺環境ネット事業—京都府と共催)</li> </ul>
平成 16 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 府民水辺環境ネット事業として「由良川上下流交流会」開催</li> <li>・ 「上林川を美しくする会」のワーキングデー作業に参加</li> </ul>
平成 17 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 府民水辺環境ネット事業—「探検丸で川底を見る」</li> </ul>
平成 18 年	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 由良川河川水辺国勢調査に参加</li> </ul>

「ゆらねっと」の事業は、毎年7月に開催される総会で検討される。皆で、あれが良い、こういうものはどうだという意見を出し合い、「ゆらねっと」の出来る範囲のもので決めていく。毎年色々なことを検討するが、実際にやれるのは1つか2つであり、これをやろうとして決めてもできない年もある。

年会費2千円、30人程度の会員数では収入が限られており、通常の年間予算額は20～30万円程度である。補助金等をもらい事業を行った年もあるが、会員数が少ないため、たんさんお金を出すと言われても、人的な制約から大きな事業は無理である。小学生向け副読本「わたしたちの由良川」を作成し、流域の小学生3000人に配布した時は、多くの方の協力を得たという。



由良川源流－芦生の森探索



川の透明度測定



探検丸で川底を観察



珪藻を顕微鏡で見る

各催しの参加人数は、だいたい20人～30人ぐらいである。綾部、福知山の地元新聞にも事前に紹介してもらい参加を呼びかけている。学校単位で行事に参加するケースも出てきている。

「メダカの国勢調査」は2カ年にわたり実施した。学校により取り組みに違いがあり、関心の薄い学校もあるが、メダカの国勢調査を通じ、少しでも多くの小学生に自然環境に関心を持ってほしいという思いが強い。色々なものが川に捨てられ、下流はそれが集まって汚れがひどくなっているという実態を子供達自身の目で実際に見てほしい。それを見た子供達の心にどう入っていくかが楽しみである。

今年度は、9月から10月にかけて、由良川沿いの福知山の明智藪の調査を実施した。明智光秀が作ったといわれる川岸の林で、現在は人が入れない状況にある。会員でない専門家に来ていただき捕獲した昆虫を見ながらお話を聞いた。

## 行政への要望事項

行政への要望事項をお聞きした。

京都府や市は、自然環境の保全再生についてよく勉強し、随分工夫しておもしろい企画を数多く打ち出していると感じている。京都府の緑の公共事業も斬新な発想のものが多い。

しかし、行政は、綾部市だけ、福知山市だけという考えをなくさないといけない。

由良川カヌー大会は綾部市だけのカヌー大会であり、隣の福知山市は、福知山市だけでマラソン大会を開催している。いまだに行政単位で動いているが、現在はそういう時代ではなく、市や町、県という境を超えた活動が必要であると思う。

「ゆらねっと」は、市や町は問わず会員が集まり、境目を越えて活動を展開している。そうすると、新しいものの見方が生まれてくる。

よその市や町の人と、自然に知り合いになれる企画や集いが必要であり、そういう楽しみ、そういう拡がりが必要であると思う。

## 終わりに

町井さんは、「ゆらねっと」の活動を始めてあまり苦勞したことはなく、「ゆらねっと」を通じて、由良川とつきあいだしてから、ものを見る目が変わったと言う。

最近、山の自然環境の保全・再生にも関心が強まり、「里山ネット綾部」も立ち上げた。

綾部市は古い建物が残っていることでは全国有数の町であり、そうした古い町屋を利用したレストランや小劇場を作る人も現れ、住む人にとっても良いことだと思っている。

綾部市にはテーマパークもない。個人的には、「観光客で騒がしい町より、静かな町であり続けてほしい」、「住む人にとって魅力的であれば、自然と他から綾部市を訪れる人も増えてくる」、「観光客増加のため街並みを整備するのではなく、住む人にとって魅力のある良い町を目指すことが大切だ」——と思う。

住んでいる人の生きる態度、生活が町に現れてくる。多くの人が、豊かな自然の中にながら、自然の楽しさを忘れている。「ゆらねっと」の活動に参加することで、もっと川で遊んでもらい、自然や水、町をみる見方が変わるきっかけになれば——と、話を締めくくられた。

## 16. 得意分野を活かしてネットワーク化

## —NPO 里山ネットワーク—世屋



飯尾 毅 理事長  
(活動拠点「ぶーたん」にて)

### NPO「里山ネットワーク世屋」の活動フィールド世屋地区

NPO「里山ネットワーク世屋」は、宮津市世屋地区の里山や風景の魅力を伝承・創造するとともに、里山利用や管理作業を行い、世屋の活性化につなげていくことを目的とし活動を展開している。

NPO「里山ネットワーク世屋」理事長飯尾毅さんに宮津駅まで出迎えていただき、車で里山ネットワーク世屋の活動フィールド、世屋地区を案内していただいた。

日本三景「天橋立」で知られる宮津市は人口約 21,000 人の地方都市。宮津駅から海ぞいの国道を 30 分、山に入り車がやっとすれ違える道を約 10 分走ると「里山ネットワーク世屋」の拠点“ぶーたん”のある上世屋地区に到着した。

上世屋地区は、昔 60 あった世帯数が約 10 世帯に減少し、10 世帯の内、50 才半ばの夫婦世帯が一番若く、80 才を過ぎた世帯もあるなど高齢化が進んでいる。廃校となった学校跡には二宮金治郎の像がたっていた。「里山ネットワーク世屋」が地域の人と協力して、ぼうぼうに草が生えた跡地の草刈りをし、地域の広場に再生し、地域の人に大変喜ばれたというお話もお聞きした。

上世屋の棚田や畑の周りは、猪や狸から守るため、電気柵が廻らせてある。その周りの草刈りをしないと、漏れし電気柵の効果がなく大変という。

里山ネットワーク世屋の活動拠点“ぶーたん”は、民家を借り受けたものであり、活動拠点として利用できるよう手を入れるのに大変苦勞したという。将来的には、当地区に伝わるササ葺きの屋根にしたいと考えていると飯尾さんは案内されながら話された。



世屋地区 「里山ネットワーク世屋」HP から

## NPO「里山ネットワーク世屋」結成

平成15年の夏、深町さんと橋本さんが、世屋地区の棚田、美しい景観、文化を守るため、NPOを作り活動をできないかと飯尾醸造社長の飯尾さんに相談にみえたのが、「里山ネットワーク世屋」結成の発端である。

深町さんは、10数年来、世屋地区で里地里山の研究活動を続けている「森林総合研究所」関西支所(京都市)の主任研究員。橋本さんは、約10年前、世屋の木子地区に大阪から移り住み、「遊農塾」を立ち上げ都市に住む人に米や野菜づくりを教えている。

深町さん、橋本さん、2人の思いに賛同した飯尾さんが中心となり、世屋の里山を愛する個人、団体に呼びかけ、「里山ネットワーク世屋」を立ち上げ、平成16年4月には京都府からNPOとして認証を受けた。

### (株)飯尾醸造と世屋地区の関わり

(株)飯尾醸造は、創業明治26年、4代続く酢の醸造元である。昭和39年から農薬を一切使わない米での酢作りを目指し、昭和53年からは、世屋地区農家に、農薬を一切使わない米生産を委託している。平地では近隣の田で農薬を使用するため、自分の田だけ農薬を使用しなくても意味がない。

現在、世屋地区で生産委託している農家は7軒。以前は世屋地区で3千俵作っていたものが現在は300俵を切る状態だという。このため農家への生産委託に加え、棚田維持のため、飯尾醸造社員による米作りも行っている。通常は、社員2名で約8反の田(棚田枚数で37~38枚)で農作業を行っている。1500枚の棚田があったが、ほ場整備が進み150枚の棚田になった。世屋の松尾地区では再生紙黒マルチ農法で米作りが行われている。

農作業は田植え、稲刈り、田の除草が主であり、除草剤を全く使わないので草取りが大変。棚田の斜面部分も田にまけない面積がありその草刈りにも手間がかかる。4日間かかる酢の瓶詰作業を工夫して3日に短縮し、社員8人が1日は農作業もできるようにしたという。本社から世屋地区まで来るのに車で45分ぐらいかかるのも悩みの種の一つ。

飯尾醸造は、少しでも楽に無農薬米を作ってもらうため、新しい農法を研究し試した上で、世屋地区の農家に導入を進めている。

#### <新しく取り入れた農法の例>

**再生紙マルチ農法**：田植え機が再生紙を敷きながら稲を植えていくという農法。再生紙は50~60日で自然に溶け、刈り取った稲ワラを田んぼに全部入れるのと同じくらいの肥料効果もある。

**再生紙黒マルチ農法**：再生紙は色が薄いため土壌の温度が上がりやすく、稲の初期成育が悪いという欠点があった。再生紙黒マルチ農法は、黒い紙を利用するため日光がよく集まり、稲の生長を促進。海拔400メートルもある棚田でも生育は順調。

**液体マルチ農法**：ヤシガラ活性炭とデンプンでできた真っ黒な液体を田んぼに撒いて日光を遮り、雑草の生長を抑制するという農法。どんな小さな曲がりくねった棚田でも行える利点がある。黒い色が一週間しか持続しないため、稲が十分な大きさに育つまで3回は撒く必要がある。



棚田



## 「里山ネットワーク世屋」の会員と活動の特徴—会員の得意分野を活かしたネットワーク化—

「里山ネットワーク世屋」会員として参加したのは、飯尾さん、深町さん、橋本さん(世屋地区で都会の人に米作り・野菜作りを教える「遊農塾」主催)、(株)飯尾醸造の他、地元農家2名、上世屋に伝わる「藤織り保存会」、地元材を利用した住宅設計士、世屋地区出身者からなる「世屋ふるさと協議会」、自給自足の生活を目指すペンション経営者、世屋の里山研究者(ササ葺き技術の継承等)——など19名。それぞれの思いから、世屋の里山を愛し関わりを深めている人達であった。

「里山ネットワーク世屋」は、

- 参加会員がそれまでも、「棚田での無農薬米栽培」「藤織り研究」「里山の自然の中の豊かな生活実践」「ササ葺き屋根研究」「地元材利用住宅」など、それぞれのフィールドで独自の活動を行っていた
  - 各会員の得意分野を尊重し活かしながらそれぞれの活動をネットワーク化し、互いに力を合わせて、世屋の魅力継承・創造と、地域活性化を目指す
- ことが活動の大きな特徴である。

飯尾さんは、『皆の力を合わせて』が「里山ネットワーク世屋」のキーワードであり、皆で力を合わせ、さらに世屋の住民を巻き込んで活動をしていかなければ、豊かな世屋の里山を守っていけない状況にある——と話された。

「里山ネットワーク世屋」は、年度始めに月別事業計画を策定する。年間計画検討時に、それぞれの得意分野に応じて各行事の企画者・世話役を決め、他の会員の協力を得ながら活動を進めていく。世話役は、行事が終われば報告書を作成し、その概要をホームページで発信するのがパターンである。

## 「里山ネットワーク世屋」活動スタート

「里山ネットワーク世屋」は①世屋の拠点施設“ぶーたん”の運営、②衣・食・住を通じた里山管理、③環境教育やレクリエーションの場としての里山利用、④里山に関する情報発信——を柱として定め、活動を展開している。

平成16～17年度の「里山ネットワーク世屋」の主な活動実績は、次頁の通りである(従来から行ってきた会員の独自活動以外)。

NPOとして立ち上げ後間もない平成16年度は、活動拠点“ぶーたん”の整備と、「里山ネットワーク世屋」の活動内容を宮津の多くの人たちに知ってもらうための「里山シンポジウム」開催がメインの活動となった。



活動拠点ぶーたんの整備作業風景



「里山ネットワーク世屋」HPから

活動拠点として休校中の学校の借入れを申し込んだが実現しなかった。教育委員会からは「釘1本打ってはいけない」と考えられないようなことを言われ本当にびっくりしたという。結局、地域の空屋となっていた民家の借入れがまとまり、活動の拠点が定まった。借り受けた民家はかなり荒れており、活動拠点として使えるまでに整備することは大変な作業が必要であった。

活動拠点整備には、百万円単位の資金が必要であった。幸い、環境保全・植樹活動を助成するセブン・イレブン「緑の基金」から、3年間、毎年500千円の助成が決まり、チェーンソー、鋸、草刈り機などを購入することができた。世屋地区は集落の景観、棚田等全国でも優れた里山と高く評価されたという。また、飯尾醸造が、社員の農作業の休憩場所として使うことを条件に500千円寄付するなど、会員数が少なく会費収入が限られている中で、特に初年度は拠点整備に大変であったが、なんとか乗り切ったと振り返る。

また、平成16年11月には、里山ネットワーク世屋の活動を宮津の多くの人達に知ってもらうため、公開シンポジウム「丹後の里山ー自然と暮らし」を開催。現地体験講座、公開シンポジウム、公開講座の三部構成で、約100人の参加を得た。

#### 「里山ネットワーク世屋」の主な活動

平成16年度	
5月	借り受けが決まった上世屋拠点施設の大掃除 NPO「丹後の自然を守る会」主催の田植え教室(上世屋)に協賛で参加
6月	上世屋拠点施設の大掃除 NPO認定後初の総会開催
8月	宮津満喫ウォーク(世屋公民館)主催に参加 第1回里山案内人講座「樹木の名前を知ろう」開催
9月	里山案内人講座「世屋の民家探訪」開催
11月	「里山シンポジウム」開催 現地体験講座、公開シンポジウム(みやず歴史の館)、公開講座(世屋地区公民館)
12月	上世屋拠点施設「ぶーたん」の雪囲い
2月	人と動物①ー地域文化に学ぶー開催
3月	飯尾醸造の見学と総会
平成17年度	
4月	春のブナ林散策
5月	世屋の農作業体験(飯尾醸造の棚田で田植え) 春の味覚を楽しむ(食べられる野草を摘みながら散策) 京都オムロン地域協力基金「ヒューマンかざぐるま賞」受賞
6月	ダケのふもと再生ワークショップ(4班に分かれて野山を散策・観察)
7月	動物による被害を防ぐー現場での対策法ー
10月	飯尾醸造の見学と里山案内人講座「世屋の水環境を学ぼう」開催
11月	「台風23号1年後のブナ林を見る」開催
12月	上世屋拠点施設「ぶーたん」の雪囲い
2月	「ばい投げ」の体験

注：「ばい投げ」

「里山ネットワーク世屋」HP から

空中にもものを投げて、ノウサギを威嚇し、あわてて穴に逃げ込んだノウサギを手づかみで捕らえる猟法。かつて丹後地方の山間部で、「バイナゲ」あるいは「バイドリ」と呼ばれて行われていた。

ノウサギに気づかれないよう近づいて、バイ（二股の松の枝をくくりつけた束）を空中に続けて投げ、天敵のタカやトンビが襲いかかってきたかと思わせる。驚いて隠れ穴に逃げ込んだノウサギを間髪いれず捉える。

### 「里山ネットワーク世屋」と地域住民

飯尾さんは、「会員数は少ないが、皆で力をあわせかなりの活動をこなせた」「世屋の里地・里山の荒廃を、自分たちの活動によって多少はくい止めたと感じている」とその活動の跡を振り返る。

世屋地区の住民の反応を尋ねると、『我関せず』という人が多いという。多い年は2～3mも雪が積もり通勤できないため、子供は町にでてしまった高齢者のみの世帯がほとんどであり、『世屋での生活は自分の代で終わり』と考えている人が多い。また、地元の人達の考え方と調整し、活動を行うことがかなり難しいケースも出てくる。例えば、「景観を良くするため壊れかけた建物は撤去した方が良いと提案してもなかなか同意が得られない」、「川の源流にあまり知られていない立派な滝があるが、途中で天然のワサビ田があり、余所の人を入れたがらない」などということが実際には出てくる——と地域への活動浸透の難しさを話された。

会員になった住民は、自分が住む世屋をもっと良くしたいという人であり、50才代の方が参加している。また、自分もこんなことをやっている、是非仲間に入れてほしいという人も徐々に出てきていると飯尾さんは明るい。

会員数増加には、特に積極的に取り組んでいない。その人に興味がなければ、会員になっても参加しないと考えている。活動を通じてできるだけ多くの人に世屋に来てもらい、宮津にこんな良い所があることを知ってもらい、その中から、会員になってもらう方向を目指している。

### 終わりに

平成16年6月、「里山ネットワーク世屋」は、読売新聞、環境省が共催する「日本の里地里山30—保全活動コンテスト—」で、161団体の中から選定され、さらに世屋地区は環境省の「里地里山保全再生モデル地域」（全国4地域）の一つとして指定された。また平成17年5月には、京都オムロン地域協力基金「ヒューマンかざぐるま賞」を受賞するなど、世屋の里山の素晴らしさが世の中に知られてきた。

行政には、世屋地区を国立公園に指定し自然や景観の保全を図っていこうという動きもみられるという。しかし、そうなれば、住民の生活や住宅にも色々制限が加わりまた違った課題が出てくる。

飯尾さんは、「自分たちのできる範囲でやっぺいこう」という活動の基本は変わらない。まだまだ、自分たちの活動だけで精一杯で、他地区との交流拡大までには至っていない。専従の事務局があれば、色々なことを企画・実行できるかもしれないが、交流拡大までは至っていない——と話す。

世屋地区は昼夜の気温差が大きく、米のうまさは魚沼産コシヒカリに劣らない。「荒れている田をもう一度おいしい米の作れる棚田に復元したい」、「壊れかけた家屋は整理し集落の景観をさらに良くしたい」、そして、「豊かな自然に恵まれた世屋地区に住む人を一人でも増加させ地域を活性化したい」と話をしめくくられた。



ンキャンパスのセミナーハウスは標高 550m の地点にあり、キャンパスには、ブナ林やビオトープ、アベサンショウウオ観察場、キャンプ場も整備されている。大学の自然環境関連の講座の一環として、1 講座約 40 人前後の女子学生が 2 組に別れ、1 回 1 泊 2 日～2 泊 3 日のコースで、自然学習・自然観察の実習を行っている。実習指導は 1 人 20 人が限度であり、所長(前田常雄助教授)と盛谷先生が 2 人で指導を行っている。

四季を通して継続的に自然観察させることを目標に春、夏、秋、冬それぞれの季節に実習を実施し、今年は 2m を超える大雪の中でカンジキハイキングも実施したという。



とち餅づくり



雪中キャンプ

### 南但馬の自然を考える会

盛谷さんが、「南但馬の自然を考える会」に入って 10 年近くになる。

南但馬は人口減少による過疎化、高齢化が進展しており、「自然を守る」というだけでは、南但馬の自然環境の問題は解決できない。そういう認識から、「守る」ではなく「考える」としていると、「南但馬の自然を考える会」の名の意味を説明された。

但馬とは中国山脈の分水嶺の北向きの幅広い地域をいうが、氷ノ山<sup>ひょうのせん</sup>を中心とした山岳・山麓地帯が「南但馬の自然を考える会」の主たる活動フィールドである。

会員数は現在 45 名前後で推移している。高校の生物の先生、市などの行政関係者の他、学習塾経営、工場勤務のサラリーマン、主婦など様々な人が会員として参加している。会の代表は園田学園女子大学の前田助教授(大岡山グリーンキャンパス所長)である。

「南但馬の自然を考える会」の目的と活動は以下の通りである(「南但馬の自然を考える会」会則から)。

#### <目的>

- ①南但馬地域の生物観察を通して、この地域の自然の理解を深める
- ②南但馬の自然環境に興味・関心を持って活動する
- ③南但馬地域での自然環境や貴重・希少な生物種の保全保護に寄与する
- ④南但馬の動植物についての調査・研究を深め、当地域の資料の集積に努める
- ⑤上記の活動を通じて会員相互の連携と親睦をはかる

#### <活動>

- ①本会は、年 1 回の定期総会と研究交流会を行う
- ②会は調査・観察・記録及び環境の保全保護活動などを年間計画に基づき実施する
- ③会は年間数回、会報「南たじまの自然」「月例観察会報」を発行する
- ④他団体から、本会の目的に該当するような協力要請があれば、会の目的に適う範囲で協力する

### 荒廃が進む氷ノ山とその周辺の貴重な植物群落

「南但馬の自然を考える会」は、南但馬地域を中心に、月1回、定例自然観察会を実施。氷ノ山で行事を行うのは年3回程度で、他地域の自然観察会も積極的に行き南但馬地域との比較を行ってきた。

氷ノ山やその周辺の自然破壊、荒廃が進んでいるため、最近の会の活動は、貴重植物群落の保護・保全活動が中心となり、自然環境への理解促進といった啓発活動まではなかなか手が回らない状況となっている。それほど、氷ノ山の自然破壊、荒廃が進んでおり、「穴のあいた所を手でふさぐ」という緊急性の高い活動が必要な状態となっている。

氷ノ山は標高1510mと兵庫県では最も高い山。

その頂上付近には、高原性湿原「古生沼」やその下方の、アシュウスギと呼ばれる日本海側のスギ(うらすぎ)の群落「古千本湿原」が広がり、それぞれ県の天然記念物に指定されている(太平洋側の杉を「表杉」)。ここはヤチスギやツマトリソウ、エゾリンドウなどの亜高山性植物が観察できる西日本唯一の場所となっている。

「古生沼」は、地球温暖化の影響による積雪量の減少、登山客の増加による山頂部の裸地化、トイレ工事・登山道工事など種々の原因で湿原の乾燥化が進んできている。



ミツガシワ湿地の侵入植物抜き取り作業

このため、「古生沼」に侵入してきた灌木の抜き取りなどの保全作業を定期的に続けているが、「古生沼」までの行き来に時間がかかり、思うほど作業が進まないのも悩みの種である。

同じ氷ノ山山系の鉢伏高原にも湿地が点在し、そのうちヤマドリゼンマイ群落とミツガシワ湿地は県の天然記念物に指定されている。ここもスキー場開発によって水不足となり、危機的状況である。このうちミツガシワ湿地は10年ほど前から観察のための木道設置や、侵入雑草の抜き取りなどを続けた結果、植生がかなり回復してきた。しかし水不足の問題は未解決のままである。

さらに深刻なのは、鹿による被害である。現在、南但馬地域で、鹿がものすごい勢いで増えている。

「大雪が少なく、冬期に鹿が死ななくなった」、「過去の植林によって一時的に食草が増加した時期があった」(森では植林により木が小さい間は草が増加し、木が成長すると草が減少する)——などが鹿増加の原因として考えられる。

南但馬の里山は鹿が草を食べつくし、下草が生えていない状態にある。鹿は、低地の草を食べ尽くし、氷ノ山の高地に草を求めて上がってきている。

鹿は低地から高地へ、南但から北但へと生息域を広げており「地域の植生が基本的に破壊されてしまう大きな問題」と盛谷さんは、声を強められた。大岡山キャンパスのある神鍋山周辺は北但で雪が多く、本来鹿の生息域ではなかったはずだが、今年学生を連れて周辺の森や谷を回ると、鹿の足跡や食痕が目につき、林の中は草が少なく見通しが良くなっていることに気づく。鹿の数の急激な増加と、中腹の森林に人の手が入らず草が少なくなっている。これだけ鹿の数が増えてしまうと、少々の草では全く追いつかない状態といえる。



鹿の防護ネット張り

7月に京都府美山町にある京都大学芦生研究林に行ったが、ここでもブナ林の林床には全く草がなく丸裸の状況で、残っているのは有毒のトリカブトやフタリシズカ、ウリハダカエデぐらいであった。

「古生沼」の湿原は、鹿に踏み荒らされ、ヤチスゲ、ツマトリソウ、エゾリンドウは食べ尽くされてしまう。氷ノ山の高原性湿原の自然は、今、非常に危うい状況にある。

「南但馬の自然を考える会」は、兵庫森林管理署の許可と協力を得て、「古生沼」の周りに鹿の侵入防止の網を張っている。一昨年は「古生沼」周辺、昨年は「古千本」周辺の湿原にピアノ線入りの防護ネットを張り、鹿の被害を食い止めるのにかなりの効果を生みだしている。

### 南但馬の自然を考える会の最近の主な活動

平成 13 年度
<p>①地域の自然環境を保全保護する活動 氷ノ山「古生沼」湿原保護作業、ハチ高原のミツガシワ群落保護保全作業、朝来町のカタクリ移植と管理作業、東床尾山のヤマシャクナゲの調査</p> <p>②月例観察会、学習会実施 月例観察会、学習会を 8 回実施、特別観察会(白神山地自然保護研修)</p> <p>③自然観察会実施 妙見山自然観察会、氷ノ山サミットでのみどりの少年団対象観察会、上原高原フェスティバル参加者対象観察会</p> <p>④その他—他団体との連携による活動、氷ノ山山頂トイレ・ヘリポート問題への対応</p>
平成 14 年度
<p>①南但馬地域の貴重な植物群落を保全保護する活動 古生沼、古千本湿原、ハチ高原ミツガシワ群落、朝来町のカタクリ移植状況調査、鶴縄のリュウキンカ・尾崎のエンコウソウ自生地観察と保全作業、今滝寺のカゴノキ林調査、妙見山のアシウスギ林と落葉広葉樹林調査</p> <p>②月例観察会、学習会実施 月例観察会、学習会を 8 回実施</p> <p>③小中学生を対象とした自然観察会・自然環境学習の実施 関宮町「氷ノ山案内人養成講座」、八鹿町「妙見山ブナの森づくり」、和田山町「山の教室」の取り組み</p> <p>④その他 他団体の観察会への指導者派遣、他団体との連携による活動</p>
平成 15 年度
<p>①氷ノ山自然の森づくり 氷ノ山鶴縄地区での落葉広葉樹の植栽、周辺登山ルートへの啓発標識設置</p> <p>②妙見山自然の森づくり 八鹿町有林での不良杉間伐とブナ・カエデの植栽、自然観察会実施、啓発標識設置</p> <p>③月例観察会、学習会実施、自然観察会実施、他団体の観察会への指導者派遣、他団体との連携による活動</p>
平成 16 年度
<p>①南但馬地域の貴重な植物群落を保全保護する活動 朝来町のカタクリの移植状況調査、鶴縄のリュウキンカ自生地の保全活動、ハチ高原のミツガシワ群落保全活動、古生沼、古千本湿原の保全活動</p> <p>②氷ノ山自然の森づくりのブナ植栽地の管理</p> <p>③南但馬地域の貴重な植物群落の調査</p> <p>④地域の自然観察会・環境学習に協力</p>

## ⑤氷ノ山周辺地域保全・再生活動実施計画検討会への参画

### 行政への要望

行政への要望事項をお聞きした。

自然を利用した観光開発についても、自然保護の観点から適正な利用の在り方を根本的に考えていかないと、後から取り返しのつかないことになる。

但馬地域に「氷ノ山自然地域保全検討会」が立ち上がり3年になるが、地域や観光業界の代表からは、利用・活用の話がまず出てくる。観光業界や民宿業界は、夏の観光として氷ノ山登山を組み込みたいと考えているが、大勢の登山客を受け入れるとなれば、登山道を拓けるといふ話になるし、自然環境への影響も大きい。「豊かな自然を利活用するためには、自然を保護し保全することを十分検討した上で、利活用策を考えねばならないと思う。自然環境が保全され継承される範囲内での利活用にとどめないと、貴重な自然の荒廃が進んでしまう。」——と盛谷さんは強調された。

兵庫県は環境政策局を中心に一所懸命やっただけに思っているが、自然環境の保全と、観光振興・地域開発のどちらも立てねばならない立場からの政策なのか、中途半端なものになっていると思う。

自然の状況を、将来に向けて、緻密にシミュレーションし検討し対策を立てていかないと、自然の荒廃がますます進んでしまうと懸念している。

兵庫県ではコウノトリは自然保護の象徴となっているが、これはコウノトリが自然の中で生息できなくなった結果である。コウノトリが自然の中で生息できる状況をいかに守っていくかという考え方・視点が重要である。自然環境は何もしないでは守れないと考えている。



注意看板設置



氷ノ山自然の森づくり

### 終わりに

盛谷さんの活動は、自然保護活動の指導と実践が半々である。氷ノ山山系の保護・保全活動の他に、八鹿公民館と連携し妙見山(1139m)を中心に、年4～5回の親子づれ森の観察会、ブナの森づくり活動を行っている。ブナの森づくりではこれまで苗づくりが中心であったが、今年からはブナの植樹も行いたいと意気盛んである。

但馬では「但馬の自然を考える連絡会」を立ち上げ、様々な自然保護・自然研究のグループが参加し、意見交換、情報交換を行い協力しあっている。皆の力を合わせ、もっと大勢の人が気楽に自然保全活動に参加できるよう、地域に指導・企画できる若いメンバーを充実していかないといけないと考えている。

多くの人の日々の実践を通じて、但馬の豊かな自然が、守られ継承されていくことを期待したい。

18. 自然環境保全と地域活性化の両立を目指して NPO法人上山高原エコミュージアム



こはた  
小畑和之 代表理事（右）  
西川敏雄 理事・事務局長（左）  
（「上山高原ふるさと館」にて）

NPO法人上山高原エコミュージアムの活動拠点「上山高原ふるさと館」

「上山高原エコミュージアム」は、上山高原の豊かな自然や麓の集落などをまるごと「生きた博物館」としてとらえ、地域共有の財産として守り・育むとともに、自然と共生した暮らしを学び、実践する場づくりを地域住民をはじめ多くの方々の参画を得て進めているNPO法人である。

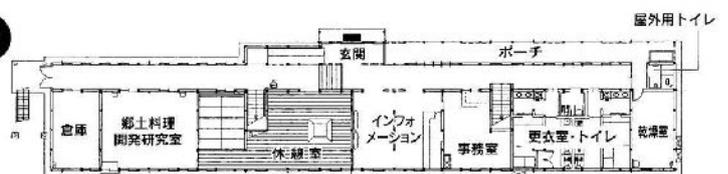
新温泉町 JR 浜坂駅まで出迎えていただき、この7月29日オープンして間もない「上山高原ふるさと館」において、代表理事小畑和之さんからお話をうかがった。

新温泉町は、平成17年10月、海沿いの町「浜坂町」と山間部の町「温泉町」が合併した人口約18千人の町。町の総面積は241k㎡で林野面積が84%、自然公園指定地域が46%を占める。上山高原のある旧「温泉町」は、NHKテレビドラマ「夢千代日記」の撮影が行われた湯村温泉でも知られている。

活動拠点「上山高原ふるさと館」は、JR浜坂駅から約20km。閉校となった八田中学校をリニューアルし、1階にはインフォメーションルーム、休憩室・試食室、トイレ、管理事務室等、2階には展示室、収蔵庫、体験作業室等が整備されている。

「上山高原ふるさと館」は、上山高原の自然観察・自然体験のビジターセンター(来訪者への案内所)機能を果たすとともに、木工細工・草木染めなど地域文化を体験することができる。

ふるさと館から上山高原の登山口までは、かなり距離があるため、登山口にあたる海上・青下地区にはサブ拠点として「ふるさと体験ハウス」が設置されている。



活動拠点「上山高原ふるさと館」



囲炉裏のある休憩室



常設展示室

## NPO法人「上山高原エコミュージアム」立ち上げに至る経緯 —地域開発と自然環境保全—

小畑<sup>こはた</sup>代表理事は、中学校教員を退職後、専ら農業に従事され、まさに戦後の上山高原とその麓の奥八田地区7集落の変遷の中で地域と係わってこられた。同席いただいた西川事務局長は、扇ノ山や上山高原<sup>おうぎのせん</sup>など西但馬地域の自然環境保全活動に長く携わられたとお聞きした。

戦後、上山高原麓の奥八田地区も全国の他の中山間地域と同様、若者流出、過疎化・高齢化が進み、「このままでは地域が成り立たなくなる」という危機感が強まり、豊かな上山高原の自然を観光開発・地域振興になんとか活かしたいという地域の要望が高まっていたという。

昭和60年代には、兵庫県により滞在型リゾート開発の検討が始まるが、バブル崩壊によってリゾート構想の再検討を余儀なくされ、加えて、平成7年には上山高原でイヌワシの生息が確認され、開発による自然環境への影響に対して十分な検討・配慮を行うことが必要となった。

豊かな自然環境保全、自然の生態系維持、イヌワシ等絶滅の恐れのある動植物への対応など、自然環境に配慮しながら地域開発を進めることが必要と、10年間で、時代の流れが全く変わってしまった——と小畑さんは振り返る。

山を削り道路を通し、観光客を増加させるという開発は許されない状況に変化したのである。

兵庫県は上山高原の自然環境を保全しながら地域振興にも活かしていくため、平成8年、兵庫県土地開発公社による上山高原中心地域373haの用地取得を行い、県として上山高原の自然環境の保全と利用に関わっていくという姿勢を明確に打ち出した。平成9年、「イヌワシの生息状況調査」、平成11年、「上山高原自然環境調査」が実施された。

こうした中で、上山高原自然環境保全・利用の方向として打ち出されたのが『エコミュージアム』の考え方である。上山高原一帯の豊かな自然やふもとの奥八田集落の生活、文化をまるごと「生きた博物館」としてとらえ、地域資源として保全を図りながら地域振興に活かしていこうとする取り組みである。

西川事務局長は、但馬の情報誌「T2」(2006-Vol-59 記事)の中で、「高原の自然がかなり荒廃し、ミズナラの立ち枯れが進み、特に人手が入らなくなったススキ草原は壊滅的状况にある。エコミュージアム構想推進による保全と地域振興両立の考え方がでてきた時は、渡りに船だと思いました」と述べている。

「上山高原利活用基本方針」検討(これまでの開発方向の見直し)(平成12年)、「上山高原エコミュージアム基本計画」検討、地元説明会・地元ワークショップ実施(平成13年)、「上山高原エコミュージアム基本計画」策定(平成14年)、試行プログラムなどを経て、平成16年7月にはNPO法人「上山高原エコミュージアム」が設立された。

### 上山高原エコミュージアムの歩み

昭和 60 年代	上山高原のリゾート開発の計画が検討される
平成 7 年	イヌワシの生息が確認される
平成 8 年	兵庫県土地開発公社による用地先行取得(上山高原を中心に 373ha)
平成 9 年	イヌワシの生息状況調査実施
平成 11 年	上山高原自然環境調査実施(植生調査ほか)
平成 12 年	上山高原利活用基本方針検討(これまでの開発方向の見直し)
平成 13 年 6 月	「上山高原エコミュージアム基本計画」検討開始
8 月	地元説明会実施、地元ワークショップ実施
10 月	上山高原フェスティバル開催(秋のエコフェスタの前身)
平成 14 年 3 月	「上山高原エコミュージアム基本計画」策定
5 月	春の試行プログラム実施(春のエコフェスタの前身)
7 月	「上山高原エコミュージアム準備会」発足
9 月	自然復元作業スタート(ササ刈り、ブナ苗育成など)
平成 15 年 4 月	ホームステイ開始
平成 16 年 3 月	「特定非営利活動法人上山高原エコミュージアム」設立総会 ガイドマップ完成
6 月	自然再生事業スタート
7 月	「特定非営利活動法人上原高山エコミュージアム」正式設立
12 月	サブ拠点完成 (海上、青下地区「ふるさと体験ハウス」)
平成 17 年 12 月	遊歩道整備完成
平成 18 年 7 月	ビジターセンター「上山高原ふるさと館」オープン

### NPO法人「上山高原エコミュージアム」の概要

#### ■「上山高原エコミュージアム」のコンセプト

- 貴重で豊かな生態系を守り、育む
- 自然と暮らしの共生の知恵から学び・活かす
- 多様な主体による参画と協働
- 環境保全を地域振興につなげる

#### ■取り組みのポイント

- ブナを中心とした広葉樹林とススキ草原の保全・復元
- 地域資源を活かした多彩な実践型「プログラム」の展開
- 地元住民、都市住民、NPO、事業者、行政など皆の力を合わせた取り組みの推進

#### ■5つの部会

- 保全部会：ススキ草原やブナ林の保全・復元活動、ブナ苗育成、入山マナー啓発 など
- プログラム部会：月例プログラムの実施、春・秋エコフェスタ等プログラム等の企画 など
- サテライト部会：サテライト(地域資源)の情報収集、情報シート作成、特産品開発 など
- 調査研究部会：自然などの調査・研究、研修会の企画・実施、ガイド体制づくり など
- PR部会：「上山高原エコミュージアムだより」発行、ホームページ運営、広報活動、記録 など

### 「上山高原エコミュージアム」のこれまでの主な取り組み

上山高原は、兵庫県北西部に位置する標高 750～900m の高原状の台地。ブナの森とススキ草原が相まって多様な生態系を育んできた。しかし、現在は、杉の人工林が増加し、ススキ草原はササや灌木が密生した草地へと変わりつつある。「上山高原エコミュージアム」は、ブナを主体とした広葉樹林やススキ草原の復元活動に取り組むとともに、「春・秋のエコフェスタ」、「自然や里の暮らしを体験する月例プログラム」、「上山高原キャンプ」などを通して、楽しみながら学べる様々な体験プログラムを企画し、実施している。

自然観察体験、エコフェスタへの参加者は、神戸、尼崎、姫路など兵庫県内の人ほとんどで、定年を過ぎた中・高年の人が多い。一部鳥取県からの参加もみられる。山歩き、沢歩きコースはハードな面もあり子どもづれは少なく、逆に室内の木工体験は子どもづれ参加者が目立つという。インターネット、県・町の広報誌、地元マスコミの報道を通じて興味を持ち、参加した人が多いと思われる。春・秋のフェスティバルには兵庫県庁前から直通バスを運行していることも大きい。

一度参加された人へは、毎年行事の案内状を送付し、リピーターとして定着を図っている。

### 「上山高原エコミュージアム」の主な取り組み

#### 〈自然再生活動〉

- ・「森林ゾーン」と「草原ゾーン」に区分し、ブナ主体の広葉樹林やススキ草原の復元活動を実施
- ・作業後はモニタリングにより、自然がどの程度復元できたか検証し、その結果を次の作業に反映

#### ブナ林の復元活動

	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	累計
スギ間伐等	0.20ha	0.40ha	2.80ha	1.12ha	0.75ha	5.27ha
ブナ苗等植樹	500本	630本	2,300本	848本	448本	4,726本

#### ススキ草原復元活動

	14年度	15年度	16年度	17年度	累計
ササ刈り・新規	7.30ha	0.50ha	1.12ha	1.42ha	10.34ha
継続		7.10ha	10.56ha	13.38ha	31.04ha
灌木伐採等		2.96ha	4.92ha	2.68ha	9.93ha

#### 〈実践プログラムの実施〉

- ・上山高原の自然循環の仕組みや自然と共生する人々の知恵を学び、体験する多彩なプログラムを実施
- ・プログラムに参加する場合は、集落でのホームステイも可能

春のプログラム	ススキ草原火入れ、棚田での田植え体験、新緑の扇ノ山登山 など
夏のプログラム	霧ヶ滝トレッキング、生き物調査・観察会、上山高原キャンプ、「木地師体験」 など
秋のプログラム	紅葉の扇ノ山登山、上山高原歴史探訪、きのこ採りとピザ作り、棚田での収穫体験、自然素材でハンドメイド(草木染め、木工、ツル細工など) など
冬のプログラム	動物足跡トレッキング、炭焼き体験、山スキー・かんじきづくりとハイキング、ツキノワグマの学習会、囲炉裏を囲んで奥八田歴史講座 など



ブナの苗の植え付け(秋のエコフェスタ)



草原の火入れ(春のエコフェスタ)

### 地域活性化と「上山高原エコミュージアム」

「上山高原エコミュージアム」の会員数は現在約 120 名。会員の約 7 割が地元 7 集落の住人で兼業農家の人が多い。その他会員は、兵庫県内の行政関係者、自然保護・自然復元に関心のある人が中心である。

小畑さんに、「上山高原エコミュージアム」の取り組みに対する地元の反応をお聞きした。

これまでの開発方向の見直しを行った「上山高原利活用基本方針検討」等の委員会、「上山高原エコミュージアム基本計画」策定過程では、地元説明会、ワークショップを開催し、地元の声を十分に吸い上げるよう努めた。しかし、活動に対する地域の盛り上がりは今一步の感がある。まだ、『地域をまるごと博物館に』という新しい考え方が、地域や自分たちの生活とどう関わり合うのか充分理解されていない気がする——と小畑さんは話される。

「地域の生活は自然との闘いの歴史」であり、「自然のままの状態は開発が遅れた結果」という意識が地域住民には強い。農業や生活に被害を与える熊、猪、鹿を全て保護するのかと考える人も多い。

「上山高原エコミュージアム」の目的は、『上山高原の自然の保全と地域の活性化』の 2 本柱である。自然環境保全だけを進めるのは比較的容易であるが、過疎化が進展し、地域の衰退が進んでしまうと守れる自然も守れなくなる。自然環境保全と地域興しの両立は、そこに住む人との関わりの中で進めねばならないから難しい。

「上山高原エコミュージアム」の活動が、地域振興や活性化につながるには、それが、地域の産業の一部に組み込まれ、住民生活の維持・向上に結びつくことが重要である。山での仕事はつらいことが多いが、仕事はつらくとも魅力ある地域づくりができれば生活が向上し、人は地域に住み着くし地域外からも移り住む人が出てくると思う。

サテライト部会を設け、地域資源の発掘や特産品開発に取り組むのもそういう思いからである。この地域には、五箇山合掌集落や白神山地のような全国的に有名な歴史遺産、自然資源があるわけではない。洗練された街並みもない。しかし、その中に一歩足を踏み入れると自然と人の暮らしがあり、その一つ一つがサテライトであるにとらえる。ありのままが楽しく魅力がある。それを、変に観光客向けに作り変えては駄目だと考えている。春・秋のフェスタでは、奥八田地域内の民家に宿泊してもらっている。地域の人が良い、魅力があると思う所に案内し体験してもらおう。都会からの参加者が増えれば、都会の人にも魅力があるということである。

現段階では、地域住民が都市住民と関わる形で活発に動くことで、地域に刺激を与え活性化し、あとは、「上山高原エコミュージアム」の活動を地道に続けていく中で成果を出し、徐々に理解してもらえない。そうすれば、5 年もすると地域に浸透していくのではないかと考えている。

## 行政への要望事項など

行政への要望事項をお聞きした。

人の手が入らず全て自然まかせでは、自然は荒れ放題となる。加えて、社会条件が変わり、地域の緑のあり様も時代とともに微妙に変化しており、従来型の方策では豊かな自然は維持できない。

例えば、今から 30～40 年前、上山高原はたくさんの牛が飼われる放牧地、採草地であった。草原の山焼き作業も習慣として地域で行われていた。しかし、農業機械化により役牛需要が減少し、放牧地としての草原維持の必要性が無くなった結果、人の手が入らなくなり草原に次第に笹や灌木が増加した。

日本全体をみると、必要以上に針葉樹が増加している。その修正をどう行っていくかの方策検討も大変ではあるが国としてやっていかねばならない。

問題は、自然環境の保全のため資金を投下することに社会的合意が形成できるかである。

人が人間らしい生活をするために必要なのは緑であり、地球全体で CO2 を削減する一番大きな働きをするのは緑である。台風 23 号では、山の杉が将棋倒しとなる大きな被害が出たが、間伐されず草が少ない山は、雨で山の表土が流れ杉の根がむき出しとなりやすく、大きな被害が出やすい。

やはり、国は、時間をかけてでも、「上山高原の自然は地域住民の財産」⇒「新温泉町民全体の財産」⇒「兵庫県民全体の財産」⇒「国全体の財産」という考え方を広めていかねばならない。

また、『緑の国土軸』についても、『緑の国土軸』を展開するとすれば、どういう緑を軸とするのかあいまいであり、緑の軸の捉え方に幅がありすぎるような気がする——と付言された。

## 終わりに

上山高原エコミュージアムの立ち上げ、その後の活動でも、お話するような苦労や苦心はなかったと小畑さんは笑う。

色々連携の話はあるが、「上山高原エコミュージアム」は立ち上げてまもなく、規模もまだ小さく、現在は活動の足下を固める段階にあり、県境をまたいだ交流など活動の輪を広げる段階には至っていない。地域の一人でも多くの人が上山高原エコミュージアムの活動に積極的に参加することを目指して活動を進めたい——と話を終えられた。

「上山高原エコミュージアム」の活動が地域住民を巻き込む形で広がり、地域活性化を実現し、『地域開発と自然保護』両立を見事に成し遂げられんことを期待する。

## 19. 緑豊かな森を次代の子どもたちに引継ぎたい ―鳥取市女性の森グループ―



井関 伸子 代表

### 「鳥取市女性の森グループ」代表 井関伸子さん

長かった梅雨が明け、夏の強い日差しが照りつける8月、「鳥取市女性の森グループ」代表井関伸子さんのご自宅(鳥取市)におじゃまし、お話をうかがった。

「鳥取市女性の森グループ」は、「とっとり出合いの森」(鳥取市桂見)地内「女性の森」を活動拠点とし、多くの女性団体やグループの参加を得て、鳥取の緑豊かな森を次代の子どもたちに引き継ぐ活動を幅広く展開している。森の保全活動は、危険が伴う上、下草刈り作業など、地道な活動が必要であり、女性が主体となった森林保全の継続的活動は全国的にも非常に例が少ないと言われている。

井関伸子さんは、かつて、「鳥取市連合婦人会会長」「鳥取市消費者団体連絡協議会会長」「鳥取県森林審議会委員」などを務められたとお聞きしていたため、行政にもの申すといった強い女性をイメージしていたが、お話するだけで気持ちが伸びやかになる方であった。

### 鳥取市女性の森グループ誕生と鳥取市連合婦人会

井関伸子さんは、平成6年4月に鳥取市連合婦人会会長に就任された。

鳥取市連合婦人会は、昭和28年「こころ豊かな住みよい地域づくり」を目指して結成され、これまで環境、福祉、子育ての問題など様々なテーマを選び学習し、女性の視点から問題解決に努めてきた。さらに昭和60年からは、自分たちの郷土を知る「ふるさと学習会」を開設し、毎年、様々な場所や内容を決めて学習している。

井関さんが会長に就任した平成6年夏は、全国的な猛暑、異常渇水の年であったが、鳥取市は、市中央部を流れる千代川の伏流水のおかげで、生活用水が不自由なく供給された。鳥取市民が猛暑でも生活水に困ることがないのは、千代川とその上流の森のおかげであり、平成7年の「ふるさと学習」は水、千代川の上流の森の勉強をしようとなった。

平成7年6月、鳥取県の紹介により千代川上流の三滝溪を訪れ、鳥取振興局の女性指導員の案内を得て、約30人が実際に山の中を歩き説明を受けた。

鳥取市連合婦人会が、実際に現地に出向き、森林の中の勉強をしたのは初めてであった。間伐されきちんと手入れされた森もあれば、全く手が入らない森もあった。この体験により、森林の水源涵養機能

を知り、水は上流から下流に流れて当たり前と思っていたものが、過疎化・高齢化、林業不振から、森林の手入れは非常に大変なことであることが肌で理解された。

こうした体験・勉強を通じて、自分たちにも何かできることがないかを考えるようになった。「鳥取市連合婦人会の先輩たちががんばってきた思いをひき継ぎたい」「自分たちも森を保全するために何かしなければ」という熱い思いに会員皆が動かされたと井関さんは当時の思いを振り返る。

「自分たちで森を作り、多くの女性達が森林の保全の体験ができないか」「鳥取の豊かな水の源である森を次代に残したい」という井関さんたちの熱意が鳥取市出合いの森内の「女性の森」実現につながっていく。平成7年から森の勉強をスタートし、平成9年3月、女性の森ができあがった。多くの方々のご支援と、今より、10才以上も若かったからできたハードな日々でしたと井関さんは語る。

### 「女性の森」実現にお世話になった方々

「女性の森」実現には、たくさんの方から、本当に辛抱強くご支援いただいたと井関さんは話される。

鳥取県に女性の手で森を作りたいと相談したが、これまで、一般市民、それも女性が森づくりに直接関わるケースはなく、婦人会が自ら森を作るという話にはかなり驚いたようであった。「女性の森」実現に最初から最後までお世話になり、できてからも様々な支援をいただいた鳥取県の津村さんは、「山の厳しさ、森のこわさを知らない」と『女性の森のあゆみ』(女性の森誕生によせて)で振り返っている。

“夢中だったし、山の厳しさを知らないからやってこれたのでしょうね”と井関さんは笑う。

#### 「女性の森」誕生によせて (元鳥取県職員 津村千廣さん)

「女性の森のあゆみ」から要約

鳥取県に在職中に千代川上流の水源林の三滝地区に同行しこれで終わりと思っていたところ、婦人会から自分たちの森を作りたいという申し出を受け、山の厳しさを知らない無謀な申し出と最初は困惑しましたが、心中を覚悟の上で引き受けました。

多くの女性の森林への思いに対し失敗は絶対に許されないと肝に銘じ、最も成功率が高い場所として、当時、鳥取県、鳥取市が整備を進めていた全国育樹祭(平成10年開催)会場「出合いの森」の一角にしぼり検討と交渉を重ね、「出合いの森」の入り口62aの山の提供が決まりました。

借り受けした山は、椎茸栽培を放棄したところで、カブレの恐れのあるヤマウルシなどの残木と腐った有刺鉄線が散乱した足の踏み場もない荒れ山でした。山を女性が入れる状態にするのは、山の経験が全くない女性では無理な作業でしたので、自分が休日を利用して作業しました。

また、鳥取県の木「ダイセンキャラボク」55本を中山重信さん(当時、明治林業研究会会長)から無償で提供いただきました。キャラボクの成木は、移植で枯れないよう「根切り」作業が必要であり、中山さんが所属する鳥取市林業振興協議会と鳥取市連合婦人会の交流講習会で「根切り」作業を行い、併せて隣接した杉林の間伐作業も体験しました。

平成9年3月16日女性の森が誕生しました。女性の森植樹祭には、350人が参加し、緑の募金事業による樺500本、無償提供による桜50本、キャラボク、マユミなどが、鳥取市林業振興協議会の指導のもと植樹されました。



「女性の森」記念碑



記念植樹風景

### 緑の募金活動 —女性の森グループの活動のベース—

鳥取市女性の森グループの活動のベースとなっているのは「緑の募金活動」である。

鳥取市連合婦人会は設立以来、緑の募金活動を積極的に展開し、緑の募金活動の還付金を学校、公園、幼稚園等への植樹資金として活用してきた。

女性の森グループを立ち上げるに際し、『緑豊かな森を次代の子どもたちに引き継ぐ活動を行う』というグループの趣旨に賛同し、緑の募金を振り込んだ者を会員とする組織とした。

女性の森グループの立ち上げ、その後の啓発活動により、様々な団体・グループに緑の募金を通じて「子どもたちに豊かな緑と良い環境を残そう」と呼びかけ、現在、鳥取市連合婦人会の他に 25 団体が賛同し、26 団体メンバーを合わせた会員数は約 3000 名を数えている。

女性の森グループでは、緑の募金を振り込んだ団体・グループ代表による代表委員会により年間活動内容が検討・決定される(会の経費は緑の募金の交付金及び事業の補助金等)。毎年、400～500 千円の募金実績は鳥取県一である。

女性の森各グループへの緑の募金のお願い(振り込み用紙同封)、活動案内、イベント時の参加者受付、保険加入、問い合わせへの対応等の事務は、全て事務局(井関)が行う。事業実施に際してのアドバイス、支援、他の行政への対応などを鳥取市林務水産課にいただいている。その他、森林ボランティアアドバイザーの指導がありとても助かっている。

「緑の募金活動」への参加・協力というゆるやかな連帯のもと、鳥取市女性の森グループの活動は、たくさんのグループに活動の輪が広がっている。

#### 鳥取市女性の森グループ 規約

第1条 この会は、鳥取市女性の森グループと称し、事務局を代表宅に置く。

第2条 この会は、第3条(目的)の趣旨に賛同し、緑の募金を振り込んだ者を会員として組織する。

第3条 この会は、「次代に残したい私たちの活動」として、緑豊かな森を次代の子どもたちに引き継ぐ活動を行うことを目的とする。

第4条 この会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- (1) 女性の森の保育管理
- (2) 女性の森を拠点とした緑豊かな森づくり活動
- (3) 森林の啓発と森づくりの輪の拡大
- (4) その他目的達成上必要な事項

第5条～6条 略

第7条 この会の会議は代表委員会及び役員会とし、代表委員会、役員会は必要に応じて代表が招集し、事業執行に関する事項を決定する。



鳥取市女性の森グループ 活動の歩み

実施年月		参加人員	活 動 内 容
平成7年	6月	26	上流域森林・林業の現状確認
	10月	83	県林業教室(智頭町、岡山県)
	11月	500	緑の募金を基本とした女性の森づくり
平成8年	2月	200	連合婦人会の集いで森づくり活動発表
	4月		鳥取市女性の森グループ発足
	6月	80	女性の森林予定地調査、森づくり検討
	8月	160	連合婦人会の集いで森づくり講話受講
	10月	ボランティア	女性の森「記念碑」作成
平成9年	3月	350	女性の森グループ植樹祭(ツバキ等700本植樹) 林研(鳥取市林業振興協議会)との交流
	10月	90	林業教室－木工施設見学
平成10年	6月	55	米子市女性団体との交流(女性の森)
	7月	154	森林教室、サルスベリ等植樹
	7・8月	320	森林教室、林研交流、サルスベリ等植樹、花壇作り
	9月	60	岩国市女性団体との森づくり交流
	10月	40	芹洋子、岡山県植樹祭関係者との交流
	11月	40	林研と森づくり交流会
平成11年	6・7月	130	森林教室、ライラック等34本植樹
平成12年	3月	47	林研と学びの木33本植樹交流
	6月	150	森林教室(出合いの森)、竹林視察体験(船岡町)
	11月	100	智頭町源流にてブナ植樹、植樹交流
平成13年	7月	81	智頭町源流にて森林教室、水源林保育、施肥、交流
	12月	15	林研と植樹交流
平成14年	6月	121	森林教室、講話(森林と水)、サツキ800本植樹
平成15年	3月	150	松くい虫抵抗性クロマツ400本植樹－一般公募含む(鳥取市伏野)
	10月	45	森林教室(兵庫県波賀町)
	11月	30	森づくり市民活動支援事業－ミズナラ、杉各250本植樹(智頭町 こまがえり 駒帰)
	12月	9	現地検討会(女性の森、伏野松林等)－今後の管理検討
平成16年	7月	26	昨年度の植樹地の保育作業(下草刈り)(智頭町)
	10月	61	森林教室(岡山県)－自然公園、若杉天然林視察
	12月	役員他4	女性の森保育
平成17年	7月	26	－昨年度の植樹地の保育作業(下草刈り)(智頭町)
	10月	68	森林教室(岡山県)－恩原高原、白樺自生地等植生調査



松林再生活動風景



智頭町での植樹風景

### 若い女性の参加を増やしたい

平成6年の猛暑から始まった鳥取の女性たちの「緑豊かな森を次代の子どもたちに引き継ぐ活動」は、10年を経過し、ゆるやかなネットワークのもと活動の輪を拡げている。

「千代川源流の森を訪ねたことから生まれた自分たちの思いをベースに、自分たちのできることを少しずつ積み重ねてきましたら、このようなグループになりました」と井関さんは語る。

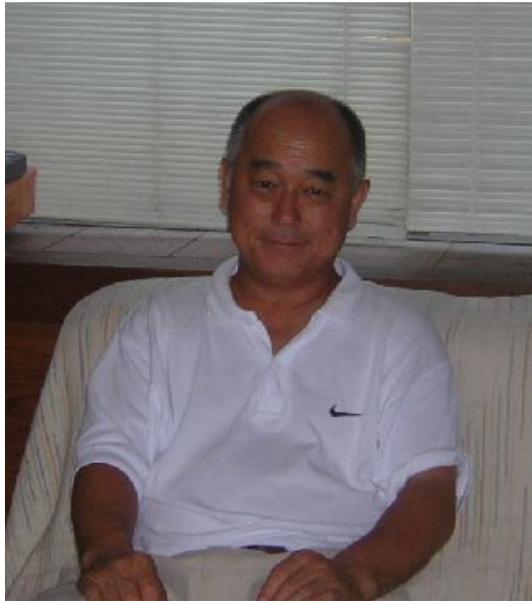
井関さんは、6年間、鳥取市連合婦人会会長を務めた後も、女性の森グループ代表は引き続き担当している。女性の森グループの活動は、多くのグループの賛同を得て活動領域も拡がっており、なかなか、片手間ではできなくなっていると話す。

「女性の森」ができた平成9年は、井関さんには小さいお孫さんが二人あり、「女性の森」はこれからも孫と同じ気持ちで育みたいと井関さんは笑う。

最後に、行政への要望をお聞きした。

井関さんは、これまでもずいぶん無理な願いをし、津村さん始め多くの方々からご支援をいただきました——と感謝された上で、「女性が緑の保全活動を行うには、自然の生態や森に関する正しい指導がどうしても必要です。最近も森の保全活動を行う際の指導者の充実を鳥取市長に要望し、鳥取市は、今年7月から森林ボランティアアドバイザー制度が制定されました」と話す。

最近、婦人会などの活動には、若い女性の参加が減少している。鳥取市女性の森グループの活動をさらに充実し、是非若い女性たちの参加も増加させ、自分たちの思いを引き継いでいきたいと、井関さんは話を終えられた。



理事長 藤田 充 さん  
(鳥取市 藤田さん自宅にて)

#### NPO「賀露おやじの会」理事長 藤田 充さん

NPO「賀露おやじの会」は、鳥取市賀露町の仲間たちを中心に、独自の「まちづくり推進活動」、「環境保全活動」、「子供の健全育成活動」を幅広く展開し、近年は、同様の活動を行う団体との連携・交流、運営・活動支援を通じて、独自の存在感を発揮しているグループ(集団)である。

NPO「賀露おやじの会」理事長藤田充さんのご自宅(鳥取市賀露町)におじゃまし、お話をうかがった。

賀露町は、昔は賀露港(現在の鳥取港)を中心とした漁業の町として賑わい、松葉蟹や鮮魚の小売商、漁船の建造や修理にあたる造船業や鉄工所が軒を並べたこともあったという。30度を軽く超える猛暑の午後であったが、藤田さんのお宅は、海からわたる風が心地よく部屋を通り抜け、暑さを忘れてお話をうかがった。

藤田さん(53才)は、帯広畜産大学卒業後、鳥取県外で勤務し、平成元年に鳥取市に戻られた。現在のお仕事は、農業土木、公共土木の設計がご専門とお聞きした。

#### 「賀露おやじの会」のスタート

藤田さんは、男のお子さんが2名、女のお子さんが1名。

「賀露おやじの会」は、平成9年、藤田さんが賀露小学校の保護者仲間と子供会活動に関与したことから始まる。子供会は、賀露小学校の「科学遊び広場」として、色々な理科の実験装置を製作し、子供達の実験を楽しんだ。賀露小学校 PTA 仲間には、鉄工所、造船所の町工場の社長兼職人といった人がおり、子どもの学年に関係なく、皆が集まり大型の実験装置を製作した。藤田さんも、元々、子供と遊ぶこと、科学や理科が大好きだったという。

皆で実験装置を工夫して作ってみると、これがおもしろい。1回限りで止めてしまうのはもったいないと、次々と工夫して色々な実験装置を作ったという。賀露小学校も、「おやじたちのクリーン・エネルギー教室」開催など、総合学習の一貫として積極的に協力してくれた。

「これはおもしろい」「子供達の驚く顔や喜ぶ顔がたまらない」という、楽しさ・おもしろさが「賀露おやじの会」の活動の原点となっている。

「賀露おやじの会」の仲間は、地域の鉄工所、造船所、漁業など自営業の人が多い。ウィークデイでもすぐ連絡して皆で集まりワイワイガヤガヤとやった。勤務時間にしばられるサラリーマンでは参加が難しい面があった。仕事の休憩がてら、気分転換に地域のおやじが集まっていたと当時を振り返る。

こうした賀露小学校のおやじの集まりに、「賀露おやじの会」という名前をつけたが、会費も会則もなくこれをやるときちゃんと決めた組織でもなかった。「あの木を切ってほしい」、「ドブ板の修理をしてほしい」など、子供のため、地域のためと、頼まれれば何でもやる会であったという。

### 「賀露おやじの会」の主な活動

H9/10	科学実験・工作（パイプホンの製作）
H11～	「かろっ子アスレチック風車広場の整備計画」の企画参加
H12/1	身近な環境エネルギーわくわく体験教室開催(賀露小学校)
H12/2	スペースシャトル「エンデバー」公開反射実験への参加（アルミホイルを貼った反射装置を賀露港、賀露小グラウンドに設置。スペースシャトルからの電波を受信）
H12/7	「2000年夏・アースデイ from かろ」開催(親子で遊びながら地球を考えるイベント) 「ミレニアムチャレンジ・賀露から地球へ」(賀露公民館主催イベントに協力)
H12/12	天ぷら油発電による 21 世紀イルミネーション点灯
H13/6	わいわいテント組み立てイベント(高さ 4m、直径 7m のドーム型間伐材テント組み立て)
H13/8	2001 年賀露夏祭り(夏祭り実行委員会：企画－賀露おやじの会)
H13	出前実験教室「おやじたちのクリーンエネルギー教室」開催(明治小学校・浜坂小学校)
H13/9	NPO 賀露おやじの会設立総会（H14/1：NPO 賀露おやじの会認証）
H14/4	デンマーク風力発電見学報告会と自然エネルギーを語る会を開催
H14/5	福部科学教室風力発電実験への参加
H14/	中学生ダッシュ村森林整備教室開催
H14/8	青少年のための科学の祭典米子 2002 参加(パイプホン、超感度アルミ缶風車出展)
H14/10	ほうきリサイクルフェア 2002 参加(リサイクル天ぷら油発電、回る杉の木玉出展) 賀露公民館風作り協力
H14/10	賀露ウインドタウン構想草稿作成
H14/11	「赤イカ音頭」CD 製作
H14/12	鳥取港みなとオアシスミニ実験への参加
H15	おやじたちの出前実験教室(「アルミ缶風力発電機を作ろう」「風力発電を体験し自然のエネルギーを考えよう」「安全巨大火の玉をあげよう」「2003 海の科学遊び広場」「マイナス 200 度の世界を学ぼう」)
H15/2	鳥取県風力発電推進委員会にて「賀露ウインドタウン構想・市民参加の風力発電所建設に向けて」発表
H15/4	みなとの風・日野皓正コンサート(港のセリ市でジャズ・コンサート)開催
H15/6	みなと童謡唱歌の夕べ開催
H15/8	われは海の子・みなと夏祭り企画
H15/10	森のめぐみ感謝祭・植林ボランティアへ参加
H15/11	天ぷら油ストーブ公民館導入支援
H15/12	賀露公民館屋上に小型風車セファ―とイルミネーション設置

H16/1	市民風車をつくる会関西研究会に参加
H16/2	船岡森林隊(こどもエコクラブと森林作業体験、交流会)
H16/3	CASA 鳥取支部学習会・交流会へ参加
H16	関西市民風車をつくる会賀露研究会開催(賀露公民館) (4-5-7-9)
H16/7	鳥取港海岸清掃ボランティア、西浜海岸清掃ボランティア活動 自然エネルギー市民の会設立総会(大阪)
H16/8	鳥取・賀露みなとオアシス夏まつり
H16/9	第2回全国おやじサミット in みえに参加 智頭町で山林フィールド踏査
H16/11	おやじたちの森林活動隊ー智頭
H16/12	劇団アルティスタ・大阪城南女子短大合同ミュージカル「雪の女王」公演協力
H17/2	とっとり・さぬきおやじ交流会
H17/5	オペラ座の怪人コンサート(鳥取) 賀露公民館身近な森づくり(5, 6, 7月実施) 源流の森智頭探検(智頭)
H17/5-6	こども科学教室(魚は浮沈子で省エネ浮上、ビー玉魔境を作ろう)
H17/7	賀露みなと夏まつり(賀露灯台前広場)
H17/8	おやじの家庭教育参加への集い(主催：とっとりおやじ連) 防犯ボランティア(おやじたちのわいわい海岸保安隊) (8, 9月実施)
H17/10	とっとりこども科学祭り(鳥取市)
H17/11	鳥取砂丘探検隊「砂丘模型をつくろう」に協力 鳥取港ヨットイルミネーション&みなとオアシス鍋談義
H17/12	劇団アルティスタ「クリスマスコンサート」(岩美町大谷公民館)

## 活動領域の拡がり と NPO 化

子供達が賀露小学校を卒業した後は、他の学校から頼まれ理科実験教室を開催した。また、NHK 教育テレビの実験名人<sup>あしかがひろひと</sup>足利裕人氏と知り合いになり、「こんな実験装置ができないか」と頼まれるようになった。足利さんが、実験のイメージを提示し、それをどう楽しい実験装置に創り上げるか仲間で知恵を出し合う製作過程が非常におもしろかった。

こうした活動が評判になり、県内の他の科学イベントにも参加。年1回、鳥取、倉吉、米子で順繰りに開催する「鳥取こども科学祭」に、「賀露おやじの会」はブースを出展し、次第に「鳥取こども科学祭」の運営にも関与するようになった。中学校や高校の理科の先生、鳥取大学とのつながりもでき、そのうち、鳥取県の科学教室のコーディネーター役が回ってくるようになった。派閥や学校・先生間の力関係などのしがらみのない「賀露おやじの会」に任じた方が、スムーズにいくのかもしれないという。

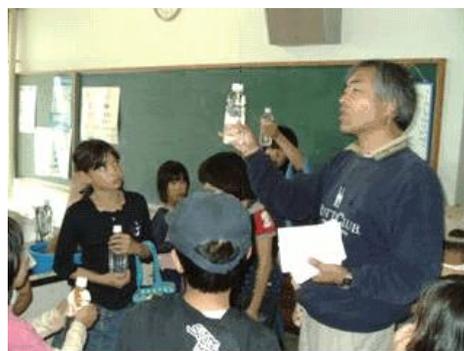
平成14年1月、「賀露おやじの会」をNPOとし、会則、定款等をきっちりと定めた。NPOといっても、理事10人を含め総会員数15人と、賀露小学校のおやじの会のメンバーが活動の中心である。

子供が成長すると子供を介したつながりが薄れ、活動をそれなりの形で継続させるためにはきちんとした組織とすることが必要であった。また、地域づくり、環境問題への取り組みなど、会の活動領域が

拡がり社会性を持つようになると、対外的には組織形態をしっかりしないといけない段階になった。特に、活動への補助金交付の関係では、組織的にしっかりしていることが必要であった。



こども科学教室「漁師の網づくり」  
(漁師「栄進丸」広岩栄一)



「魚は浮沈子で省エネ浮上」(足利裕人先生)

## 風車建設

「賀露おやじの会」が環境問題と関わるきっかけは風車建設へのチャレンジだった。珍しい、観光資源としての風車ではなく、市民が少しずつ資金を出し合い、風車のクリーンなエネルギーで地域の人が恩恵を受けるような風車の建設を目指した。

賀露に風車を建設する資金を集めるにはNPOとなりきちんと組織化していないと難しかった。

また、風車建設に賛同しお金を出してもらうには、会の組織化とともに、風車の意義づけをきちんとしなければ納得されない。鳥取大学と連携を深め、風車、エネルギーの勉強を行い知識を深めた。

自然エネルギーとしての風車建設には、採算性や経済効果の検討が必要である。風車は安定的に風が吹かなければ採算に乗らない。風が強い鳥取県に適した自然エネルギーとしての風車の有効性を検証するため、風の観測データを細かく収集し、技術面、経済効果についてもきっちり検討を行った。理論的、学術的にもオーソライズして、資金提供者の賛同を得たかったという。

環境問題への取り組み、風車建設を契機として、都市市民との窓口が大きく広がり、交流が生まれた。

CASA(地球環境と大気汚染を考える全国市民会議)の会議へのオブザーバー出席などを通じて、市民生協グループ、大阪市民ネットワークといった環境保全に取り組む都市の市民団体ともつながりが生まれた。市民風車に取り組む大阪の「自然エネルギー市民の会」(H16.7 設立)の設立にも関与しているうちに、都市の市民と一緒に賀露で風車を作ろうとなった。年7回の打ち合わせを行い、共同でイベントも行った。自然環境保全、クリーンエネルギーを生み出す風車を実現したいという都市市民の思いと「賀露おやじの会」の風車建設の思いがドッキングしたのである。

藤田さんは、「賀露おやじの会」の力だけではとても風車は建設できない。環境保全に取り組む都市市民の力が必要であった——と振り返る。

注：「賀露おやじの会」は、都市の市民団体とも協力し、1年以上かけ調査・研究を行っているが、①賀露は鳥取空港に近く風車の高さ制限がある(高さ制限にかからない小さな風車は採算に乗らない)、②ヨーロッパの風車が日本に導入されたため雷対策が不十分——という技術的問題から、風車建設は、現在中断を余儀なくされていたが、技術開発に取り組むメーカーの協力で実証試験機の導入を目指している。

## まず仲間作りが大切

「賀露おやじの会」は風車建設以外にも、賀露地域内外で様々な環境保全活動を展開している。特筆すべきは、「賀露おやじの会」の環境保全活動を契機として、他の地域やグループとの交流ネットワークがどんどん拡大していることである。

賀露は漁師の町でもあり、会員にも漁師がいる。海で生計を立てる漁師からみれば、上流から流木やゴミが流れてくる、流木で網が痛むという色々な不満がある。「賀露おやじの会」では、怒って文句を言うばかりでなく、上流に出向き、自分たちで自然の保全活動や浄化活動をしようということになった。

まず、川の上流の状態を見てみようとなり色々な所にでかけた。その中で、上流の人と親しくなり、海と山のおいしいものを互いに持ち寄り一緒に飲む仲間となり、海と山との交流が定着した。

賀露は海の町だが、奥さんの約半分は山から嫁にきている。「あの山は良いわよ」と、奥さんも一緒に行き、奥さん同士も仲良くなるケースも多いという。賀露公民館の地域イベントでも、知り合った山の奥さん達が山菜おこわや山の幸をもってきて直売所を開くことも実現した。

環境への取り組みでは、『正しい理念づくりより、まず仲間づくりが大切』と藤田さんは言う。



源流の森智頭探検（賀露おやじの会 HP から）

## ネットワークづくり

「賀露おやじの会」は、環境問題への取り組みに限らず様々な文化活動や科学活動の NPO 等と一つ一つ仲間作りを行ってきた。藤田さんは、「山と海と都会のグループをうまく組み合わせれば、色々なおもしろいことができる」という。例えば、都会の市民劇団やミュージカルの催しを山や海でやると非常におもしろいイベントになった。おもしろくなければ人は集まらない。通常は山でのイベントは採算性が乏しく企画として成立しにくい、変わったことの好きな物好きな人もいる。そういうことに価値観を認めてくれる人達をまとめると、非常におもしろいイベントができあがった。

「賀露おやじの会」の藤田は、「海のおいしいもの」、「おもしろい話」を持ってくるおやじというイメージがまず定着した——と藤田さんは笑う。

賀露おやじの会のメンバーには大工もおおり、舞台装置づくりや設営もお手の物で、舞台づくりの名人として喜びをみいだしている。歌好き・歌自慢の漁師はミュージカルの役者で参加する。

藤田さんは、元々、色々な人をまとめコーディネートして、賑やかにすることが大好きだった。

こうして色々なグループの活動を組み合わせ、事務局・運営を担当して次々と成功させていくと、企画・段取りの能力・ノウハウも蓄積され、信頼も高まる。藤田さんは、「企画・段取りの能力・ノウハウは何をやるにも必ず必要となる。ミュージカル、フェスティバル、コンサート、科学イベントの事務局・裏方の仕事は、ツボ・ポイントを押さえれば変わらない。」と話す。

こういうことをやってみたいが、賀露おやじの会の藤田に相談してみるかという存在、あのおやじに頼めば何とか実現するだろうというお助けマン的存在となった。

### 「賀露おやじの会」の活動

「賀露おやじの会」は、会員が少なく互いに知り尽くした仲間であり、集まってもあまり議論をすることはない。こういう話が来たが「やるか、やらないか」を決めることが中心である。「この話は変な臭いがするから止めよう」、「これはおもしろそうだからやろう」という会としての決定である。

「賀露おやじの会」の活動は、土日が中心となるが、皆に振り分け協力してもらうので、藤田さん一人で仕事量を抱え込むことはない。藤田さんの主な仕事は、頼んだ人が楽しく気持ちよく仕事ができるよう段取りを組むことである。「賀露おやじの会」には、幅広い分野の色々な話がある。会員は全ての企画に参加することはなく、自分の興味のあるものだけに参加するのが原則であり、例えば、芸術に興味のない人は、その分野には参加しない。

手を変え品を変え、次々と新しい企画がでてきて、「賀露おやじの会」にはマンネリ化の暇がない。次々とやりたいことが出てくるし、アイデアも切れないという。また、こういうイベントをしたいがなんとかならないかという話も集まってくる。

例えば今年夏、賀露の海岸で昔からの地引き網を復活させた。網を作り漁業権もとった。海の状況を見るには、網を引いてみればよくわかる。地引き網には、ゴミや流木がたくさんかかると思う、網を引く砂浜がなくなっていることにも気づく。幸い今年はずまくいき、魚もたくさん捕れたので来年以降も続けたいと意気盛んである。

また、「賀露おやじの会」は、第2回「全国おやじサミット in 三重」(2004)に参加した。参加してみると、自分達と全く同じおやじ達のネットワークがあり、これなら鳥取で全国大会を開催できると、平成17年2月には鳥取県教育委員会の支援を受けて、さっそく「とっとりおやじ連」を立ち上げ、藤田さんが実行委員長となった。平成18年9月に第4回「全国おやじサミット in とっとり」を開催する。全くすごい行動力とネットワーク力である。(追記:「全国おやじサミット in とっとり」の県外参加者からは「動員型でなく、本当に来たい人達が鳥取に集い、真剣に話し合い、また合間にふんだんに芸術をちりばめた素晴らしい大会でした」との評価を得た。)

### 行政への要望事項

最後に行政への要望事項をお聞きした。

行政とNPOが協働してやった方が良い事業があると思う。NPOが行政の企画に加わることで能力を高めていけば、行政と一緒に考え、より具体的で効果的な方策がいろいろ出てくると思う。

NPOは行政のようにしっかりと固まった組織ではなく、アメーバー的な組織でもある。形にはまらないNPOの特徴とネットワーク力を活かす方向を是非検討していただきたい——と締めくくられた。

これからも「賀露おやじの会」の仲間と一緒に、「どうせやるなら人がびっくりするような楽しいことをどんどんやっていきたい」と藤田さんはますます意気軒昂である。

## 21. 山で遊ぶ I ターン者 — もりふれ倶楽部



野田 真幹 事務局長

### もりふれ倶楽部とは

「もりふれ倶楽部の『もりふれ』は『森と触れ合う』という意味です。多分」。事務局長の野田さんのお話。事務局長が「たぶん」なのだから、真相は闇の中ということか。まして由来に至っては「県にもりふれ課というのがあったという人もいるのですが…」と大変怪しい。

しかし、名前の由来はともかく、『もりふれ倶楽部』の活動は、ものすごいものであった。

NPO法人もりふれ倶楽部は、平成 16 年 4 月に誕生した。

今から遡ること 10 年、島根県の事業で森林インストラクター制度が始まった。インストラクターとなるための研修を受け、每期 15 名程が養成された。

このインストラクターに呼びかけて平成 17 年から本格的な活動がスタートした。現在、会には 54 名のインストラクターが登録されている。

### 野田真幹さん

野田さんは I ターン組。埼玉県大宮市（現さいたま市）で生まれた。「20 歳まで大宮にいたのですが、動物といえばカエル位のものでした。今は家の近くにオオサンショウウオがいますよ」。

大学は信州大学の農学部で、そのころから人生が変わってきたらしい。大学院卒業後、地元の農事組合法人で 1 年努めた後、東京で農業関係の出版社に勤め、営業で全国を回っていた。しかし、全国各地への出張で月曜日から金曜日まで家に戻れない生活に見切りをつけ、結婚を期に 9 年前に島根県広瀬町（現安来市）西谷へ移住してきた。移住してから 7 年間は林業で生計をたてていたが、平成 17 年 4 月から現在の職場に移った。

「なぜ、島根県に移ろうと決めたのですか」と聞くと「親が広島県出身であることと、出版社の仕事で全国を回ってみて、定住するなら中国地方か九州に決めていた」ことから。

当時の広瀬町も、I ターンした野田さんのため、最初の 5 年間は準公務員として処遇してくれた。

### もりふれ倶楽部の活動（自然体験講座編）

もりふれ倶楽部の現在の会員数は 90 名強。理事長は楨原さんという元高校教師の方。野田さんは理事・事務局長として現場担当。

もりふれ倶楽部の事務局と活動拠点は、松江市宍道町の、ふるさと森林公園の中の森林学習展示館にある。

ふるさと森林公園は、宍道湖の西岸から少し入った山中にあり、緑に包まれた公園内にはコテージやケビン、オートキャンプ場などと一緒に教会もあり、結婚式が行われている。

公園は、島根県と松江市がそれぞれ施設を有しており、森林学習展示館は、県立緑化センターが運営している。

NPO法人もりふれ倶楽部の専任スタッフは、野田さんを含め2名で、人件費等は、もりふれ倶楽部が、この学習展示館を含めた公園内の施設等の管理を受託しており、これを財源としている。学習展示館には中庭があり、大変きれいに手入れされているが、これも会員の仕事。「庭木の剪定をしてくれる人は県のOBの方で、緑化センターで指導をしていた人」だそうだ。

活動の柱は、森林ボランティア活動と里山自然塾。取材前日の日曜日には、間伐材を利用した丸太で動物を作る体験教室が開催された。定員20名で募集したところ、申し込み多数で22名に増やしたものの、結局15名程度は「お断りした」。

4月には、緑化センターの職員で、日本野鳥の会副会長の佐藤仁志さんに『もりふれ倶楽部に期待すること』と題して具体的なメッセージを講演してもらった。「佐藤さんには、会のスタートから現在まで、会の運営にアドバイスをいただいています」と野田さん。

GWの4月29日には、普段食べない山菜を食べる教室を開催。椿の花もテンプラにした。「割とおいしかったですよ」。

5月14日には、ネイチャーゲームのインストラクターを招いて開催。参加者は目隠しをして裸足で公園内を歩いた。「目が見えないので、最初はおっかなびっくりでしたが、やがて五感をフルに活用して自然を感じていたようです。見えないので指の感覚がものすごく敏感になりました」とのこと。

7月9日に開催した『コケ玉』作りも大変な人気だった。普段は採取禁止のコケだが、特別に許可を

もらい、これを玉にして、自然の花などを生けてみた。

夏休みの8月6日には和紙づくり教室を開催。材料は杉の皮。甘皮を剥き、それを煮たあと叩き、コウゾとブレンドしてからビナンカズラを繋ぎにしてミキサーにかけ、材料を作り紙漉きを行った。色は黒いが味わいのある紙が完成した。「最近、スギが悪者にされているのでイメージアップの意味も込めて」の実施。

これらの事業は、県の『里山自然塾』という委託事業なので参加費は無料。「でも、財政も厳しいので、ここいらで有名にして、有料化も考えなければならない」。



杉の樹皮で和紙づくり

#### もりふれ倶楽部の活動（森林ボランティア編）

5月には、島根県太田市小山地区で行われている環境型放牧事業の一環として、牛の放牧地で間伐を行った。この間伐作業を会員が手伝い、その間伐材を里山自然塾で利用している。

このように、わざわざ間伐に出向いて行って、その間伐材を講座に利用しているのには理由がある。「ただ当日用意された材を使うのでは面白くない。森林ボランティアが実際に間伐してきたことを伝え、環境教育にも役立たせている」。5割間伐を行うと、間伐後2年間で下草が密集してくる。逆に間伐をしていない近くの林は暗く鬱蒼としている。「都会の人は木を切ることが環境破壊だと言うが、実際に間伐して下草が生えて明るくなっているところも見せたい」。

余談として、島根県中山間地研究センターでは、「巻き枯らし」という間伐方法を試験しているが、これは木の甘皮を1m程度剥いで木を腐らせて伐採する間伐で、チェーンソーがいらないので素人のボランティアでも間伐作業を行うことができる。



森林ボランティアの間伐作業

野田さんは、「間伐材も、間伐してもらうために植えられたのではない。役に立って欲しいと思って植えたはずだ。だから間伐した木は、昔植えた人の思いを生かして使ってあげたい。作ってしまった人工林なのだから、なんとか利用する方法を考えていきたい」と話す。

18年度から新たに始めた森林ボランティアは「月1回はやる」と決めている。間伐する山は、林家に「間伐をやらせてください」とお願いするのだが、今まで断られたことはない。そればかりか最近は「やってください」とお願いされるようになった。山に素人を入れるのは抵抗があるはずなのに、もりふれ倶楽部がいかにか信頼されている

かがわかる。

伐採などボランティア作業は、原則として交通費と燃料代程度の実費としている。それ以外の経費はいろいろな補助事業や委託事業を集めてやっている。「そんなに人気があるのなら、林家の利益にもなるのだし、有料にすれば運営費になるのでは」と聞くと「人を雇って山の手入れをできる余裕のある人は、既に森林組合などに頼んでいます。そんな余裕がなくて間伐できない人がいるからボランティアをしているのだ」と。その通り。

### 人集めに苦労はないが金集めは大変

昨日(9月3日)開催の講座には、NHK、地元テレビ、読売新聞が取材に来た。また韓国のテレビ局も間伐のドキュメント番組制作の取材に来たそうだ。「教室を開催する時は、新聞やテレビなどで紹介してくれるので、特に募集活動をしなくても定員が埋まってしまう。人気のある教室だとお断りしなければならない状態」なのだ。

「でも、これは今年からの話で、去年までは参加者集めに苦労した」そうで、そう聞いて少し安心した。

里山自然塾の講師は、ほとんどがもりふれ倶楽部の会員。ボランティアスタッフも多数が会員。昨日は7名が手伝ってくれた。「昨日の講座は、子供には少し危ないので、スタッフがいてくれて助かった」。

もりふれ倶楽部の会員は、1/3が定年退職組。ということは2/3は現役だ。20代も2~3人いる。特に30代と40代の人が多く、U・Iターン的人也多い。毎回12~13人程度が参加してくれる。

会で行うイベントは、ほとんど参加費は無料だが、いただける助成はありがたい。今年は、島根県の水と緑の森づくり税を使った補助金で『森林ボランティアの山仕事講座』をやった。道づくりから始め、5割間伐などとした。「よく、チョコチョコと間伐作業をして、単に『やりました』というものがあるが、うちではもう少し専門的なことをやっている」。今年はチェンソーや安全帯を使った本格的な伐採や枝打ちにも取り組んだ。それから、間伐時の危険なことを理解する体験や「ボランティアでそこまでやるか」ということまでやっている。



里山子ども自然塾（倶楽部のHPから）

『里山子ども自然塾』は、文部科学省の助成事業となっている。これについては、女性のメンバーが積極的にアイデアを出して活動しており、内容は、ほとんど中心メンバーにお任せ状態。「私は、あれを買ってくれと言われたものを了承する程度。もちろん予算がないからこれだけにしてくれとか言いますが」と野田さん。公園内のヤマモモでジャムを作ったりしながら、森の恵みを活かした活動をしている。『出張子ども自然塾』や『貸切型子ども自然塾』などの需要もあり、「中には刃物を使った教室もあるので、この道具は子供には危ないから別の道具を使って、など女性ならではの気配

りをしてくれる」。結構需要があるものだ。「最近では、大分信用されるようになってきました」。でも、「来年は、文部科学省の助成がなくなるので、別の事業を探している」そうだ。「助成事業のデータベースなどがあればいいのだが」と野田さん。

## 今後の活動目標

「これだけ参加者がいるということは、需要が結構あるということですよ」と聞いた。「やはり山に関心があるからじゃないでしょうか。若い人で毎回参加してくる人もいます。普通の会社員で林業と関係ないですが、すごい熱意です。これまでの活動で、これだけ人の輪ができたのだから、できれば石見の方に支部ができればいい」と考えている。

それから、「今は、助成金などに頼って活動しているが、やがては有料でも人が集まるイベントを行ったり、炭など活動で作ったものを売って資金にしたりして、少しでも自立できるようにしたい」そうだ。

でも自然にそうなる訳ではない。「いいものを作るため、企画段階に力を入れています。大体2ヶ月前から講師の人と打ち合わせをし、募集開始後は、適時参加者の種類を伝え、場合によっては企画の修正をしてもらうこともあります。とにかく講師とディスカッションをすることを大切にしています。そのため、冬場に企画を出してもらい、2月頃には翌年度の予定を作ります」。

事務局がある学習展示館は島根県の持ち物なので、今のところ県とのつながりが強いが、今年の里山子ども自然塾では、学童保育の観点から松江市にも協力してもらった。これからは市や他のNPOとの関係も深めていくそうだ。

また、今後は「団塊の世代向けの提案をしたい」ともくろんでいる。「お金はあるけど使い道がない。贅沢はしないが滞在型の旅行がしたいという人に、公園内のログハウスは平日空いているので、できれ

ば県などとタイアップし、都会に住む人たちに1週間程度滞在してもらい、森や林と触れ合ってもらいたい」。



みんなで修理したツリーハウス

ヒアリング終了後、会で修理したというツリーハウスに連れて行ってもらった。場所は森林学習展示館から歩いてすぐ。道路から遊歩道を降りていく。周囲は広葉樹林だ。「もともとは木が生えていなかったのですが、公園になってから植林したんですよ」と教えてくれた。

1分ほど歩くと、3本の木で支えられたツリーハウスが現れた。トムソーヤの小屋みたいだ。「修理する前は階段も壊れていた」らしいが、会員で間伐材を利用して階段をつけ、壁を直し、下にはテラスまで作ってしまった。「中に入ると窓から見ていると、鳥がたくさん見られます。

ただし蚊が多いのが難点ですけど」と笑う。確かに、10分もいなかったのに、いくつも蚊に刺されてしまった。

公園施設の管理など財源的な裏付けがあるにせよ、これだけのスタッフを抱え、毎月の講座やイベントをこなしていくためには、野田さんの裏方としての苦労は大変だと思う。でもお話を聞いていると、本当に楽しそうだ。

いい場所があり、いい雇用機会があり、いい仲間がいて、もりふれ倶楽部は本当に幸せ者だ。そう感じた。

## 22. 自立する「まちづくり活動」

### ー遊木民倶楽部



大島 隆司 会長

### 遊木の里

益田市内から国道 191 号を広島方面に走って約 30km。国道をはずれてすぐ、匹見川の支流赤谷川の橋をわたると、正面に広場が現れる。一見すると廃校になった小学校のグラウンドのようだ。正面と右側にある桜の大木が、余計にそれを感じさせる。



「遊木の里」全景

左側には畑があり、黒く被せられた土から湯気がでており、今朝も畑仕事をした跡がうかがえる。右側には、木を組んで作った舞台が、その奥には小屋が見える。

小屋まで歩いていくと、前には薪が積んである。中に入ると炭焼き釜がデンと座っていた。鳥の声、セミの鳴き声、風の音。それ以外は何も聞こえない。赤谷川から吹く風はとても気持ちいい。奥の山裾には湧水が溜まった池があり、おたまじゃくしの団体が泳いでいた。都会人が見れば、よだれが出そうなるやましい風景だろう。

この場所が『遊木民倶楽部』のフィールド『遊木の里』である。

一見するとグラウンドのように見えた空間は、実は、昭和 47 年の大水害後の土砂捨て場だったそうだ。益田市が含まれる島根県石見地域は、昔から大規模な水害に見舞われる土地柄で、昭和 47 年、昭和 58 年、平成 9 年には、それぞれ大きな被害が発生している。

### 大島隆司さん

大島隆司さん。『遊木民倶楽部』の会長さんだ。益田市の木工団地で家具工場を営んでいる三代目である。本人には言っていないが、顔や話し方は、タレントの島田紳介さんに似ている。

工場は新築工事中なので、プレハブ倉庫を改造した応接室でお話をうかがった。

最初に、朝訪れてきた遊木の里の風景についてお話をした。「炭焼き小屋もあっていいですね」と言うと「あれは、『夢山会（むざんかい）』という地元のお年寄りの会がやっているんですよ。あの窯で黒



炭焼き小屋の炭窯

炭を焼いて出荷しています。匹見は元々黒炭では全国の8割の産地だったそうですから」とのこと。遊木の里と地元の交流の深さが感じられた。

遊木の里は、前述のように洪水の土砂捨て場だったところだが、なぜ、あのような山の中に拠点を置くのか聞いてみた。

「我々が遊木の里の候補地を探している時、あちこちの町村が名乗りをあげてきました。その中で、あそこのイメージと国道に近いというアクセスの良さ、そして携帯電話が通じないということが決め手」になったそうだ。益田市匹見地区(平成16年11月匹見町が益田市と合併)

は昭和38年の豪雪で甚大な被害を被った後、過疎化が進み「過疎のモデルとして全国に紹介された」地域で、遊木の里の土地も、福岡に転出した人が所有していた。大島さんは地主さんを訪問し、土地を借りることにした。山も含め24,000坪。賃料はタダである。

## 遊木の里と遊木民倶楽部

遊木の里は「そこで何かをするため」の場所ではなく「遊ぶためにある」場所なのだそうだ。

「島根や全国でいろいろな森林活動が行われているけれど、どれも堅い。間伐作業などは確かに森林保全には有効だが、人が集まらない。人が気楽に集まれるよう訴え方と取り組み方を考える必要がある」と大島さん。

「だから、間伐や下草刈り自体を遊びにしてしまえばいい。ただし遊んでもらうためには、それにふさわしい整備が必要だ」。

たとえば、遊木民倶楽部では、自然体験のイベントをやっているが、昼食のおかずは自分たちで調達してもらう。まずヤマメを捕まえる。そして生きている魚の口から串を打つ。当然参加者が自分でやる。これができないとヤマメを食べられない。「自分のことは自分でやる。できない人、嫌な人は食べなくてもいい」。

この間、イノシシ鍋をやった。参加者の目の前で解体した。中には気持ち悪いと言って食べられない人もいたが、自然の中で活動するという事はそういうことだ。

イベントの時は酒を飲む。飲むと帰れない。そんな時は、近くにある日の里集落で民泊をすることになる。そういう協力体制も整っている。

遊木民倶楽部の誕生は平成12年。大島さんは、仕事柄森林とのかかわりも深く、林業指導員もやっており、県職員と森林の有効活用に取り組んできた。また元来アウトドア好きでもあった。

ところが行政の人と付き合ってみると「行政の人がいくらプロジェクトを作っても、自然の有効活用はできない」と思えてきた。「たとえば、木の利用を訴える役所は、机も建物もスチールと鉄筋で木を使っていないではないか」。

町の人が森林に対して理解が低い理由を大島さんはこう理解している。「国産材を使った家が少ない。これは国産材が高いと言われていたからだけど、なぜ高いのかという知識は町の人にはない。例えば自動車も高いけど、買う場合は、いろいろなところで知識を得て決める。洋服にしてもそう。だけど森林や自然については、知識がないのではないか」。そこで「知識がないなら学んでもらおう。それも楽しくなくてはいけない。楽しいことの一番は食べること。楽しく食べるには、まずお腹をすかせる。そのためには動くこと。動けばいろいろ疑問がでてくる。そうして自然を知っていく」方法を考案した。

大島さんは、この考え方を、付き合いのある行政職員などに伝えようとしたが、なかなか理解してもらえなかった。「行政は、『いい考えですが、何年で実現するのですか』と聞かれる。でも我々の活動ではそれについて結論を出すのは無理だ」。

悩んでいた時、高津川流域のフォーラムで、元林野庁長官の小沢普照さんの講演を聞いて驚いた。「自分の考え方とおんなじじゃないか」。そこで行政の人に聞いてみたら「小沢さんがそう言っていたのならそうなのかもしれない」ということになった。

大島さんは、当時、ハーブやクラフトなど木を使った素人の作家をプロにする活動をしており、月に1回、作家を集めた『遊展』を開催していた。遊木民倶楽部という名前は、その人たちと現在の遊木の里で地面にブルーシートを敷いて酒を飲んでいたときに「木で遊ぶ人のクラブだから」ということで決まっただけらしい。

遊木民倶楽部は、本当に活発に活動している。春には『春の恵み市』、夏には『森と遊ぼう』、秋には『秋の恵み市』、冬は『雪と遊ぼう』といったイベントを季節ごとに開催している。



今年の『雪と遊ぼう』（ホームページから）

また、匹見集落にあるかつての庄屋『美濃地屋敷』で、広島からショットバーのスタッフを呼んでカクテルを飲みながらのコンサートもやった。

今年8月12日には、遊木の里で、ジャズ、ベンチャーズサウンド、笙の奏者による夜のコンサートを実施した。終わった後には、花火師に特別に頼んで、ほとんどタダで花火を上げてもらった。川に挟まれた狭い平地なので、これまでこの地区で花火が上がった

たことはなく、地元の人たちは涙を流してよろこんだそうだ。

春には、遊木民倶楽部所有の移動式ピザ窯を広島駅前に持ち込み、ピザを無料で配って、遊木の里がある道川地区のPRもしてきた。

「雪山遊びでは、危険な場所に行かないように注意するのだけど、そういう場所にわざわざ行って雪の中に埋まってしまうのは大抵大人。子供は言われたことはきちんと守る。そういえば、今の大人たちは、自分たちが子供の時、そういう遊びをしてこなかったのではないか」

「以前、参加した子供たちに、一枚の画用紙と木工用ボンドを渡し、遊木の里にある素材を自由に使って絵を描いてもらったことがある。終わった後に品評会をして表彰したのだけけれど、『どうしてこんな材料を見つけたのか。こんなものがこういう風に見えるのか』と感激した。子供たちの発想力は素晴らしい。今度は養護学校の子供たちにやらせたい」

No.	日時	活動名	参加者	内 容
86	4月16日	第1回役員会	6	平成17年度の活動計画についての協議 平成17年度総会議案並びに春の恵み市についての協議
87	4月18日	春の恵み市 準備活動	2	資材等の準備
88	4月23日	定期総会 春の恵み市	100	「スギの木から和紙づくり」と称して、島根県森林インストラクターの協力を得て、スギの木の甘皮を利用した和紙づくり体験を行った。 また、自然の草花や小枝等を利用したスケッチ大会も行い自然とのふれあいを楽しんだ。 お昼には地元会員が現地調達した「山菜」12種類を天ぷらにして春の味覚を堪能した。
89	7月18日	第2回役員会	5	夏の体験活動(森と遊ぼう)に関する協議と資材の準備を行いました。
90	7月23日	第2回森と遊ぼう	130	吉田保育所の園児さんをメインゲストに木工体験とスギの皮を利用した和紙づくり体験、ヤマメのつかみ取りなどを行った。 当日は地元の「夢山会」の会員にも、炭窯からの炭出しと薪詰めの作業をしてもらい、地域住民との交流も出来た。
91	9月1日	H17年度緑の募金 公募事業採用決定		国土緑化推進機構から助成金交付決定の通知、昨年に引き続き「森林ボランティアの日」の協賛事業として、ボランティアを目指しての林業体験(枝打ち作業)を計画した。
92	9月30日	第3回役員会	3	緑の募金公募事業並びに遊木秋の恵み市の内容について協議。
93	10月15日	第4回役員会	4	遊木秋の恵み市の内容協議と遊木の里の草刈りをしました。
94	10月29日	前日準備	8	テント張り等の準備作業
95	10月30日	遊木秋の恵市	95	今年度は人工林の枝打ち作業(緑の羽根募金助成事業)を行った。 対象林はスギ林で面積は約20アール、手入れ不足で真っ暗な人工林が参加者の頑張り で、明るい人工林に早変わりした。 午後からは竹を使って水鉄砲と竹とんぼを作って遊んだ。
96	11月25日	第5回役員会	15	秋の活動の実績報告会にあわせて会費制での忘年会を開催した。
97	1月15日	第6回役員会	3	雪山遊びの活動内容についての打ち合わせをした。
98	2月3日	前日準備	5	積雪量は50cm、しかし、雪質はザラザラで最悪、と思いながら作業を続けていたところ午後3時くらいから待望の雪が降り始めた。
99	2月4日	第6回雪山遊び	90	今年も益田市を主体に広島県、山口県からと沢山の参加があり、そり遊びや雪上運動会 などで楽しい一日を過ごした。 地元会員が前もって特製の「カンジキ」を作成し、参加者は新雪の上を歩いた。 みんなで大きな「かまくら」を作ったり、宝探しや旗取り競争、子供も大人も大はしゃぎ。

#### 遊木民倶楽部 17 年度事業（会のホームページを編集）

遊木民倶楽部の活動には、二つのポリシーがある。「一つ目は、社会貢献がないとダメ、二つ目は、ビジネスにならないとダメ。名誉職としてやったり、助成金目当てでやるのはボランティアではない。やりたい人がやれる範囲でやるのがよい」。だから遊木民倶楽部の活動費用は会費とイベントの収益。行政からの助成金はなし。「くれればもらうけど」と大島さん。

遊木民倶楽部事務局長の青山静佳さん、実は県の職員である。会設立当時は益田農林振興センター勤務だったが、今は松江勤務。でも今でも「大島さん。この事業の企画には、こういう事業が合致すると思いますよ」とアドバイスしてくれ、ついでに企画書も作ってくれる。県職員だから活動しにくい面もある。だから大島さんの仕事は「彼らの大義名分が立つようにしてあげる」ことだ。

## 今後の活動

今後の活動について聞いてみた。

「まずは、活動の拠点が良い。泊まることができて活動できる建物。そのためには活動を継続して認知してもらうことが大切」だ。

「それから、これまでは山での活動だけだったが、山と海は密接に関係している。だから海もフィールドにしていきたい。山の人を海に連れて行き、地域交流をやりたい」。

遊木民倶楽部は、ボランティアだけどビジネス、環境教育だけど遊び、いい加減だけどポリシーはしっかり、フィールドはあるけど拠点が無い、などなど、世間に多く存在する自然・森林をテーマとしたグループとは、少し違っている。だけど、これが「いい（良い）加減」なのかもしれない。

## 23. 災い転じて福とする努力

### －阿武町林業振興会



白松 博之 副会長

#### 白松 博之さん

白松博之さん。車椅子の林業家である。彼のワンボックスに乗せてもらった時「ちょっと待って、車椅子を乗せるから」と片手で車椅子を持ち上げて後ろの席にしまいこんだ。「手伝いましょうか」と声をかけると「障害者を甘やかすと本人のためになりません」と笑いながら怒られた。

平成10年、枝打ち作業をしていた白松さんは、高さ9mから地面に落下した。「最初は頭から落ちたんです。これではまずいと思い、必死で体制を直して、結局腰から落ちました。ポキッという鈍い背骨の折れる音とともに猛烈な痛みが全身に走った。けれど周りの人に『絶対に動かすな』と叫んでいました。病院で麻酔を打たれるまでは意識がありましたよ」と笑っておっしゃる。ベッドで目覚めた時は寝返りも打てない状況だった。

下半身の感覚がなくなった白松さんは、当初あの集中治療室の窓から飛び降りたらどんなに楽だろうか考えた。でも、動けないので出来るはずもなく、それに必死で看病をしている妻を裏切るようなこ



白松さんの民宿「樵屋」のホームページ

とは出来ないと考えた。そんなもどかしい毎日を過ごしていたある日、病院のベッドの上でふと思いついた。「何も出来なくなったけれど、そうだ、自分には、あり余る時間がある」と。そのとき、世の中にはインターネットというものがあるって、自分の考えを全世界の人に伝える手段があることを知った。

そこで、奥さんに頼んでパソコンと本屋でホームページ作成の本を買ってもらい、自分のホームページを作り始めた。今から8年前のことだ。その当時は、今のような便利なホームページ作成ソフトもなく、「タグ辞典」と首っ引きになりながら、プログラムしてい

った。

ようやくホームページが完成した。しかし「さてよ、これをどうすればいいんだ?」。白松さんは通信ソフトのこともプロバイダのことも知らなかったのである。

このような無謀な失敗を繰り返しながら、ようやくホームページをインターネット上に載せることが

できた。

するとどうだろう。全国からたくさんの返事がきた。「歩くことはできなくても、情報をやりとりすることは十分にできる」と思った。白松さんの第二の人生スタートだ。

そこから鬼のようなりハビリをした。通常半年程度かかる入院生活を3ヶ月で退院。まったく感覚がなかった下半身にも、ようやく少しずつ感覚が戻ってくるようになった。

「退院して家で作業をしていると女房が足から血がでていっていると言います。見ると本当に血がでていました。どこかにぶつけたと思うのですが、感覚がないのでわからないんです。それから、溶接機を使っていて、火の粉が飛んで足が火傷だらけなんですけど、これも全然感じないんです。麻痺していることの怖さを感じましたね」。

怪我をする前、白松さんは、水田4haと畑6haを耕作していた。そして二人の息子さんと一緒に野菜栽培販売の有限会社を作ろうと思っていた。その矢先の事故だった。

## 白松さんの活動

白松さんは、今、山・里・町にかかわるさまざまな活動をしている。これから、それを順番に紹介してみよう。

### ○農業

白松さんの出荷用の畑は山の中にある。この地域は山が平らで、特に山頂（一見すると丘）付近は畑



白松さんの畑（奥が防風林）

に適している。白松さんは無機肥料や農薬を使わない自然農法を目指しておられる。「作付けは1年に1回だけ。一度収穫したらあとは休ませる。そうすると土が元に戻る」らしい。一見すると雑草だらけの畑だが、健康な土から健康で安全な野菜が生産されているのだ。

畑の北側には防風林が植えられているのもこの地域の特徴だ。近くに国営農場があり、白松さんも息子さんのために借りたことがあるのだが「造成時に大切な腐葉土が捨てられたり、風邪に対して畑の向きが考慮されておらず、暴風ネットはあるものの防風林も整備されておらず、結局野菜作りはだめで

した。現地を知らずに畑を造成したのだろう」ということだった。栽培しているのは主にチンゲン菜、白菜、レタスである。

### ○阿武町林業振興会副会長兼事務局長

阿武町林業振興会は、昭和53年に阿武町内にあった5つの林業組織を統合して誕生した。白松さんは28歳から38歳まで10年間会長を務めた。「会を発展させるためには一番詳しいものが事務局としてささえる必要性を感じていたことと、長として10年以上勤めることは会のマンネリ化を招くという持論だったので」それ以降は副会長兼事務局長として会を支えている。

会では、集約育林への取り組みや効率的な間伐の実践など『通常業務』の他に、全国的にも注目される活動をいくつも実施している。

その一つが『間伐材漁礁』である。間伐材を海に沈めて魚の住処にしようという試みで、今から20

年近く前、町の異業種交流の中で知り合った漁業関係者に「山に捨てられている間伐材を何とか利用できないか」と、魚礁の設計図を書いて相談に行った。提案当初は「漂流物となった場合の責任はどうする



間伐材魚礁（阿武町林業振興会HPから）

のか」などで許可がおりなかったが、漁協青年部の熱心な説得活動などにより平成7年に21基を皮切りに6年間で600基の魚礁が設置された。平成11年には全国林業グループコンクールで農林水産大臣賞を受賞している。この間伐材魚礁は、現在、全国に広がり31都道府県の漁場で設置されている。

バカな質問をしてみた「木は沈むのですか?」。答え「木の中の隙間に空気が入っている間は浮きますが、水に浸けて空気が抜ければ沈みます。同じ繊維でできたタオルも最初は浮きますが、その

うち沈むでしょう」。

もう一つの活動が都市住民との交流事業である。4月には自然観察と山菜狩り、8月には間伐体験と木工教室、10月には自然探訪ときのご狩りといった体験交流を行うとともに、12月には「ふるさとあったか便」として6年間大都市で開催している。今まで神戸市や福岡市で開催し、今年は北九州市黒崎商店街で開催する。

そのきっかけは昭和58年の雪害で山が大きな被害を被り、林業離れが起こったこと。そこで会では林業の楽しさ面白さを再発見しようと考え、それを町の人たちとの交流から見つけようとした。「林業者が木を語らないで誰が語るのだろう。もっと町へ打ってでようよ」と白松さんは会に働きかけて実現した。福岡市筥崎のイベントはこれまで5回開催しているが、その前には阪神淡路大震災からようやく立ち直った三宮の東遊園地（神戸ルミナリエ開催地）を借り切り2月に開催したこともある。

昭和58年の雪害の時は、会で被害状況の分析を徹底的にやった。仲間たちと5日間ヤケ酒を飲み続けた後、どの山の木が倒れ、どの木が残ったかを一本一本調べた。「雪国の山に行ったら、杉の枝が下向きになっているんですね。こんなことも木の観察をして初めてわかりました」。

#### ○有限会社『あったか村』代表取締役

あったか村は文字通り『あったかい村』を作る会社である。インターネットで全国の人たちと交流した白松さんは、都市での生活に疲れている人、塗料や合板など化学物質の家に住むことができない人がたくさんいることを知った。

そこで白松さんは、不在村地主の所へ車いすで度々通い、町内で過疎になった村を丸ごと借りた。山林9.1haを買い、耕地1.8haを長期契約で借りた。平成15年9月1日有限会社あったか村誕生。「会社を立ち上げた直後に共同出資者が脱退して一時は本当に落ち込んでいた」が、周りの理解者に支えられて活動を開始した。

あったか村の事業は、まず、地元の木材を使った在来工法住宅の建築と化学傷患者(通称『化学物質過敏症患者』)用の避難住宅の建築と賃貸。

現在は、とりあえず現地に『事務所』と称する1戸が完成し、現在化学障害者の避難住宅の建設中だ。この家、窓の大きさがバラバラなのだが、これは規格外のサッシをもらってきたから。また随所に間伐材を使用してコストを抑えている。建てられた住宅は、20年分の家賃を前払い方式で払ってもらい入居

してもらおう予定である。「20年分の家賃といっても、土地も安いし建物も安く作っているのが都会より断然安い」そうだ。



あったか村の『事務所』

あったか村では、この地に定住・双住の住宅を10戸程度建てる予定で、そのうち、2~3戸を化学被害者の住宅としてあてる予定でいる。

もう一つの事業はトイレの設計施工と、木造トイレの製造販売。

インターネットで全国の人とやりとりしていて、白松さんは、障害者から「公衆トイレが非常に使いづらい」という声をたくさんもらった。

そこで、障害者仕様に改造したワンボックスに乗り、山陽・中国・九州自動車道のサービスエリアやパーキングエリアにあるトイレを全部調べた。

「それらのトイレには、本当に身障者に優しいトイレがたくさんありましたよ。たとえば手すりですけど、車椅子から便座に移る時、体の向きを90度変えるんですが、ちょうどつかまりたい位置に手すりがついていないんです」「どうしてそんなトイレがあるのか設計士に聞いてみたら『我々は定められた基準通りに作っているのだから』という答えでした。要は実態を知らずに作っていたんです」。

白松さん自身も各地のイベントに出かける度にトイレで苦労する。特にFRPの仮設トイレには閉口している。そこでバイオ技術と地元の木材を使った木製組み立てトイレを考案した。

また、排水を流さず土壌に返す『土壌浄化方式(無放流方式)』の木造トイレも手がけている。このトイレは通常の浄化槽トイレに比べ点検の手間が少ないので「経費削減を目指す行政から結構話が来ている」そうだ。

### ○山里フォーラムのんたの会世話人

上の、あったか村の運営を支えているのが、あったか村誕生と機を一にして設立されたボランティア組織『のんたの会』である。この会は、まちで夢が果たせなかった人が、このあったか村のフィールドを活用して、山羊や羊を飼ったり、ソバや麦なども作っている。『のんた』は周防地域の方言で「～だよね」という意味。

のんたの会は、「あったか村をみんなで力を合わせてつくとともに、人、地域、地球の健康と活力を取り戻し、新しい発想と夢を広げてゆくことを目的」としている(会の規約より)。

活動内容は、村づくりのための行事、講演会や講座、会報(メールマガジン)の発行、あったか村のホームページ運営などを行っている。

設立は平成15年11月。あったか村自体は社長の白松さんと営業の人がいるだけなので、実質的にはのんたの会があったか村を支えている。

### ○農家民宿「樵屋」主人

平成17年7月に山口県で最初の農家民宿として営業を開始した。白松さんの住宅をそのまま宿として利用しているが、ちゃんと旅館業法や食品安全法の許可も取っている。もっとも「こちらの趣旨がなかなかわかってもらえず、許可をもらうまでは本当に苦労した」そうだ。宿泊用の部屋は2部屋。とい



農家民宿『樵屋』 右端の車が白松さんの足

っても玄関の横にある座敷と仏間だ。定員は 10 名。ただし 1 日に一グループしか泊めない。一人旅であろうと予約を入れれば満室になる。そのあとから団体の申し込みがあっても丁重にお断りしている。

白松さんの民宿開業に刺激されて、現在山口県内のグリーンツーリズム型民宿は 5 軒あるが、その内、阿武町には海岸部の漁家民宿と併せて 3 軒ある。

ホームページ以外ではまったく PR していないが、ホームページを見た人や口コミで全国から宿泊客がやってくる。農業体験をしたい人はする、のんびりしたい人は何もしない、語りたい人は夜遅くまで白松さんと語り合う。夜は真っ暗体験もできる。すぐ近くで

夜光虫が見られるそうだ（ただし実物は見ない方がいいらしい）。

もちろんバリアフリー対応。車椅子トイレも別に完備している。

天気がいい日は庭で夕食となる。

この宿、宿泊客にとっては体と心のリフレッシュになると同時に、白松さんにとっては「自分の知らない情報を持ってきてくれる貴重なお得意さん」である。

これからの中山間の活性化は、地域住民の前向きな姿勢と、豊かな自然の活用方法にあるのではないだろうか。外からもたらされる情報や人と、お爺ちゃん、お婆ちゃんの持つ知恵が合わさった時、それが田舎の活力となり、うねりとなって広がってゆく原点がこんな所にあるのかも知れない。

## 24. 梨下に冠を正す ー梨下村塾



永嶺 克博 塾長

### 二十世紀梨のふるさと秋吉町と永嶺さん

山口県は、明治 37 年、鳥取県と並んで二十世紀梨が最初に栽培された土地だ。鳥取県で栽培された最初の梨の木はすでに実をつけなくなったが、山口県の梨の木は 40 本程が健在で、毎年実をつけている。平成 16 年には百周年のお祝いをした。東京の有名パーラーでは、それにあやかり『長寿梨』という名前で永嶺さんの梨園で栽培した梨を売り出している。

永嶺さんは梨の専門農家である。町内 3 箇所 2.1ha の梨園を持ち、主に二十世紀梨を栽培している。

秋芳梨生産販売協同組合では 8 月下旬から梨の出荷が始まる。しかし最盛期 80 人ほどいた組合員は現在 47 人。生産額も 1,600 トンから 700 トンに減少している。

幸い、永嶺家は、息子さんが鳥取大学を来年卒業し、梨農家としてスタートすることになったが、後継者不足は否めない。I ターン就農者も昔から結構いたが、二十世紀梨は病気に弱いため、なかなか軌道に乗らなかった。しかし、最近二十世紀梨を改良した病気に強い品種が開発されたので、引き続き営農者の募集をするという。

「I ターンの人用の梨園は別に用意されているのですか」と聞いてみた。「それが難しい。梨農家には高齢者が多いのだが、農家数が減っているのだから、作れる間は作ってもらっている。なので、常時空いているわけではなく、突然に『作るのを止めた』という情報が入り、そこから就農者を探さないといけない。また作りやすい梨園とそうでないものがあり、苦勞する人もいます。本当ならば新規就農者用に梨園を造成すればよく、鳥取県では実際に行政が支援して農協が実施しているところもあるので、ここでもやってみよう」とのことだった。

### とってもゆかいな秋吉台ミーティング

永嶺さんは、このちょっと変わった名前の実行委員会の発起人で事務局を担当している。



選果場の前に建つ秋吉梨百年記念のレリーフ

平成4年のこと。その翌年、秋芳町を舞台に第35回全国自然公園大会が開催されることになっていたのだが、県からは「ハードはいいが、ソフトが少し足りない」と言われた。自然公園大会については、県はPR効果が高いと積極的だったが、地元住民には「自然保護で飯は食えない」という意識があり、あまり乗り気ではなかった。

そこで、県職員の若手グループ『ぶちええ山口を広める会』と町の若手有志が集まって話し合いを持った。当時、町内にはいくつものまちづくりグループが存在しており、永嶺さんもその一員だった。議論は何度も重ねられ、そこで「秋吉台における新しい人と自然の共生と調和のあり方を探る」という目的のもと、秋吉台の山焼きの前日に「とってもゆかいな秋吉台ミーティング」を開催することとなった。



ドリーネ耕作（山口県のHPから）

平成5年2月20日の第一回ミーティングは、シンポジウム形式で行われた。このイベントは、第一回は『ぶちええ山口を広める会』主催だったが、第二回からは実行委員会形式で開催されている。第三回からはワークショップ形式に移行し、以降毎年開催されている。それから「啓発ばかりじゃつまらない」ということで、平成8年からは、秋吉台の石灰岩台地特有の地形『ドリーネ』を活用し、かつては盛んに行われていた『ドリーネ耕作』でそばを栽培し、収穫したそばを打って食べるイベントも行っている。この結果、秋芳町は現在、山口県一のそば栽培面積となっている。

会のキーコンセプトは『Wise Use』（かしこい利用）。単純な保護でもなく、開発でもなく、人と自然の共生・調和を目指して活動している。

平成11年には、国土庁（現国土交通省）の全国地域づくり表彰の全国地域づくり推進協議会長賞を受賞し、これを機に平成13年には『全国山焼きサミット』を開催している。

また、秋吉台では、毎年2月に山全体に火を放つ山焼きが昔から行われている。山焼きにより、かつて木が生い茂っていた秋吉台は農地として生まれ変わった経緯がある。ただしその際、山焼きエリアの外に火が行かないよう、境界部分に植物を予め伐採して防火帯を作る必要がある。防火帯は幅7m長さ17kmに及ぶ。農業従事者が減り、また高齢化が進み、山焼きの作業が大きな負担となっていたのだが、山焼きサミットをきっかけに、山口県が牛の放牧による山焼きの防火帯設置の実験を開始し、山焼き負担の軽減に協力することとなった。

「秋芳洞は天然記念物に指定されており、自然のままの姿が観光資源になっている。だから人が入れれば破壊が進む。しかし観光面からは客に来てほしい。秋吉台は国定公園で、山焼きをして人が手をいれないと森林に戻ってしまう。だけど高齢化や過疎化で手が回らない。この相反する二つの資源を私たちは守っていかなければならない」永嶺さんは語る。

## 梨下村塾

梨農家としての永嶺さんの活動が、どこかで聞いたような名前『梨下村塾』である。

平成元年、永嶺さんの子供さんが通っていた小学校から、環境教育の一環として子供たちに梨の栽培を教えてほしいというお願いがあったのがはじまり。それ以降、子供さんの卒業後も延々と続いている。もちろん今年も梨園には、子供たちが世話をしている梨の木があった。



子供たちが梨にかけた袋

梨栽培学習は、梨の人工授粉から収穫まで年間 7 日間。子供たちはグループに分かれ、それぞれ分担して作業をする。永嶺さんは「ただ農作業をしてもつまらない」ということで、たとえば、採取した花粉を顕微鏡で見せ、花粉が発芽する様子を実際に教えたりということもやっている。

梨園に連れて行っていただくと、子供たちが担当する木にはグループ毎に「〇月〇日小袋かけ」などの記録と担当した子供の名前が書いてある。また収穫間際の梨には子供たちの名前とメッセージが書かれた袋が掛けてあった。木の下にはわらが敷いてあったが、これも子供たちの作業なのだそうだ。

永嶺さんは、今年、子供たちに実験をさせた。

ア．摘果せずに全部実らせたらどういう梨ができるか

イ．梨の花は通常 8 つの花が固まって咲き、そのうち一つだけを残すのだが、二つ残したらどうい  
実ができるか。

ウ．8 つの花のうち、何番目の花を残せば一番おいしい梨が実るか。

アは、既に実証済みだった通り、結局実は大きくなり食べられなかった。

イは、大きさは 1 個の場合と変わらなかったが、甘さが足りなかった。

ウは、1 番花は扁平な実で筋が入ったが甘かった。8 番花は逆に縦長で筋が入り甘くなかった。3~5 番花がちょうど良い実になった。

このうち、イとウは、これまで誰もやったことのない実験で、経験則で語られていたことが検証された。特にイは、これまでは「二つ残すと実が小さくなる」と言われており、新発見だった。

「子供たちには梨農家の子供もいて、自分の家の梨は食べないが、梨下村塾で作った梨は食べる。また作業は縦割りなので、上級生が下級生を指導することで教育効果もある」そうだ。

この梨体験教育は山口県でもここだけで、全国から視察に訪れる。また「先生の間でも、別府小学校に行けば梨に詳しくなるが勉強も大変という評判になっている」そうだ。

梨栽培学習は、4 年生~6 年生が担当する。下級生にはそば体験をしてもらっている。

## 秋吉台・秋芳洞を活かしたグリーンツーリズムとエコツーリズム

永嶺さんは、地産・地消を中心とした農林業者や消費者などの協働による県民運動を推進することを目的として平成 13 年に誕生した『やまぐち食と緑の県民フォーラム実行委員会』（事務局は山口県農政課）に副会長・企画部会長として参加し、その中でグリーンツーリズムとエコツーリズムを担当している。

山口県のグリーンツーリズムは、長門市俵山温泉が外湯と農家民泊と農家レストランを組み合わせた湯治型のものを、また、阿武町では意識の高い個人農家や漁家が民泊を行っており、大島町ではみかんの農作業支援という形のグリーンツーリズムを目指している。

ただし、永嶺さんは、農家民泊について、「農業と民宿との共存はなかなか難しいのではないかと。阿武町の白松さんの場合は後継者がいるので問題はないが、そうでない場合は、そのうち農業部門がおろ

そかになってしまわないか心配」と考えている。

秋吉台でもグリーンツーリズムをやるかと去年から農家の人に集ってもらい企画している。秋吉台周辺はゴボウの産地なので、ゴボウ掘り体験などでやりたいそうだが、永嶺さんは「農家はありのままの農業をやり、観光業者などが農家と連携して体験などの企画をするのがよい。そうすれば農家の負担が少ない。都会の人たちのニーズも多岐にわたっており、そういうことは地域エージェントのような専門業者を作り、そこに任せておくべきではないか」と考える。

また、「これから、エコツーリズムやスロツーリズムなどが主流になっていくと思うので、これらも睨みながら進めていきたい」とも言う。

しかし、「県民フォーラムに参加している学者の委員は、じっくりやっていけばよいと発言するが、この時代のんびりしていると事務局が持たないのではないか。それと、私はグリーン、エコ、スロツーリズムを統合して広域でやりたいと考えているのだが、行政同士は情報交換が足りない。他の市町村のことを知らないし、連携して相互にやっていくのが難しい」と手厳しい。



未公開洞窟の探検（秋吉町のHPから）

エコツーリズムについては、秋芳洞の洞窟などはインタプリタがいないと探検は無理なので事業としての条件は知床や屋久島と遜色ないが、自然保護などとの調整が難しい。これについても「学者の方々はボランティアをじっくり育成していくべきだと発言するが、インタプリタを若者の定着策として活用していくためには有償とせざるを得ない」と永嶺さんは主張する。

以前、秋吉台科学博物館の庫本先生らをインタプリタに、普段は入れない洞窟を探検し、昼食は秋吉台で採れた山菜を食べるエコツアーを試行したところ、20 数名が参加して好評だった。「たとえば、このツアーを参加費 5,000

円でやれば十分雇用の場にできる」。

秋吉台は石灰岩も採れるが、銅や銀も産出する。奈良の大仏に使った銅を出した銅山もある。秋吉台には、洞窟、鉱物、動物、植物それぞれに特徴があり、これらを研究している人もたくさんいる。この人たちを活用すればエコツアーも十分企画できるという。

農家民泊に関しても、集落営農や法人化が進むと空き家がでてくるが、空き家を活用しようとしても「仏壇があるから」「時々帰ってくるから」ということで貸してもらえないのが現状だ。永嶺さんは、法人化した組織が空き家を管理し、農家民泊の世話をしていけば、農家は農業に専念できるしグリーンツーリズムを進められるのではないかと提案している。

### 農業支援型NPO法人 学生耕作隊

秋芳町では8月下旬から梨の出荷が始まる。梨の選果場には毎日170人の作業員が必要。うち半数以上は一般の人に入ってもらっている。4年前に山口大学の学生が「学生耕作隊」を作った。現在はNPO法人化されている。現理事長の近藤紀子さんが中心となって農家支援を目的の組織を作った。人材派遣が中心で当初はボランティアに近い活動だった。

永嶺さんが山口大学の先生と交流していたとき、学生の農業体験について相談を受け、8年ほど前に受粉作業を体験してもらった。近藤さんはその時の学生で、この体験を卒論にした。大学院の時に学生

耕作隊を立ち上げ、卒業してからNPOに。リタイアした人たちのシニア隊もある。

選果場にも耕作隊のメンバーが1日25~30名アルバイトで参加している。

アルバイト料は安い、夏休み中ということや「梨食べ放題」につられて参加しているようだ。



学生耕作隊活動風景 山口県広報誌から

受粉作業は誰でもできるが、摘花作業や袋かけは短期勝負で効率が求められ、慣れないと難しい。また学生は土日しか来られないので継続した労働力にはなりにくい。そこでシニアが活躍する。ただし、理念的には学生のボランティアに近い形が望ましい。

永嶺さんは、今、食と緑のフォーラムの第3部会を担当しており、農業の担い手づくりの企画をしている。シニアを対象に農家体験をやりたいのだが、事務局は会員1万人を超える会の運営で余裕がない。そこで耕作隊に農家体験の世話を委託することにした。今年はテストで来年から本格化していく予定である。

この反響は大きく、この活動が全国に広がりつつあり、近藤さんは全国へ講演に出かけている。耕作隊の運営は苦しいらしいが、是非頑張ってもらいたい。

今は、学生耕作隊と県との情報交換やすり合わせが

うまくいっていない面があり、双方が永嶺さんに相談にくる。「行政には信頼して任せること、耕作隊には適宜情報を行政に知らせることが必要ではないか」と永嶺さん。

耕作隊には永嶺さんの梨園での体験で卒論を書いた人が3人いる。いろいろな学生と付き合っているので「大学の先生よりも学生に詳しく」なってしまった。

工作隊は指定管理者制度で3つの農林業関連施設の管理を任されたので、この施設を拠点に新たな活動をしていきたいようだ。

最後に、永嶺さんから農業を志す人への忠告をいただいた。「これから農業をやる人には、昔のように作る技術だけでなく、営業や経理などオールマイティの能力が求められる。だから、単純に世襲でできるものではない」。